

小佐々町文化財調査報告書第1集

# 古 田 遺 跡

1985

長崎県小佐々町教育委員会

小佐々町文化財調査報告書第1集

# 古 田 遺 跡

—長崎県北松浦郡小佐々町所在の遺跡—

1 9 8 5

長崎県小佐々町教育委員会



古田遺跡空中写真と遺跡遠景



## 発刊にあたって

このたび、当町古田遺跡に関する発掘調査の報告書を刊行することになりました。

神崎地区は本町の西側に位置し、西方へ半島状に突出したリアス式の複雑な海岸線で、ほとんどが岩礁であり、その岬の突端が日本本土最西端の地となっています。

古田遺跡は、その裏手の狭い谷あいに、砂丘が発達してできた細長い地形で営まれた、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡です。

北には、九州西岸では北限自生地と言われる「ハカマカズラ」の下島。南には「淡水貝化石層」の野島等、西海国立公園の一角を形成する島々が点在しています。

遺跡発見のきっかけは、県文化課によって実施された昭和58年度遺跡周知事業の際、発見されたものですが、昭和の初期、イモがまを掘る際、人骨が出土したという話もありました。

遺跡の北側は漁港として埋立て、整備され、また宅地等の開発が進行しつつある現状から、今回は遺跡の性格や拡がりを調べることにしたものです。

出土品については、別記のとおりですがその中でも古墳時代の人骨一体が出土したことや、朝鮮半島の土器等が出土したことは、本調査の大きな成果の一つです。

これらの出土品は、この地で生活を営んだ先人の面影を偲ぶに足る貴重な文化遺産だと思います。

私達はこのような過去の偉大なる産物を、大切に保存し、後世に伝える使命を課せられないと確信します。

この度の発掘調査に際し、種々ご指導とご助言を賜りました県文化課、そしてこの調査にご協力いただいた地主の方々、更に炎天下のもと作業に従事していただいた皆さん方に衷心より感謝の意を表し、あいさつといたします。

昭和60年3月1日

小佐々町教育長 久保田 實

## 調査関係者

小佐々町教育委員会 久保山 実 教育長  
野田 国男 教育次長  
橋川 龍二 公民館主事（現町総務課）  
久田 利治 社会教育主事  
金子 和代 総務係

長崎県文化課 安樂 勉 文化財保護主事（調査担当）  
町田 利幸 文化財調査員（調査担当）

調査協力者 長崎大学医学部解剖学第二教室 松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二  
渡辺由里子・水町裕美・赤瀬孝子・塚元春美・平戸 静・森川美保子  
松尾美代子・細田純代

調査外業 岡本富子・松山ハマ子・谷川静子・林ハツ子・岡本好子・寺崎稔  
後藤トシ子・織田和恵子・村田ミドリ・中村真子・長嶋和代・酒井由美  
吉永里美・森美砂子

調査内業 森洋子・川口歌子

本報告にあたって、毎日猛暑の中調査作業に従事された作業員のみなさん、また器材置場を提供された鴨川新次郎さん、その他多くの方々の御協力をいただき、無事調査が行われたことをここに、心より謝意を表します。

## 例　　言

- 1 本書は、長崎県北松浦郡小佐々町楠泊免古田に所在する古田造跡の範囲確認調査報告書である。
- 2 調査は国庫、県費の補助を受けて、小佐々町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、小佐々町教育委員会を主体とし、長崎県文化課が協力して実施した。
- 4 本書の執筆は分担して行い、執筆者は本文目次の項および各項末尾に記載している。
- 5 図版作成にあたっては、それぞれ執筆者が行ったが、遺物写真、古墳時代の土器トレースは藤田和裕氏の協力を得た。
- 6 遺物の写真図版はすべて約1/2で掲載する。
- 7 本遺跡に関する図面および写真類は、長崎県文化課が保管の任にあたっている。
- 8 本書の編集は町田が行い安楽が補佐した。

## 本文目次

### I はじめに

(1) 調査に至る経緯.....	1	(安楽 勉)
(2) 地理的環境と周辺の遺跡.....	3	( " )

### II 調査

(1) 調査の概要.....	7	(安楽 勉)
(2) 上層.....	8	(町田利幸)
(3) 遺物.....	12	(安楽 勉)
1 繩文時代の土器.....	12	( " )
2 繩文時代の石器.....	18	( " )
3 弥生時代の土器.....	21	( " )
4 古墳時代の土器・鉄器.....	23	(町田利幸)
(4) 古墳時代の遺構.....	37	( " )
(5) 古墳時代の遺物分布状況.....	39	( " )

III 長崎県古田A遺跡出土の古墳時代人骨.....	51	(松下孝幸)
----------------------------	----	--------

IV おわりに.....	61	(安楽 勉)
--------------	----	--------

## 挿図目次

第1図	古田遺跡位置図（安楽作成・藤田製図）	1
第2図	遺跡周辺地形図（安楽作成）	2
第3図	町内遺跡分布図（安楽作成）	5
第4図	調査区域図（町田作成・藤田製図）	7
第5図	土層実測図①（町山作成・藤田製図）	9
第6図	上層実測図②（町田作成・藤田製図）	11
第7図	縄文土器実測図①（安楽実測・製図）	13
第8図	縄文土器実測図②（安楽実測・製図）	15
第9図	縄文土器実測図③（安楽実測・製図）	16
第10図	縄文土器実測図④（安楽実測・製図）	18
第11図	石器実測図①（安楽実測・製図）	19
第12図	石器実測図②　凹石・磨石・石皿実測図（安楽実測・製図）	20
第13図	弥生土器実測図（町田実測・安楽製図）	22
第14図	土師器実測図①（町田実測・藤田製図）	26
第15図	土師器実測図②（町山実測・藤田製図）	27
第16図	土師器実測図③（町田実測・藤田製図）	28
第17図	土師器実測図④（町田実測・藤田製図）	29
第18図	土師器実測図⑤（町田実測・藤田製図）	30
第19図	土師器実測図⑥（町田実測・藤田製図）	31
第20図	土師器実測図⑦　石錘・鉄器・土鍤実測図（町田実測・藤田製図）	32
第21図	須恵器実測図①（町田実測・藤田製図）	33
第22図	須恵器実測図②（町山実測・藤田製図）	34
第23図	朝鮮半島系の土器（町田実測・藤田製図）	35
第24図	出土人骨実測図（町田作成・中谷製図）	37
第25図	遺物分布状況図①（町田作成・製図）	40
第26図	遺物分布状況図②（町田作成・製図）	41
第27図	古田遺跡編年図（町山作成・製図）	49
第28図	調査区域と各時代の括がり（安楽作成・製図）	66

## 表 目 次

表 1 土師器① (町田作成) .....	42
表 2 上師器② (町田作成) .....	43
表 3 土師器③ (町田作成) .....	44
表 4 上師器④ (町田作成) .....	45
表 5 土師器⑤ (町田作成) .....	46
表 6 土師器⑥ (町田作成) .....	47
表 7 須恵器 (町田作成) .....	48

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡全景 (町山撮影) .....	70
図版 2 古田B遺跡 (町田撮影) .....	71
図版 3 調査・出土状況 (安楽撮影) .....	72
図版 4 遺物出土状況 (安楽撮影) .....	73
図版 5 土層 (町田撮影) .....	74
図版 6 土層 (町山撮影) .....	75
図版 7 調査・出土状況 (安楽撮影) .....	76
図版 8 1号人骨出土状況 (安楽撮影) .....	77
図版 9 説明会・遺物出土状況 (安楽・町田撮影) .....	78
図版10 遺物出土状況 (安楽撮影) .....	79
図版11 調査・出土状況 (安楽撮影) .....	80
図版12 織文土器① (藤田撮影) .....	81
図版13 織文土器② (藤田撮影) .....	82
図版14 織文土器③ (藤田撮影) .....	83
図版15 石器① (藤田撮影) .....	84
図版16 石器② (藤田撮影) .....	85
図版17 弦生土器 (藤田撮影) .....	86
図版18 上師器① (藤田撮影) .....	87
図版19 土師器② (藤田撮影) .....	88

図版20	土師器③ (藤田撮影) .....	89
図版21	土師器④ (藤田撮影) .....	90
図版22	土師器⑤ (藤田撮影) .....	91
図版23	土師器⑥ (藤田撮影) .....	92
図版24	土師器⑦ (藤田撮影) .....	93
図版25	土師器⑧ (藤田撮影) .....	94
図版26	土師器⑨ (藤田撮影) .....	95
図版27	土師器⑩ 鉄器 (藤田撮影) .....	96
図版28	須恵器① (藤田撮影) .....	97
図版29	須恵器② (藤田撮影) .....	98
図版30	朝鮮半島系の土器 (藤田撮影) .....	99
図版31	頭蓋 (松下撮影) .....	100
図版32	下顎骨 (松下撮影) .....	101
図版33	下肢・上肢骨 (松下撮影) .....	102

## 人骨挿図目次

第1図	古田遺跡位罫図 (松下作成・製図) .....	51
第2図	1号人骨残存状態, 2号人骨残存状態 (松下作成・製図) .....	52
第3図	2号人骨残存状態 (松下作成・製図) .....	52
第4図	偏差折線 頭蓋 (松下作成・製図) .....	56
第5図	ベンローズの大きさ距離と形態距離, 頭蓋 (松下作成・製図) .....	57

## 人骨表目次

表1	出土人骨一覧（松下作成）	51
表2	脳頭蓋計測値（松下作成）	53
表3	鼻根部計測値（松下作成）	54
表4	顎面頭蓋計測値（松下作成）	54
表5	上腕骨計測値（松下作成）	57
表6	大腿骨主要計測値（松下作成）	57
表7	脛骨計測値（松下作成）	59
表8	推定身長値（松下作成）	59
表9	推定身長値（松下作成）	59
表10	脳頭蓋計測値（松下作成）	60
表11	顎面頭蓋計測値（松下作成）	60
表12	鼻根部計測値（松下作成）	61
表13	下顎骨計測値（松下作成）	61
表14	鎖骨計測値（松下作成）	61
表15	肩甲骨計測値（松下作成）	62
表16	上腕骨計測値（松下作成）	62
表17	桡骨計測値（松下作成）	62
表18	尺骨計測値（松下作成）	62
表19	大腿骨主要計測値（松下作成）	63
表20	脛骨計測値（松下作成）	63
表21	膝蓋骨計測値（松下作成）	63
表22	腓骨計測値（松下作成）	63
表23	四肢骨比（松下作成）	63
表24	歯の計測値（松下作成）	63

## I はじめに

### (1) 調査に至る経緯

県文化課では昭和56年度から県下各地区において遺跡周知事業を計画的に実施して、埋蔵文化財を中心とした見直しと、新規の登録台帳を作製している。昭和58年10月小佐々町においても5日間の日程で遺跡分布調査を実施した。

古田遺跡はこの事業の中で新たに発見されたもので、楠泊免245番地外に所在する。小佐々町の中央からやや北西部に位置する神崎地区は半島を形成して西に伸び、その端部は北緯 $33^{\circ}12'51''$ 、東経 $129^{\circ}33'17''$ の位置にあたり日本本土最西端の碑が建立されている。この周辺は北九十九島と言われるように大小の島々とリアス式の入り組んだ沈降海岸から構成された地形である。遺跡は神崎鼻の北側に位置し、南北約200m、東西の最大幅約50mの狭い谷間に、砂丘が発達して出来た細長い三角形状の地形に営まれたものである。

分布調査の折には黒曜石や弥生土器と思われる小破片を数点採集したが、その時の聞き取り調査では、砂丘の先端部海岸線より、昭和の初め墳入骨出土の話を聞いた。話によると、この付近の畑では古董を作っていたが、収穫時には海岸に近い所に保存のためイモガマを掘ったという。その墳入骨が出土して再埋葬したことであった。

そのため少なくとも弥生の埋葬址に關係あるものとの判断を得たのである。一方この地点の低い山を越えた南東側にも、湾を南に控えて開けた平坦地があり、一部砂丘が発達している。ここでは黒曜石片やサヌカイト片が多数散布しており石斧も採集された。しかし土器片を採集することは出来ず時代の特定は出来なかった。この両者はほぼ同地域に位置するため前者をA、後者をB地点とした。

以上が本遺跡の発見の経過である。



第1図 古田遺跡位置図

今回の調査の目的は、遺跡の北側が漁港として埋立て、整備され、宅地開発が進行しつつある状況に対応するため、遺跡の範囲を正確に把握して保存対策の基礎資料を得ることになった。

町では昭和59年度事業として国と県の補助金を受け、昭和59年7月16日～8月2日までの17日間の日程で調査を計画した。調査は町教育委員会が主体となり、県文化課職員2名が調査を担当した。なお当初の計画ではA・B両地点の調査を実施する予定であったが日程などの問題もありA地点だけに絞った。

(安樂)



第2図 遺跡周辺地形図

## (2) 地理的環境と周辺の遺跡

長崎県の北部、平戸から北松浦に至る「北松」といわれる西海岸一帯は、大小200の島々から構成され、九十九島と呼ばれる複雑な海岸線は多くの湾、入り江、岬があつて西海国立公園の一翼を担っている。

小佐々町は北に跑町町と、南が佐世保市と境を接し東は佐々町と山地を分け合っている。303mの冷水岳からは眼下に九十九島の島々、平戸島をはじめ、西方40kmの海上には五島列島までが一望のもとに見出せる。東側の佐々町から佐々浦に注ぎ込む佐々川は、河床が約21.5kmと県内屈指の河川となり、下流域には平野部を形成している。しかし見返橋を境に西側の町内には平野は含まれず山塊が急に海にせまっている。北松浦の一帯には新生代第三紀砂岩の浸食景が見られ、旧石器時代より崖下の岩陰がよく利用され、吉井町福井洞穴や佐世保市の岩下洞穴・泉福寺洞穴はその代表的な洞穴遺跡である。町内にもこれらの堆積岩の残丘を見ることが出来るが、小坂免の大悲観岩陰もその一つである。岩陰の北壁には第35代松浦藩主松浦肥前守(觀中公)が文政13年(1830年)「大悲観」の文字を書いて彫らせたものと言われており、今なおその下に観音が祀られ信仰されている地でもある。標高20mの位置にある南向きの岩陰は、開口約15m奥行10m足らずである。昭和50・51年の発掘調査では、縄文時代の押型文・曾畠式・並木式・阿高式など早期から晩期に至る時期の土器や石器のはか弥生中期の土器や土師質の土器まで幅広く出土している。また自然遺物も獸骨や貝殻類、それに貝製輪輪が確認されている。この岩陰の北側にも、北に向って開口3m、奥行4mの良好な岩陰が見られるが、遺物の有無は明らかでない。

町内唯一の河川小佐々川と小河川の竹田川にはさまれた標高112mに位置する沖田城は、南北朝時代近江の豪族佐々木氏の一族か、松浦党の一族小佐々氏の居城であったとされているが、現在は沖田山神社が鎮座している。館跡があったとされている所は南へ半島状に伸びた標高10m前後の所で、今は国道で断ち切られ、本立寺が建ち墓地などが営まれている。またこの寺の境内には弥生時代のものと思われる石棺が入口に2基、本堂の裏手の切り通し部分に1基、計3基露出しているのが認められる。地元の古老人によれば、明治の初め頃、寺の入口付近や畠地からもかなりの石の棺が出土したということで、ゆるやかな舌状の丘陵を利用して石棺墓が営まれていたことが窺える。この丘陵の周辺は今でこそ新田になっているが、当時は海に突き出していたと思われる。小佐々川の河口には若干の河岸段丘が現れ、永徳寺周辺も地形的には良い条件を満たしているが、人家などが建てこみ、遺物の採集は出来ず、今後に期待したいところである。田原免に位置する永徳寺は、永仁3年(1295)小佐々四郎が地頭矢岳大守の時佐々正興寺然堂和尚の道風を慕い開山したと言われている。そして中世においては西彼半島多以良とも関係があったといわれ、それを裏付けるように墓地内には「青温石」と呼ばれる滑石製の宝鏡印塔や五輪塔の石塔群が見られる。

白の浦から樋泊にかけては大小の岬や半島があり、その前面には水の島、焼島、前島、野島などが浮び波静かであるが、ほとんどが岩礁地形で遺跡は発見されていない。

古田遺跡の位置する神崎半島は、2地点で遺物の出土が確認されているが、この周辺にはまだ小規模ながら同じような地形の所が見られ、遺跡の可能性も考えられる。北側に位置する浅島には、石の棺より鏡出土や人骨の出土の話があったが、柄をもった鏡や祖先の墓を再埋葬したという話から、近世墓と思われる。

下島には北臘地としてのハカマカズラというツル性の植物が自生しているが、この島は鍵状に細長い小さな島である。細長い部分は大小の円礫で形成されている。よく観察すると礫がわずかに回んだり、箱式棺に類似したものが見られる。これは近年になり類例が増加してきた。<sup>(註6)</sup> 穂丘上に構築された古墳時代を中心とした墓地と考えられる。南は鹿児島県長崎町の指江古墳<sup>(註7)</sup> をはじめ、県内では南串山町国東半島、長崎市牧島古道跡、北松的場大島の曲り鼻遺跡、<sup>(註8)</sup> 佐賀県唐津市神集島<sup>(註9)</sup> などが知られ、いずれも立地条件は、海に細長く突き出した鼻状の岬の穂丘<sup>(註10)</sup> ということで一致している。いずれ調査の機会が待たれる所である。

矢岳免に位置する深浦遺跡は黒曜石が散布しており縄文時代の遺跡と思われるが土器の出土は見られない。

以上のように町内における遺跡の概観をしたが、全体的に少ない状況である。特に中央部において空白区が見られるが、先にも述べたように、リアス式の沈降海岸のため山地が急に海にせまってしまっており平坦地や砂丘が発達しなかったことも一因と考えられる。一方鹿町町の日暗ヶ原一帯は標高366mの高所にありながら多くの遺物が採集されており、本町の岳木場や冷水岳周辺においても遺物の発見される可能性は考えられる。

(安樂)

註1 長崎県教育委員会『福井洞穴調査報告書目録』長崎県文化財調査報告書第4集 1966

2 佐世保市教育委員会『岩下洞穴の発掘記録』1968

3 佐世保市教育委員会『泉福寺洞穴の発掘記録』1985

4 1975・1976年にわたり町教委主催で佐世保考古学研究会調査、報告書未刊

5 『日本城郭大系』第17巻 新人物往来社 1980

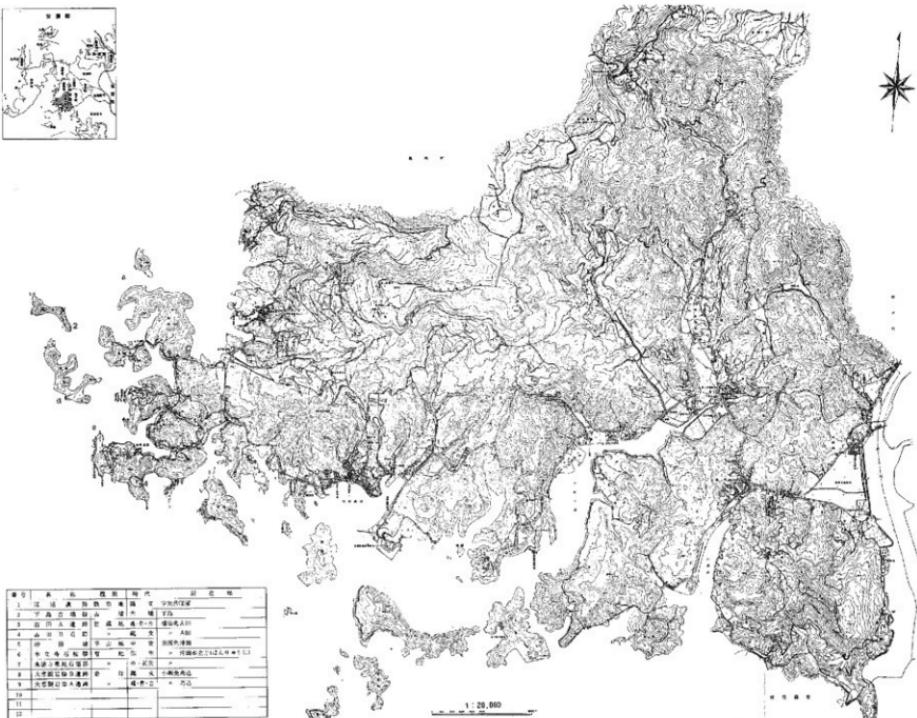
6 小田富士雄氏より御教示

7 昭和58年度遺跡周知事業において県文化課確認

8 長崎市教育委員会『仙崎古墳群調査報告書』1977

9 昭和59年度遺跡周知事業において県文化課確認

10 註6と同じ



第3図 司内道路分布図

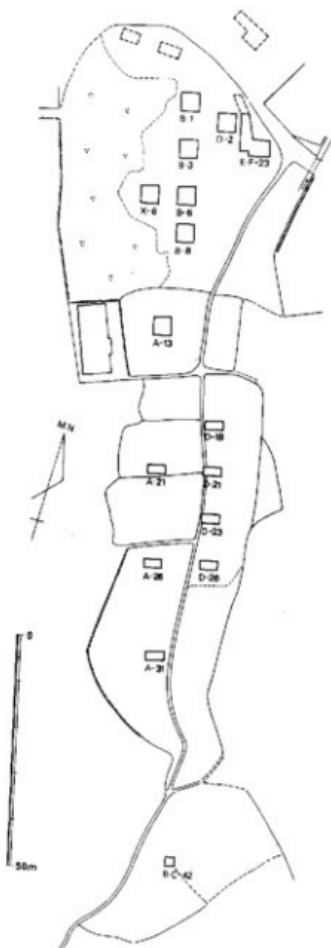
## II 調査

### (1) 調査の概要

調査は、谷状を呈した標高3~5mの平坦地7,000m<sup>2</sup>を対象とした。現在耕作されている畠地はわずかで、残りは雑草や竹林の繁茂する原野である。砂丘が形成された一番北側では幅約50mを計るが、最奥部の三角形の頂点になった部分では南側の海岸から吹きつけられた大礫と、岩石のため若干傾斜をもっている。

調査方法は、平坦地をほぼ縱断する形で長軸をとり、東西に直行する形で4m×4mのグリッドを組み、東西をA・B・C、南北を1・2・3と呼んだ。竹林などの影響で西側平坦部分にグリッドが設定できなかったが、ぎりぎりの線をA、ほぼ中央線にあたるところをBとした。

発掘はB-1・D-2から実施したが、この区域では砂層が厚く、下層の砂利層からローリングした遺物が若干出土しただけであった。B-3~6では、古墳時代終末期の須恵器片や土師器片が多く出土し、さらに貝層や焼上が検出され、住居址の可能性も示唆された。西側の竹林を伐採してX-6を設定して括りを見たが、ここから多くの古墳時代の資料に混じって半島系の格子目の印をもつ軟式土器が出土した。古墳時代の遺物の出土はA-13あたりまで量が少なくなってくる。E・F-2・3は人骨出土区である。人骨は間取によればイモガマを堀った時数体出土したといわれていたので、海岸部と畠の縁辺部に点線で描いた部分を確認したが、良好な状況には至らず、わずかに小骨が出土しただけである。D-18からA-31までは殆ど縄文晩期の資料が得られた。またこれから45m離れた最奥部のB・C-42からは縄文中期河内式上器と後期の北久根山式上器が出土した。



第4図 調査区域図 (1/500)

(安樂)

## (2) 土層(第5, 6図)

古田遺跡における層序は、縄文時代の遺物包含層と古墳時代の遺物包含層とに大きく区分することができる。またその両時代の接点がA-13区付近にみとめられ、弥生時代後期の土器が出土している。B-1区からB-8区までが古墳時代の遺物を中心に検出され、D-18区からB・C-42区までが、縄文時代を中心とした遺物の検出をみている。土層における変化をみていくと第1に破砕貝層がB-1~8区までみられるのに対し、A-13-B・C-42区においては破砕貝層をみなくなることが特徴的である。第2に古墳時代の遺物を包含する層は黒色の砂層にあり、この層を中心として上下に遺物の分布をみている。一方縄文時代の遺物を包含する層は、黄褐色砂層を中心として遺物の検出をみる点である。第3点として貝層をあげることができる。これは縄文時代の遺物を包含する地区ではみられなかったものの、古墳時代の遺物を包含する地区では、黒色土層上部と貝層との間に一枚の焼土が、みとめられたところであった。次に土層の層序について説明を加えていきたい。

第1層—耕作上層である。古田遺跡の場合砂丘の上に作物が作られていて、土地がやせており、いも、ビーナツ等の比較的の悪条件で栽培されるものでないと不適当な上地がらである。しかしB・C-42区付近では湧水点があり、小規模に水田耕作を行っていたとのことであった。

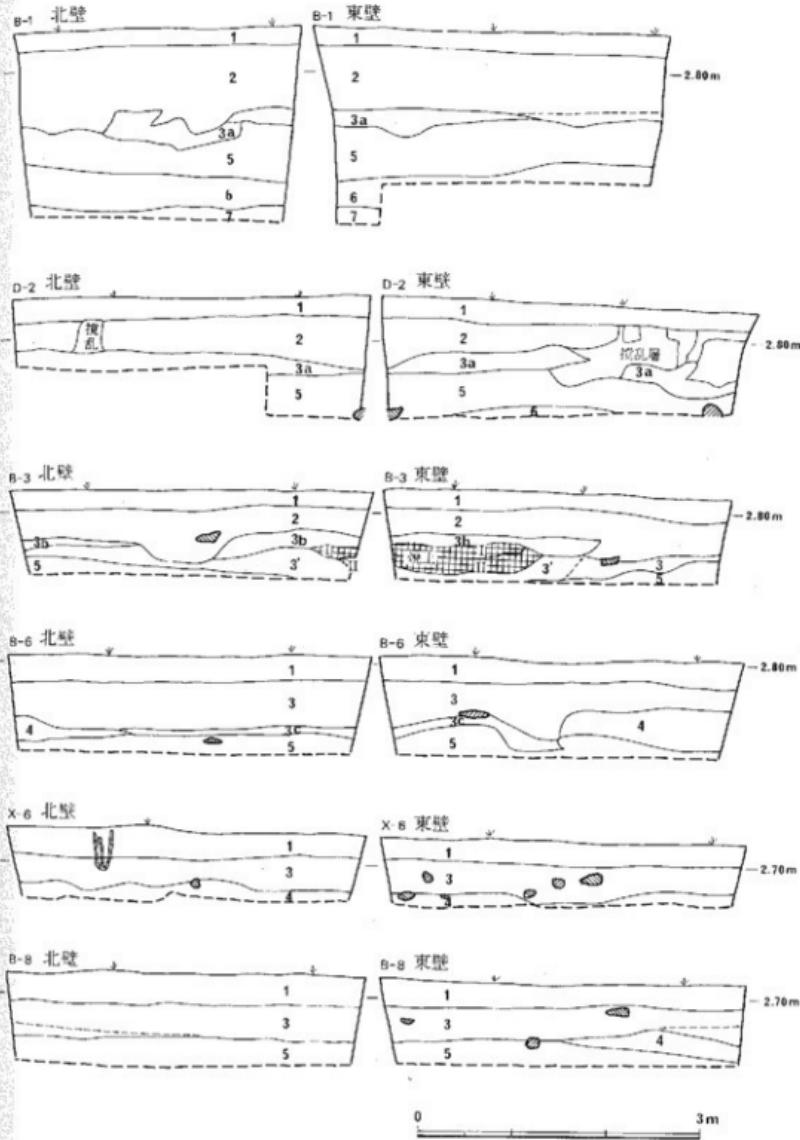
第2層—褐色砂層・B-1~3区までみられる砂層で、以降南側には堆積をみない層である。これは北側海岸線がまじかにあり、風・波によって堆積した砂と考えられるものである。一番厚く堆積をみるのがB-1区で表土層下部より90cmの厚みをもってみられた。またB-1, D-2区付近は2層に擾乱が一部みられるが、これは風波をさけるための防風林が植込まれていたためとみられる。

第3層—黒色砂層(やや水分を含む)・この層は黒色を帯びる層であるが、遺物の出土をみると遺物の出土をあまりみない層があり、貝層を黒色土層の上に形成する層、貝層を黒色土層の下に形成するもの、焼土をみるもの等3層の遺物包含層を中心に上下に5種類の土層分類を行った。

○3a層—黒色砂層・地区でみるとB-1, D-2区にみられる層で堆積が薄く、また擾乱を受け、B-1区では部分的に北、東壁においてとぎれた状態をみる。また破線を付した部分はやや黒みが薄くなり、2層との区別がつけにくいために行つた。遺物の出土品を見るとこの層の遺物はローリングを受けたものでしめられている。

○3b層—第I貝層・黒色砂層上部に堆積する貝層の層である。土にカキ殻を多く混入し、また岩礫性のサザエ、アワビを含む層である。

○焼土層—B-3区北、東壁にみてII層に分離できるものである。色調は赤褐色を帯びて、I層とII層の間が粘土塊を焼いた様に境界部分が固く、ねじり鎌で削ると、ボロボロ剥落する



第5図 土層実測図①(%)

部分がみられるものである。

○ 3 層 - 暗黄褐色砂層 3 層と似かよるが、やや黄色味を帯びた暗黄褐色砂層である。B - 3 区北壁部付近で須恵器の出土をみている。

○ 3 層 - 黒色砂層 B - 3 - D - 21 区周辺までの南北約 70 m 近い七層を形成するもので安定した堆積状況を示しているものである。もっとも厚い部分 B - 6 区で約 50 cm をみており、また遺物の出土点数も B - 6, X - 6, B - 8 区で総出土遺物点数の約 70% を占めているものである。

○ 3 C 層 - 第 II 貝層・B - 6 区で検出した貝殻をもつ層で 3 層の黑色砂層の下部からおもにカキ殻を堆積させた状況にあった。

第 4 層 - 黄褐色砂層で B - 6 ~ A - 13 区までの堆積と、A - 13 ~ 31 区までの堆積層出土遺物の時期的差があるところから、この層を B - 6 ~ A - 13 区までを 4 層とし A - 13 ~ 31 区までを 4 b 層と名称をつけることにした。4 層は上面で数 10 点出土をみると遺物の量は 3 層と比較すると突然点数が少なくなるという現象をみるとものであった。なお B - 8 区で鉄製品出土を 1 点みていている。

第 4 b 層 - A - 13 ~ 31 区にかけてみられる暗黄褐色砂層である。この地区から南側は、縄文時代の遺物を中心として遺物の出土をみるとなる。また堆積した砂層の質も粗かい砂ではなく粗めの砂に変化する。

第 5 層 - 混貝砂層、青みがかった砂に細かい貝殻が混じる。K (海岸) 区、B - 1 ~ 8 区まで検出している層でこの層にみる遺物は B - 1 区はほとんどローリングを受けるものである。が、B - 8 区 5 層では弥生土器の底部 (P - 24) とみられるものが 1 点出土をみている。

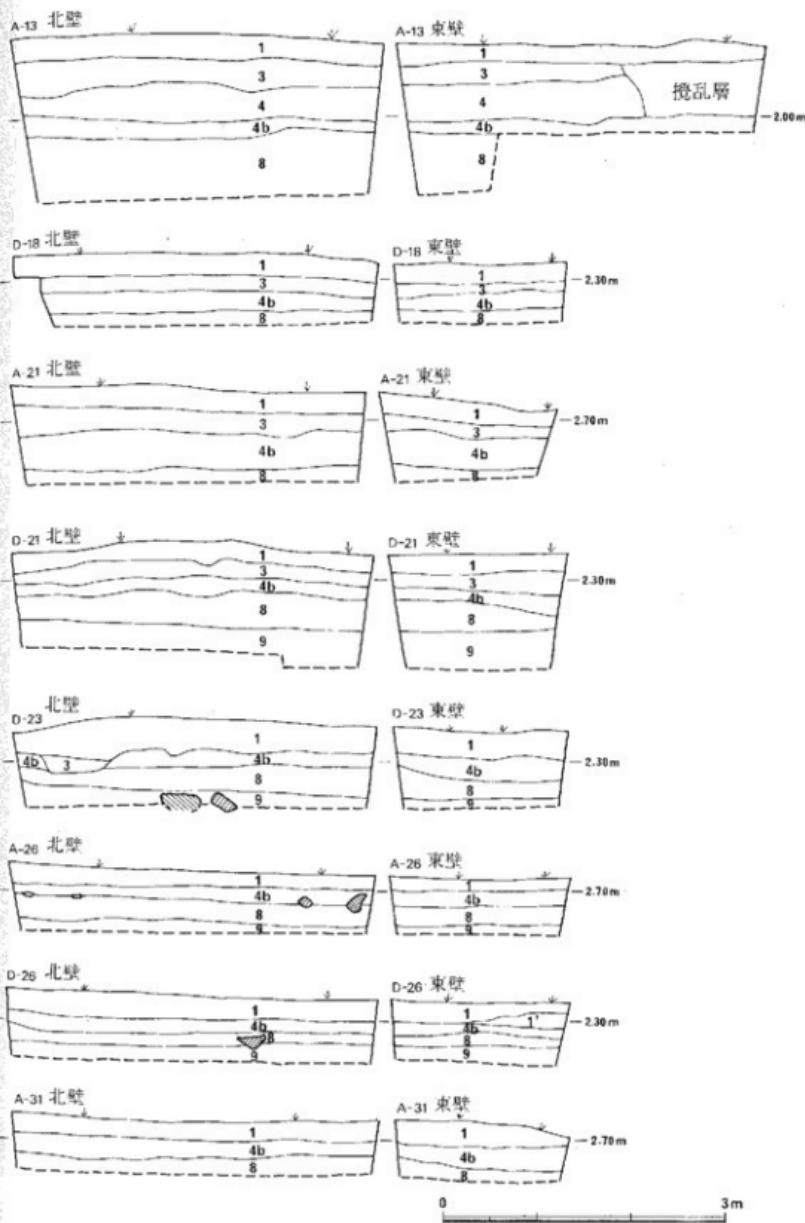
第 6 層 - 混疊破碎貝層円礫に混じるようにして貝殻の細かい破片が堆積する。遺物の出土をみなくなる。

第 7 層 - 砂疊層、湿り気をもつ砂と礫が検出された。この層ではローリングした須恵器片 1 点出土をみている。

第 8 層 - 黄茶褐色砂層で粗い砂の堆積をみると、海の砂と違い河水によって運ばれた砂の状態であり、下部からは水がわきだすようになる。なおこの層の上面まで縄文時代の遺物を検出している。

第 9 層 - 暗黄茶褐色砂層で、水分を含んでいるためにこのような色調を帯びるものと思われる。やや砂の粒が大きくなる。また D - 21 区では、標高約 1.5 m で水がわき出す。

以上が古田遺跡での層序である。なお B - C - 42 区では表土下約 40 cm (標高 2.75 m) で地山 (灰色砂質土層) に達するが、表土中より縄文時代中期～後期の遺物をみている。(町田)



第6図 土層実測図②(%)

### (3) 遺物

古山遺跡の調査で得られた遺物は、縄文土器片約200点、石器50点、弥生土器20点、古墳時代以降の上器片約4,000点、鉄器3点であった。このほかに古墳時代の人骨1体と鉄器1点、自然遺物としてカキ殻を主体としたブロック状の貝殻類が得られた。この数字は範囲確認調査としての資料であり、包含層を確認した時点で埋め戻した区域もある。

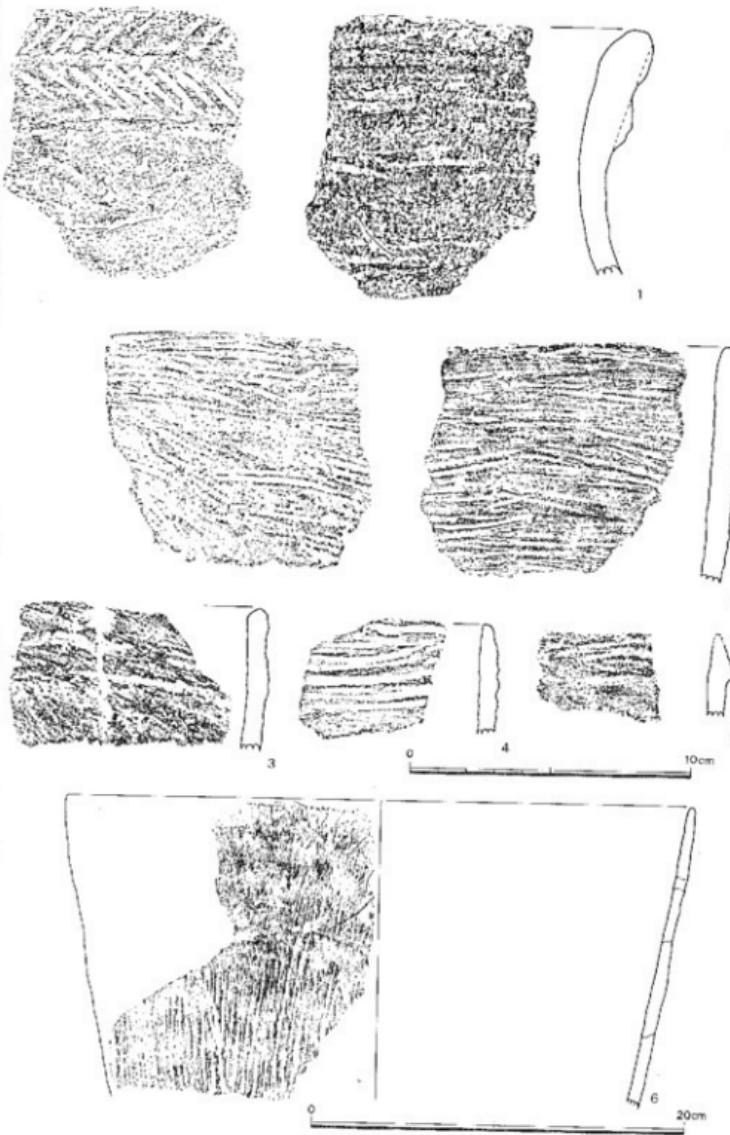
以下年代ごとに説明を加えて見たい。

#### 1 縄文時代の土器（第7～10図）

縄文時代の遺物はD-18区からB・C-42区まで出土を見たが、D-18～A-31区まではほとんど縄文晩期の上器である。B・C-42区では中期から後期に至る資料が得られた。

図示出来なかったが、滑石粉末を多く混入した中期の土器がB・C-42区から出土した。底部と胴部分である。このグリッドは谷間の一番奥に位置し、南側の開口部の方が近い。包含層は砂と粘土の混じり合った所で非常に浅い層からである。入江が砂丘で隆化した最初の部分であり、中期がこの遺跡の創成期であろう。1はC-42区からの出土で中期の上器と混在して出土した。口縁が2重に肥厚した部分に、絞杉状の短沈線を施している。頸部はしまり胴は丸く張るものと思われる。器形は北久根山式になるもので、ブリッヂになる把手の部分も出土している。胎土には、若干の雲母や長石も含まれるが、貝殻粉末が多く混入されている。色調は内外とも暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

2～6は条痕文を主体とした口縁部で晩期の土器群である。2は内外とも丁寧に浅い条痕が施され、口唇部はややおさえ気味にナデられている。外面は褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。3は内外ともヘラ状の擦過条痕が施され、粗く調整されている。胎土は粗い石英粒が目立つ。色調は内外とも褐色で焼成は良好。4は外面に棒状施文具による粗い沈線様の条痕が施されている。内面はヘラナデの擦過痕が残る。胎土は精選され長石や石英の微粒が含まれ、焼成も良好で色調は茶褐色を呈する。5は口縁部であるが端部を欠失している。上端は肥厚し若干の「く」字を呈する。この肥厚した部分に粗い条痕が見られる。内面にも弱い条痕が見られるがはっきりしない。胎土には細かい雲母を含み焼成も良好である。色調は外面褐色、内面は暗褐色を呈する。6は一番大型の破片である。口縁に近い上端部は横にナデられ、それ以下の胴部は細い棒状の施文具でタテに1本1本描かれており、全体的には条痕様に見える。口唇部はやや尖り気味に丸くおさめられている。内面はヘラ状のものでヨコナデ調整されている。補修孔が1個認められるが、この孔は焼成以前に穿たれていたと思われる。7は条痕の地文をヘラ状のものでナデ消している様であり、器表が荒れている。内面はヘラ状のものでヨコナデされて整っている。胎土には多くの結晶片岩粉を混入しているため締まっている。一



第7図 繩文土器実測図①(1/2)

見中期の土器を感じさせる。8も同じように胎上に結晶片岩粉末を混入している。器表には弱い貝殻条痕が走る。口唇は薄く尖っている。7・8も焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。9は口縁で器表は貝殻条痕が施されている。内面はナデが施され、胎上には貝殻粉末を混入しており、縮まって焼成も良好である。

10~23は貝殻条痕を主体とした胴部破片である。この中の10・15・17には結晶片岩の粉末が混入されている。これらの破片は全体的には胎土・焼成も良好で、器壁も薄手のものが多い。24は粗い条痕が見られるが、全体的に磨耗している。両側から穿たれた補修孔が1個認められる。25はこれまでの土器の胎上と違つており黒曜石の細片が含まれ、条痕が施された器表は荒れている。内面は炭化状のものが付着している。

26~33までは無文土器の口縁部である。ほとんどが深鉢形になるものであるが、28のように小形になるものもある。30もあまり大形にはならないが、滑石か結晶片岩の微粉末を含んでいる。また32や33は茶褐色の精選された土が使われており、器表が荒れたものもある。

34は口縁を欠失する頸部から胴部に至る部分である。器表には棒状の細い条痕が残る。内部は荒れて磨耗している。頸部が縮まり唇が張っていることから壺形になると思われる。

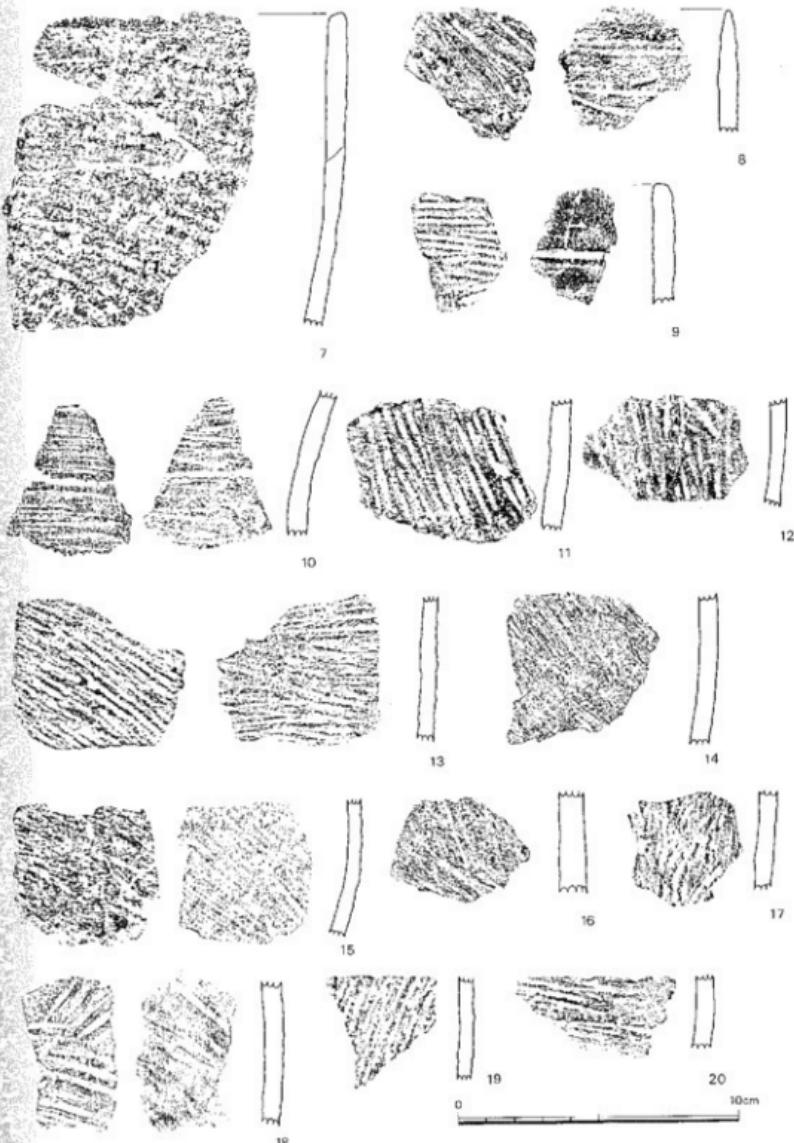
35は組織直土器である。経糸と緯糸が整然としており間隔が密である。緯糸の方は細部にわたって撚糸の方向まで観察出来る。外面は褐色であるが内面は黒色である。胎土・焼成は良好である。

#### 底部 (第9図36~40)

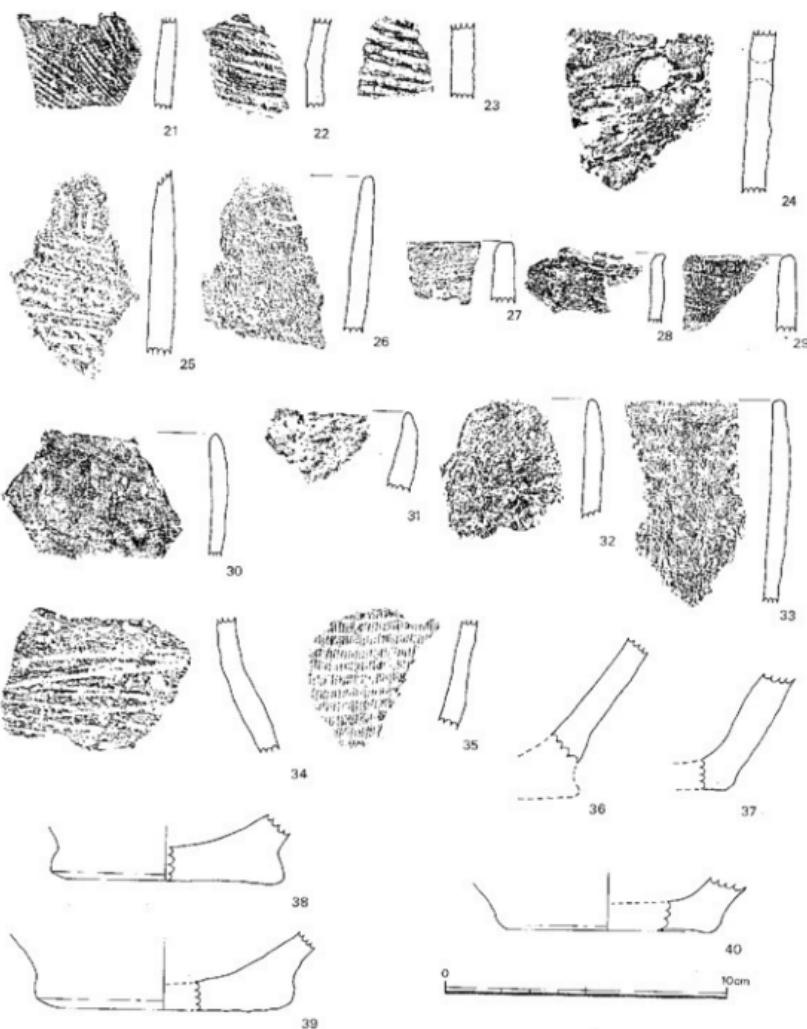
底部は5点が出土した。36は底の部分を欠失し、立ち上がりの部分だけである。外面は無文で凹凸が見られるが、内面はヘラにより磨かれている。胎土・焼成は良好。37は平底で、立ち上がり部分には指頭による整形の跡が見られる。胎土には長石や雲母を含み、焼成良好である。色調は内外とも茶褐色を呈する。38は平底で外に張り出し、立ち上がり部分がくびれている。胎土には貝殻粉末や白い砂粒を含み良好だが、焼成は甘くもろくなっている。復原径8.2cmを計る。39は磨耗を受け全体的に丸くなっているが平底である。胎土・焼成とも良好。復原径9.2cmを計る。以上は鉢形土器の底部と思われるが、40は若干の上げ底となり、立ち上がりが外反しており、かなり胴部がふくらむと考えられ壺形を呈するであろう。胎土・焼成は良好で復原径7.8cmを計る。

#### 精製土器 (第10図41~46)

粗製土器とセットで出土した精製土器は若干であるが、まとまりを見せる。41は口縁部が短く立ち上がり、やや外反して浅い1条の沈線がめぐる。頸部は尖り氣味に突き出し、胴部へは強く屈曲して張り出す。胎土は精選されており、丁寧に研磨され黒色を呈するいわゆる黒色研磨の浅鉢である。42はほぼ平坦に外に開いた口縁部は、端部が尖り氣味におさめられている。頸部は縮まり、胴部はゆるくふくらみながら浅鉢形を呈する。内外面とも暗褐色で全体がヘラ状



第8図 縄文土器実測図②(1/2)



第9図 繩文土器実測図③ (3/2)

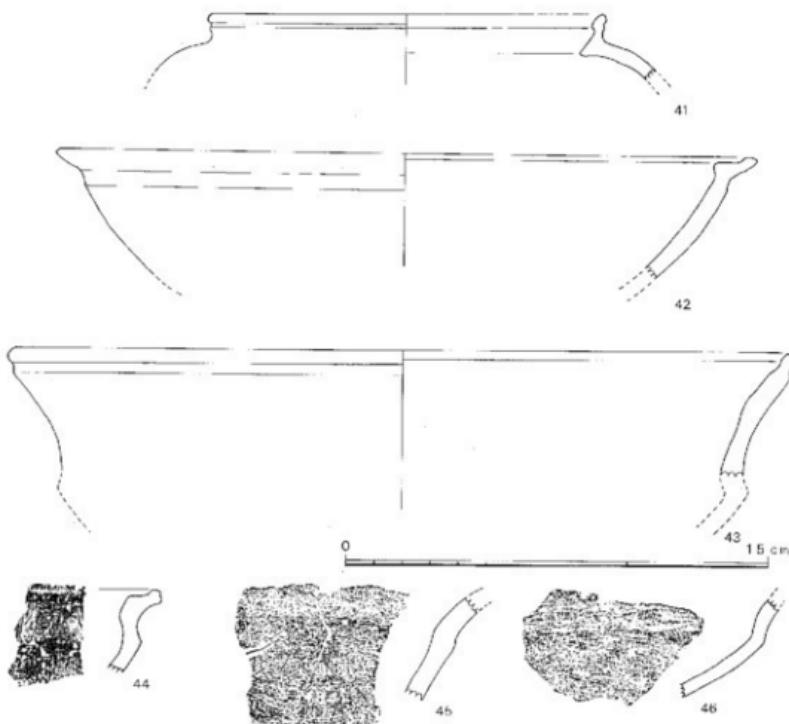
のもので研磨されている。胎土には貝殻粉末が混入され焼成も良好。復原口径は25cmを計る。43は大形の半精製の浅鉢形土器である。口縁部に1条の沈線があり、頸部は直行しながら外反しており、接合面で欠失している。胴部は「く」字形に屈曲するものと思われる。胎土には長石や石英の微粒子を含み焼成も良好。色調は内外とも褐色を呈する。44は口縁が外反し1条の沈線がめぐる。内側も玉縁状に区切られている。頸部は内湾して胴部は「く」字形に屈曲している。研磨は施されているものの、半精製土器である。45は半精製の土器で頸部から胴部へかけての破片である。頸部はあまり縮まらず、胴部も張らない中鉢状を呈するようである。胎土・焼成は良好。46も頸部から胴部へかけての破片であるが胴部は屈曲して浅鉢を呈する。胎土には貝殻の微粉末を混入している。表面はかなり磨耗を受けているが、内外とも黒色で研磨された土器であったことが窺える。

今回の調査における縄文土器の構成は、数こそ少ないが、遺跡の規模からすると予想外の結果を得たと言える。縄文中期阿高式土器や北久根山式土器の出土は、若干ながらも、海岸線に位置する遺跡の特徴を表わしているといえよう。晩期の土器は条痕文土器を主体としており刻み目突帯の土器は見られない。この上器群に併存する精製土器は、その特徴から黒川式を中心とするものであり晩期中葉ということが言えよう。

周辺における関連した遺跡をあげるならば、大悲観岩陰遺跡や、相浦川を4kmさかのほった、標高約16mの地点に位置する下本山岩陰がある。昭和45年調査が行われ轟式や曾畠式土器と人骨が出土し、さらに中期阿高式や後期の鐘崎式土器などと一緒に石器や骨角器が出土している。貝層も検出されており海に依存した様子が窺える。本遺跡との直接のかかわり合いをあげるならば、九十九島と呼ばれる島々の中でも一番大きな高島に所在する、宮の本遺跡があげられよう。高島は佐世保市に属し、古田遺跡からは4kmの南に位置している南北3.5km、東西900mの細長い島で、南端には標高136mの番岳がそびえる。遺跡はこの山の麓の砂丘に営まれているが海にはさまれた東西の地形はわずか200mにすぎない。

調査は昭和52~55年度にかけて実施され多くの成果が得られている。縄文時代の遺物は古くは曾畠式から阿高式、舟の元式がわずかに出土している。縄文時代の主体をなすものは晩期の土器である。ここでも貝殻条痕文土器や各種の条痕を主体にした土器に伴って精製土器が出土している。主体はやはり黒川式土器が占めるようである。ここではさらに組織痕土器や刻み目突帯文土器も出土しており晩期中葉から終末にかけての様相が見られる。この時期に伴う遺構は土塙墓が検出されている。弥生土器も多くが出土している。ほとんどが中期中葉のものであるが、弥生の場合には良好な石棺墓を伴い人骨も遺存していた。特に石棺墓では宇久松原遺跡や浜郷遺跡で見られたような板石積の石棺墓が検出され、南九州の地下式板石積古墳に類似した様相も見られた。以上は宮の本遺跡の概略であるが、古田遺跡の場合、縄文から弥生時代にかけては、前者の影響を強く受けていると考えられる。

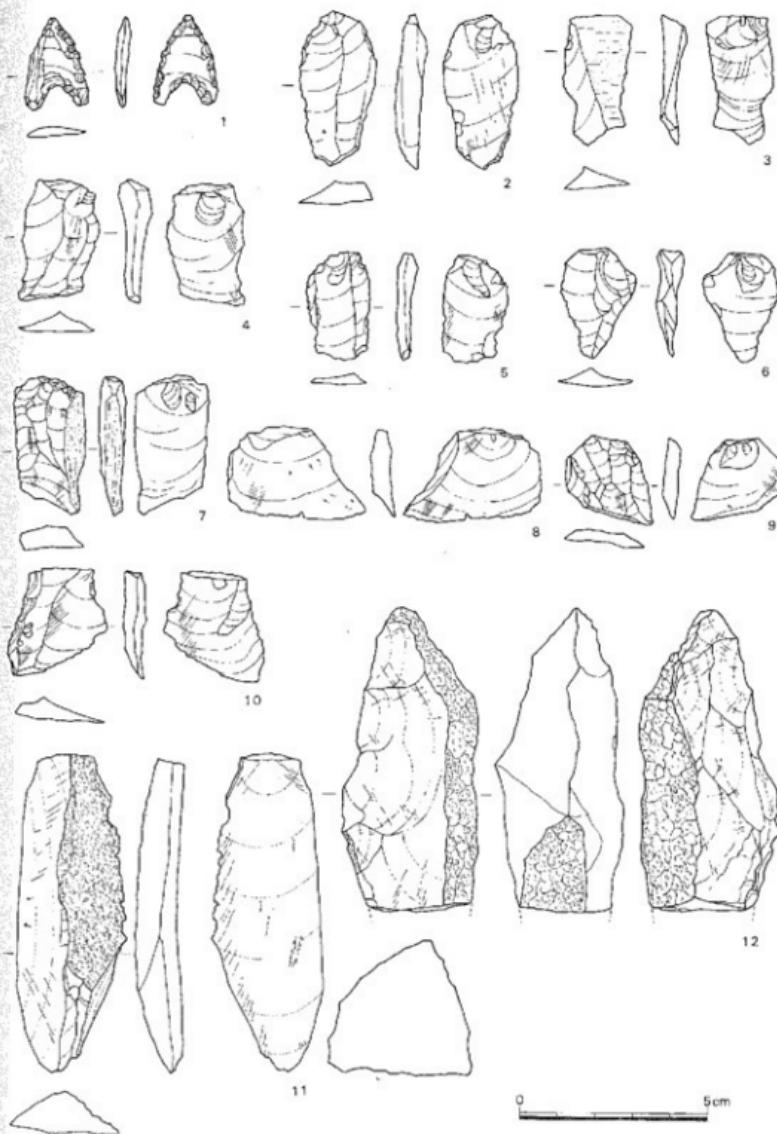
(安榮)



第10図 縄文土器実測図④ (1/2)

## 2 縄文時代の石器 (第11~12図)

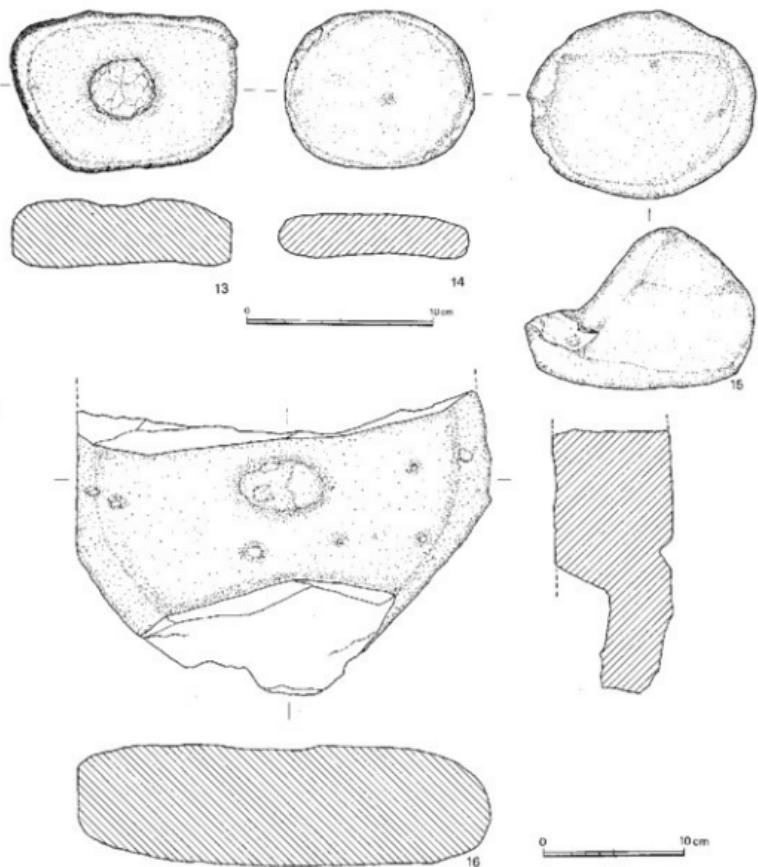
出土石器の中で縄文時代に属するものを図示した。1は黒曜石製の剥片鐵である。片面は一回の打撃で剥離され、エッヂは両面から調整されている。先端部をわずかに欠き、長さ2.5cmを計る。A-21グリッド晩期の層からの出土。2~10は黒曜石の剥片である。2~7の縦剥ぎのものと、8~10の横剥ぎのものがある。鈴桶遺跡などに見られる5cm前後に集中する、いわゆる縦長剥片石器とは違い、形態的にも不定形である。黒曜石の材質は、中に白い不純物を含むものが多く、松浦地方に産するものであろう。11は断面三角形を呈した縦長剥片でサヌカイト製である。左面の半分は自然面を残し横剥ぎの加撃である。右面は半坦面から一回の打撃で剥かれている。平坦面にも自然面が残され、全体的に使用痕は見られない。長さ8.5cm、幅3cm。



第11図 石器実測図①(%)

厚さ 1.1 cm を測る。12はサスカイト製で、断面三角形の尖頭状の石器である。下端部を欠失するが、三辺の一辺は自然面を有し、残り 2 面は荒い剝離が加えられ、完成された石器としては粗雑である。海岸に立地した遺跡として見るならば、石鎚としての用途も考慮される。13は砂岩製の凹石であるが、両面とも磨石の用途も兼ね備えている。重さ 650 g を計る。14は扁平な砂岩を利用した磨石で両面を利用している。重量 300 g を計る。15は硬い頁岩質の不定形な磨石である。研磨の部分は光沢があり、わずかにふくらむ。重さ 1.23kg。16は大形の砂岩質の石皿であるが両端を欠失している。中央は若干凹んでいる。

(安楽)



第12図 石器実測図② 凹石・磨石(2)・石皿(2)

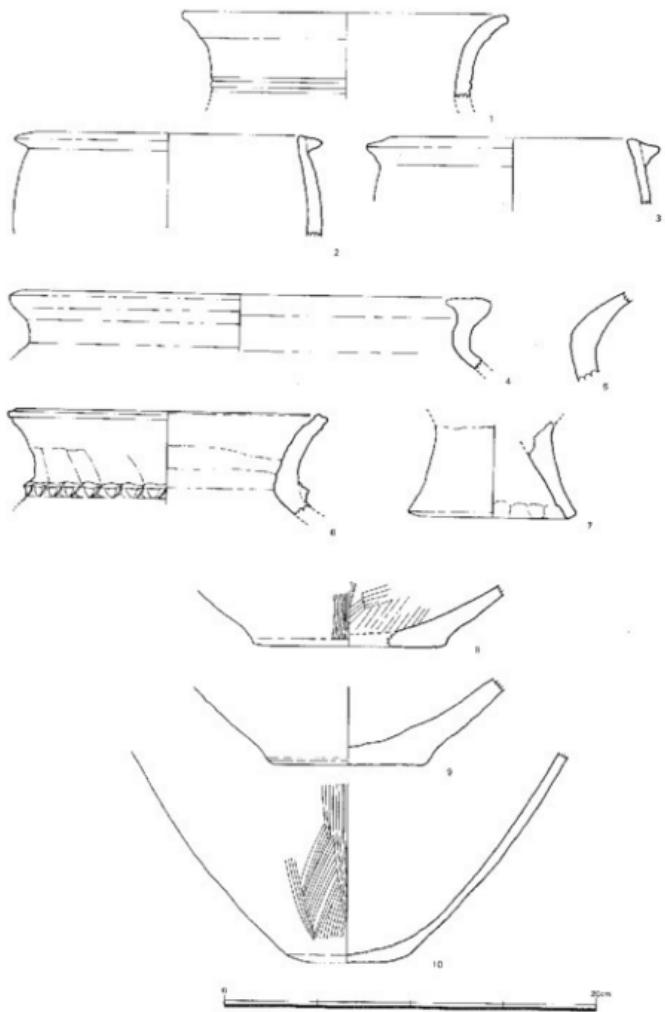
### 3 弥生時代の土器（第13図）

全体の割合から見ると、弥生式土器は少數にすぎず文化層もはっきりしていない。1は外反する壺型土器の口縁で口唇部は丸くおさめられている。口縁のすぐ下は、わずかに高まりが見られ頸部へ至る区切りが窺える。この高まりを中心にハケによるヨコナデが上から斜めにかけて見られる。その下には浅い2本の沈線がめぐる。内面は口縁部分にハケによるヨコナデが施されている。胎土には石英や長石それに若干の雲母を含み、胎土・焼成は良い。2は変形土器で断面三角形の貼り付け口縁を呈し、胴部には地文にハケ目調整を行い、そのあとタテにヘラ状のもので磨かれている。色調は内外とも褐色を呈している。胎土には石英粒、長石を含み焼成も良好である。復原口径16.4cmを計る。3は2と同じ断面三角形の口縁を有するが、2と較べるとやや下におちる。表面はやや磨耗を受けているが、ハケ目などは施されていない。色調は黄褐色を呈し、胎土には石英粒や長石を含む。復原口径15.7cmを計る。以上の土器は中期前葉に位置するものである。4は復原口径25.8cmを計る大形の甕口縁部であるが磨耗著しい。口唇の内側は欠失しており特徴が見られないが鋤先状に近い形をしていたと思われ、中期中葉以降に位置づけされる。胎土には粗い石英粒を多く含み器表は磨耗著しい。B-6 III層からの出土、5は口縁部に近く、磨耗著しいが、よく縮まった頸部にわずかなハケ目を認めることが出来る。胎土には粗い石英粒を多く含む。この土器は壺に近い形である。6は口縁部で西北九州には異質の土器である。外反して伸びた口縁の口唇部は内外からヨコナデされ、わずかに浅い沈線状のものが認められる。頸部は縮まりそこに断面方形の突帯が貼りつけられている。突帯には指頭と思われるもので條形され、爪形状のものが斜めに施されている。口縁から頸部にかけては指頭によるナデがあり、その下はヘラ状のもので調整されている。内面も指頭によるナデ調整が見られる。色調は褐色で胎土は精選され焼成も良好である。復原口径17.2cmを計るこの種の土器は、鹿児島県において弥生後期から古墳時代に比定されている成川式土器に類例が求められるのではないだろうか。7は底部か器台と考えられるが、粘土の接合部で割れているため確証がない。色調は茶褐色で胎土は精選され緻密である。復原径は9cmを計る。

#### 底部

3点が出土した。8は壺の底部と思われるが、底は平坦でなく全体に丸みを帯びる。内外には粗いハケ目が浅く施されている。胎土には粗い石英粒を含み焼成は良好、色調は黄褐色を呈する。復原径10.4cmを計る。B-8-24区からの出土。9は大形の平坦な壺底部である。粗い石英粒を多く含み焼成は良い。色調は外面がやや赤みを帯びた褐色、内面は黄褐色である。復原径は8.5cmを計る。10は甕底部である。器壁は薄く、表面には全体にハケ目が施されている。胴部は張り出しているが、それ以上の器形は不明である。しかし底部が全体的に丸みを帯びていることから、後期あたりに考えられる。復原径は6cmを計る。色調は内外とも赤褐色を呈している。

(安樂)



第13図 弥生土器実測図 (15)

#### 4 古墳時代の土器・鉄器（第14～23図）

大きくわけて、土師器と須恵器がある。その他に軟質上器(2点)、鉄器、土鍬、石鍬等を検出している。出土点数は約4,000点。内、須恵器91点、土師器3,900点、鉄器3点、土鍬4点、有孔石鍬1点をみている。地区別にみていくと、B-6、B-8、X-6区におよそ3,500点の出土をみており、生活空間がかなり小さな範囲にしばられているとみられる。調査区内においての時期は、B-8区が古式土師器段階の出土遺物が多く、次にX-6、B-6区がおおまかに傾向としてとらえられる。須恵器の出土量としては、B-6区が(35点)で一番多く、次いでB-3区(29点)この2地区で全体の約70%を占めている。また、B-3区の出土の須恵器は8世紀代を中心とするものがこのほとんどである。以上が、出土遺物に関する概略的なところである。以下、順を追って説明を加えていきたい。

##### 土師器（第14図1～25）

時期としては、布留式上器の特徴をそなえた土師器が、B-8区を中心に出土をみている。口縁部直上に沈線をみて、頭部から口縁部にかけ内湾し、器壁がかなり薄いものが多くみられることが特徴的である。

1は一見弥生土器の様な型態をそなえるが、口縁直上に沈線をみるものである。内外面ともにハケ目の調格が残るものである。2は、畿内地方でいわれている布留式上器で、口縁部が波をうった状態を呈し、口縁部内面に厚みを持ち、かえり状を有す。3は内外面ナテ整形をみ、口縁部をつまみあげた状態をみる。4～17は、いずれも口縁部に沈線、あるいは浅い凹みをみ、口縁部が内湾するものである。18は、口縁部を内外面からつまみあげたようにし、口縁部直上を丸くなすものである。19、20はやや器壁が厚くなり、口縁部が外反しているものである。21は大きく外反するもので、淡黃白色を呈し、胎土が古田遺跡でみるものと異なるものである。24は口縁部が嘴状になり、内訛をつまみあげた状態をしている。25は頭部からの立ちあがり外反するが、口縁部付近で内湾し、口縁部をつまみあげた状態にもっていくものである。22は壺形土器で、口縁部がほぼ直線的にのび、口縁直上に浅い凹みをみる。23は、二重口縁の上器で、口縁部がやや短いものである。

##### 土師器（第15図1～11）

口縁部内湾する二重口縁の変形をみるもの、口縁部が直線的になり頭部がしまるものをこれにあてた。

1～4、壺形土器で1は口縁部が内湾するもので、内面頭部から肩部にかけへラケズリを見る。2、3は、口縁部が内外外反し、外面微妙なふくらみをみる。口縁の短いものである。4は二重口縁がくずれた形状を呈し、頭部からの立ちあがりが内湾し、口縁端部で外反し、丸く尖らせる。5～9、壺形土器で、5は4と同様口縁部が微妙に変化する。頭部がしまる。6頭部が縮まり、頭部からの立ちあがりが、外反ぎみに口縁付近で内湾するものである。7・8

は器壁の厚みが同じくらいに、頸部から口縁部にかけや立ちざみに外反する。また8には浅い沈線をみる。9、内面暗文風のヘラケズリを行い、磨きをかけている。頸部から肩部にかけては、ヘラケズリをみている。外面風化して整形状況がはつきりしない。10、11は小片であり、種を求められない。共に、甕とみられるものである。

土師器 (第16図1~14)

頸部にしまりがなくなり、口縁部が外反したものとこれにあてた。

1~5、7は布留式土器以後に後続するものとみられるものである。1、3、4、7は甕形土器になるとみられるものである。2は頸部から外反するもので、口縁部付近でやや内湾ぎみである。5は頸部から口縁部がほぼまっすぐに立ち、口縁部付近で、やや外反する。壺とみられる。9~11はほぼ同時期の甕物とみられる。壺とみられるものである。頸部から大きく外反していくものである。12~14は7~8世紀頃の土師器とみられるもので、12・13頸部が口縁近くの高い位置にきて、ゆるやかに肩部へ移行していく形態をみるものである。14は口縁部が立った状態で胴部へ移行していくものとみられる。

土師器 (第17図1~17)

高环、および脚部、製塙土器をこれにあてた。

1は須恵器を模倣した土師器で、脚が付されるものとみられる。2~7は、高环の环の部分とみられるもので、2は脚近くまで丸みを帯び、口縁部付近から外反するものとみられる。3には明瞭な稜が肩に付されている。4は口縁部、丸みを持ち、ほぼ直線的に外反する。5~7は、环と脚の接合部である。8~12は、脚にある部分のもので、8~10がほぼ中央部付近でふくらみをもたらしている。11・12は小形の脚で、放物線をえがく形狀を呈する。13・14は高环の脚になる部分とみられ、13はほぼ平坦なそ部をなし、急激な立ちあがりをみる。15~17は製塙土器の一例とみられるもので、15にはタタキをみており、また16にもタタキを施した状態がわざかにみられる。

土師器 (第18図1~15)

壺類を見るものである。全体にB~6区出土のものが多くを占めている。壺類には口縁部が外反するもの、内湾するもの、直立するものとがみられた。

口縁部外反するものには、1~3・11があり、1は口縁部に浅い沈線をみ、2は口縁端をまるく尖らせおさめるもの、3は口縁部が微妙に変化し、外反する。口縁部内湾するものには、4~10、12、13がある。4は口縁部直上に沈線をみて、口縁端をつまみあげたような形狀をみる。5は、大きく内湾するものである。6・7は3の外反するものと口縁部の作りを同じようにみるが、外へださずに内側へおりまげるような状態をみるものである。口縁部が直立するものに14・15がみられる。14は口縁部を直上から内面へ切ったような形狀をみ、15は口縁端に丸みをもたせる。

土師器 (第19図1~15)

小型の壺類としたものである。

1～3は口縁部が胴部より狭いもので、いずれも口縁部内湾した形状をみる。4は底部が丸底をなさずへこみを持ち、二重口縁をなし、ほぼ直立した口縁部をもつものである。5～8・10・11は胴部より口縁が広くなるもので、5は口縁部二重口縁をなすものである。9も二重口縁の変形した状態をみるもので、外面ナデを見るが内面ナデをみない。12は頭部から立ちぎみに口縁部へ向い、口縁部で外反する。胴部が長くなる。13は手捏上器で、底部を平底になす。口縁部を欠損する。14、底部が尖りぎみをみている。内外面、ミガキを見る。15は平底に近い丸底をみるもので、外面ヘラミガキを行い、内面底部までヘラケズリを見る。

土師器、瓦質土器、石鉢、鉄器、土鍤（第20図1～14）

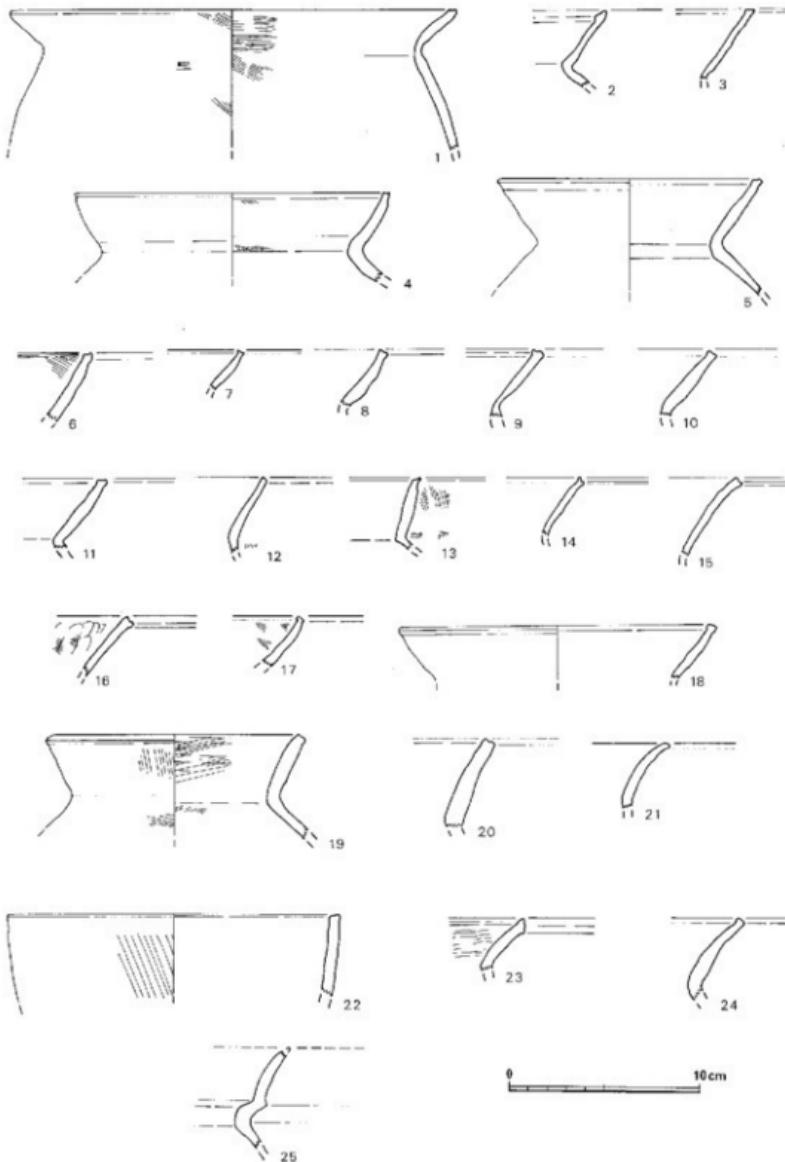
1～3は甕の底部で、1はやや尖りぎみになり、2は底部がやや平たい丸底である。3はやや立ちあがりの傾斜が急である。4は環形土器ではりつけ高台をもつ。5は瓦質ぎみの上器で焼成があまい整形土器である。6は瓦質の盤形土器とみられる。

有孔石製品、鉄製品、土鍤（第20図7～14）

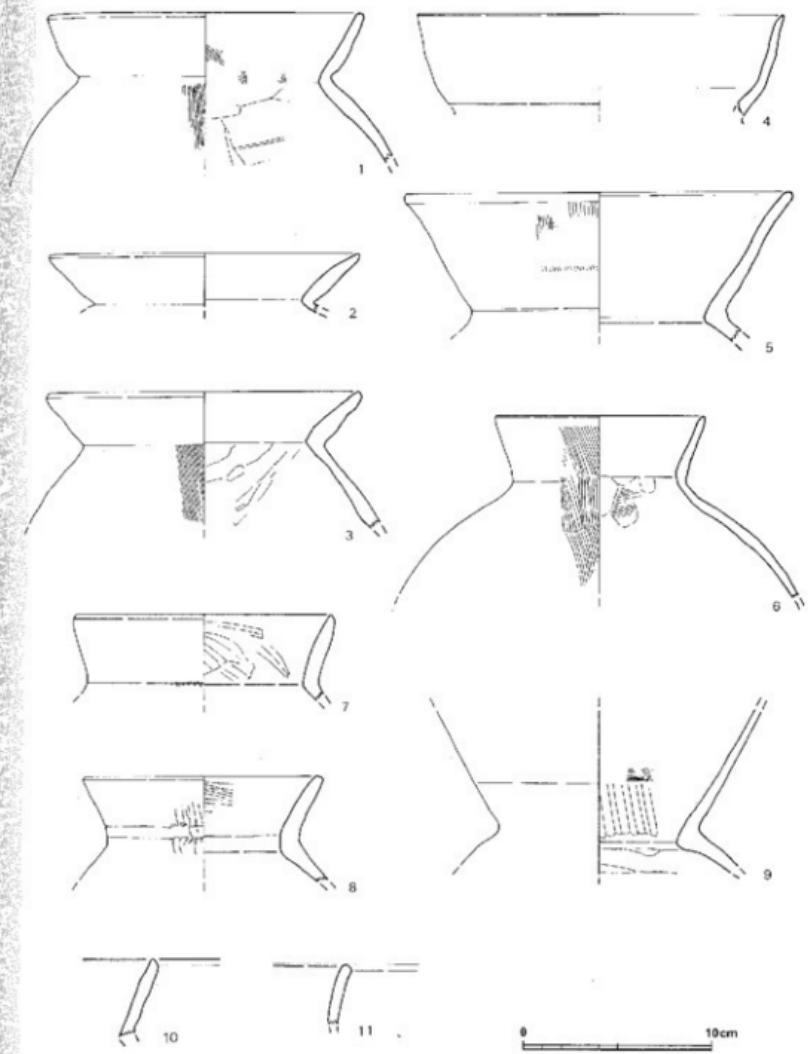
7は頁岩質の材質を用いて、正面上面に5mmほどの穿孔を計る。全面にケズリこんだ様な磨きをみている。長さ6.2cm、幅3.0cm、厚さ2.2cm、重量61.5gをみる（B3-S1）。8は板状の鉄器である。正面左側面で1.5cmを計る。鋒による腐食が進む。不明製品である。長さ8.7cm、幅3.65cm、厚さ1.7cmを計る。9、E・F-23区人骨の副葬品刀子である。ほぼ完全な形で残るが腐食がはげしく、刃の部分が明確でない。全長15.5cm、幅2.1cm、厚さ0.35cm。10、鎌状鉄器とみられ、下部を折り曲げ正面左側面の刃が薄く、右側面部厚みを持たせる。長さ19.5cm、幅2.4cm、厚さ0.25cmを計る。11～14は土鍤で、いずれも砲弾形を呈するものである。11、A-31区2層、やや幅が狭くなり、長さ2.9cm、幅1.6cm、径0.85cm、重量6.2g。12、表上層、長さ3.1cm、幅1.85cm、径0.55cm、重量7.4g。13、K-5層、長さ2.8cm、幅1.81cm、径0.55cm、重量8.7g。14、B-6区表採、長さ3.0、幅1.78cm、径0.65cm、重量6.4gをそれぞれ計る。

須恵器（第21図1～17）

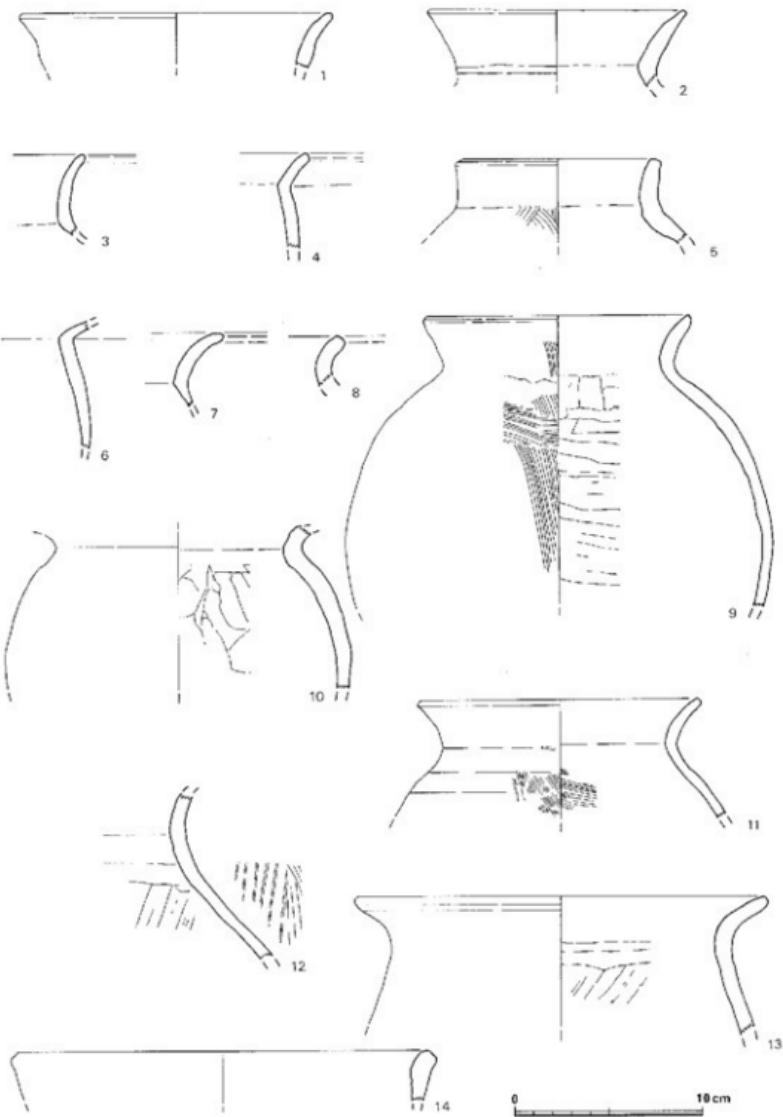
1～6は蓋坏である。1は稜は小さいがシャープな整形である。朝鮮系の須恵器であろうか。2は蓋にみられていた稜の痕跡が全く姿を消すものである。3は蓋の内面にかえりを持つもので、またかえりが口縁端部より下方にのびるものである。4～6は、天井部中央につまみをもつ、擬宝珠様つまみを有する蓋類である。7～12は坏身で、7、8が高台をつけないで受け部をもつものである。9～12は高台とハリ付けを見る坏身となるものである。13、14は高坏の類で13は小片で脚径を測りえないが、脚端部を丸くおさめるものである。14は盤状の环に脚をはりつけたものである。15は胴部から口縁部へ内湾し、口縁部丸みをもって終わらせる。16は壺形土器で内面同心円の板具を用いて、かざねのタタキを行い、青海波文となる。外面格子目のタタキを見るが、肩部付近をナデによって格子目文様が消えかかる。マキアゲ、ミズヒキの整形を見るものである。17、口縁部片であるが、口縁部外湾させ口縁部先端をおひげたよう



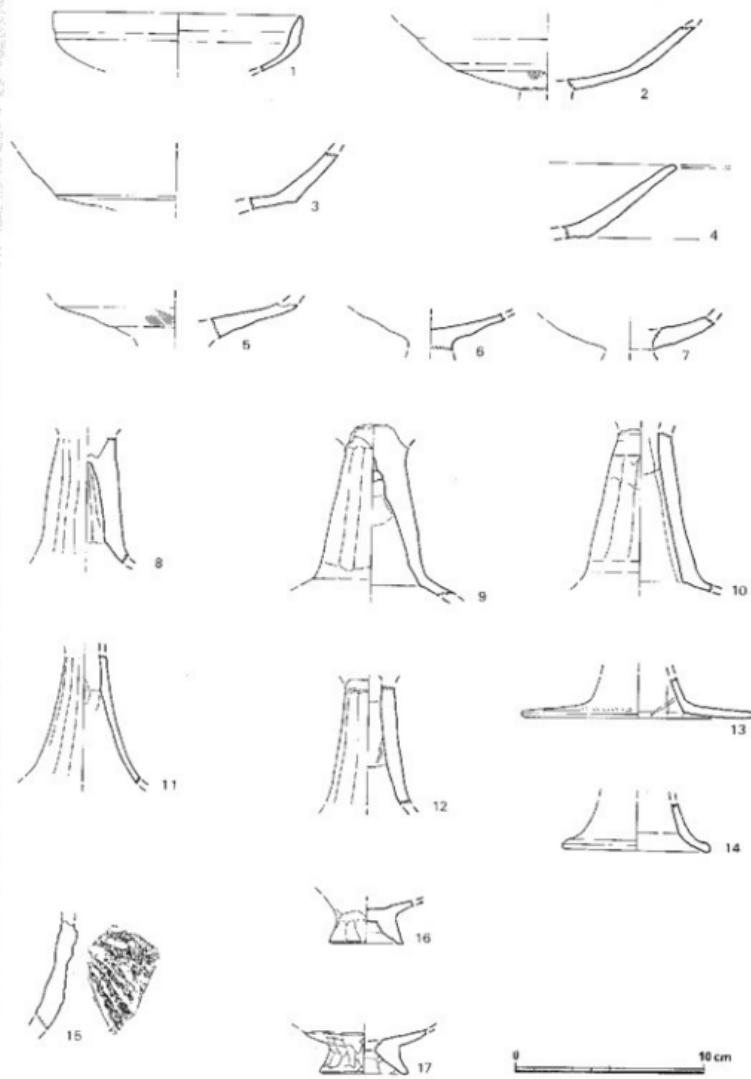
第14図 土器実測図① (Y<sub>3</sub>)



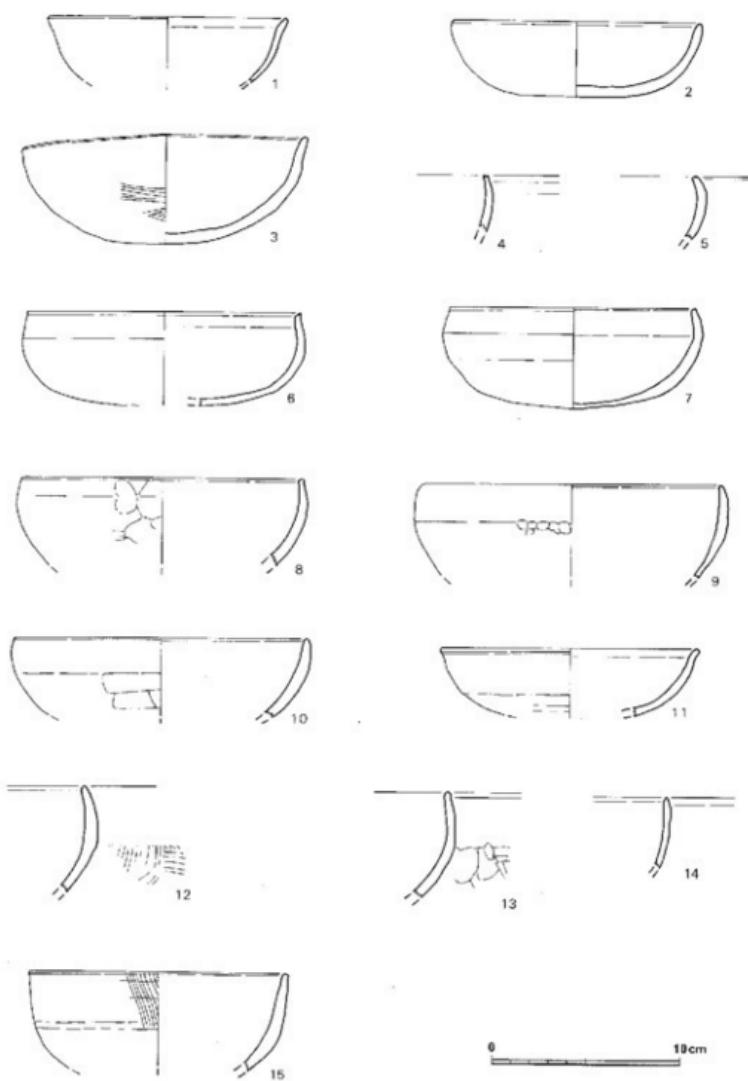
第15図 土師器実測図② (少)



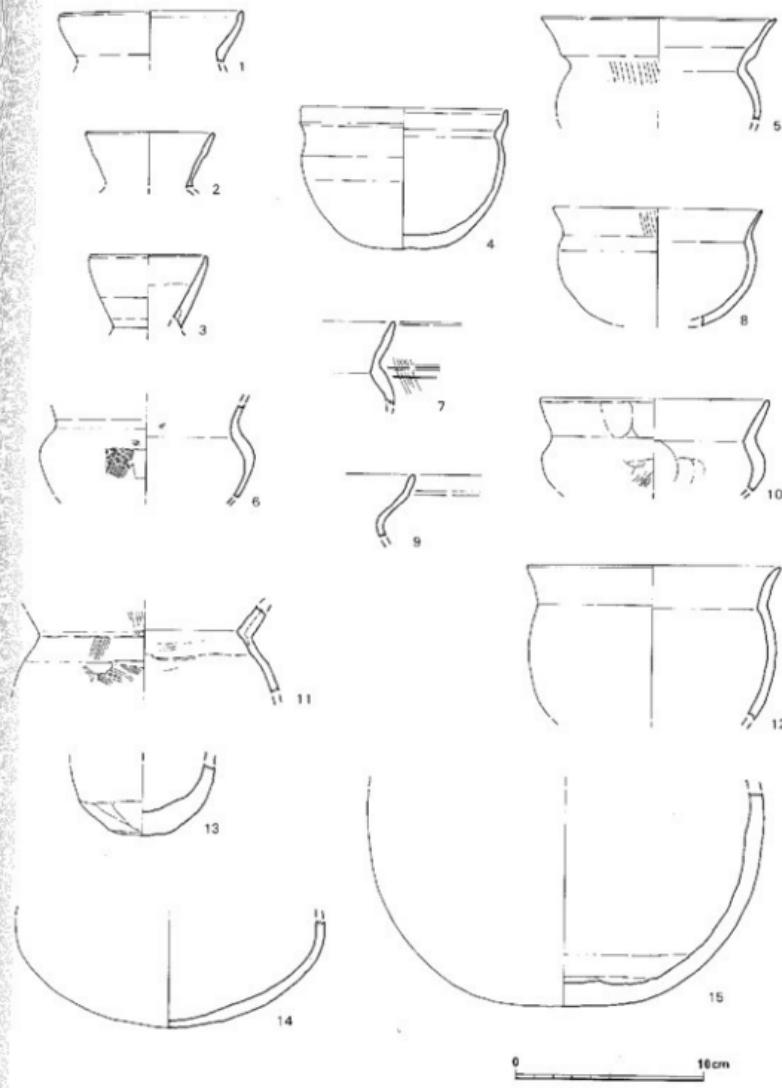
第16図 土師器実測図③ (分)



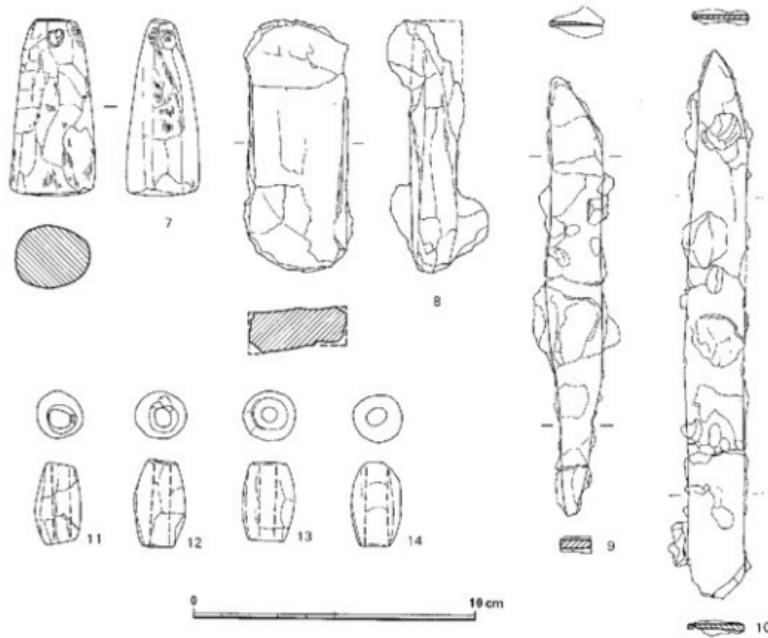
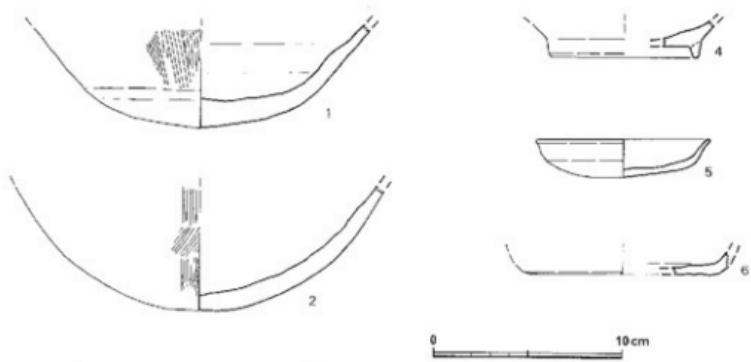
第17図 土師器実測図④ (3)



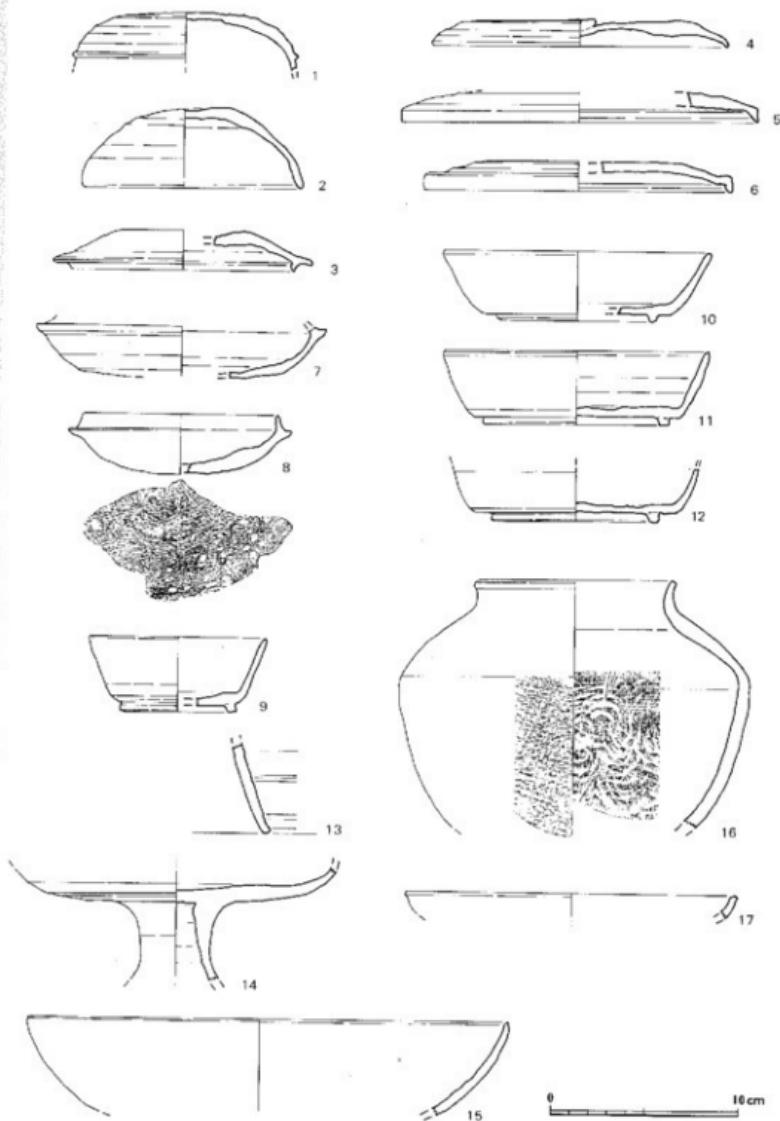
第18図 土師器実測図(5) (15)



第19図 土師器実測図⑥ (3)



第20図 土器実測図(左), 石錐・鉄器・土錐実測図(右)

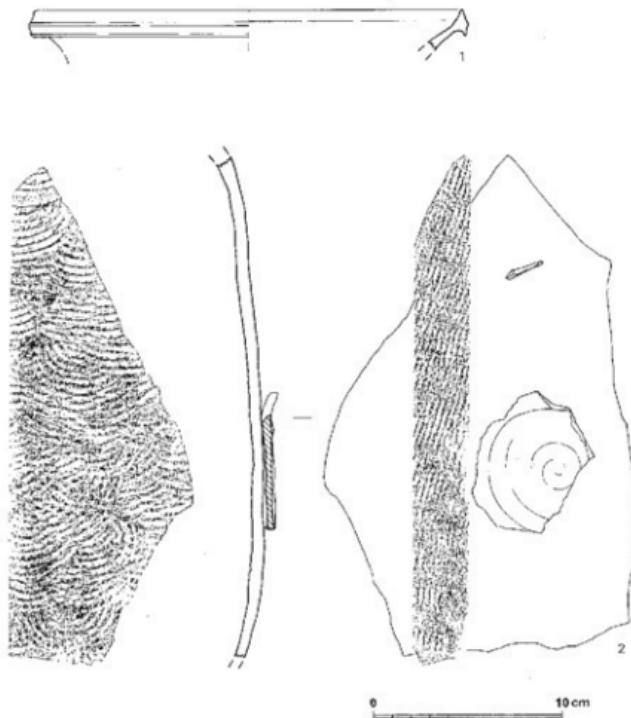


第21図 須恵器実測図① (少)

にまるく形成する。

須恵器 (第22図1~2)

1. 口縁端部が上下につきだす形状を呈し、その上下の中央部がややふくれた状態をみる蓋とみられる。また内面には自然釉の付着があり、淡黄褐色と灰色のまだら文様をみる。2. 肥の胴部片で、外面に平行条線叩文のタタキを行い、その上を数段のカキ目調査を行う。内面、同心円の板具によって青海波文のタタキをみる。内外面灰色を呈し、断面も灰色を呈する。中央部と上部に他の須恵器が焼成時に接合した状態をみる。また下部は、焼成時の熱を受けただれた状態を呈し、一部自然釉かかり暗緑色を呈する。

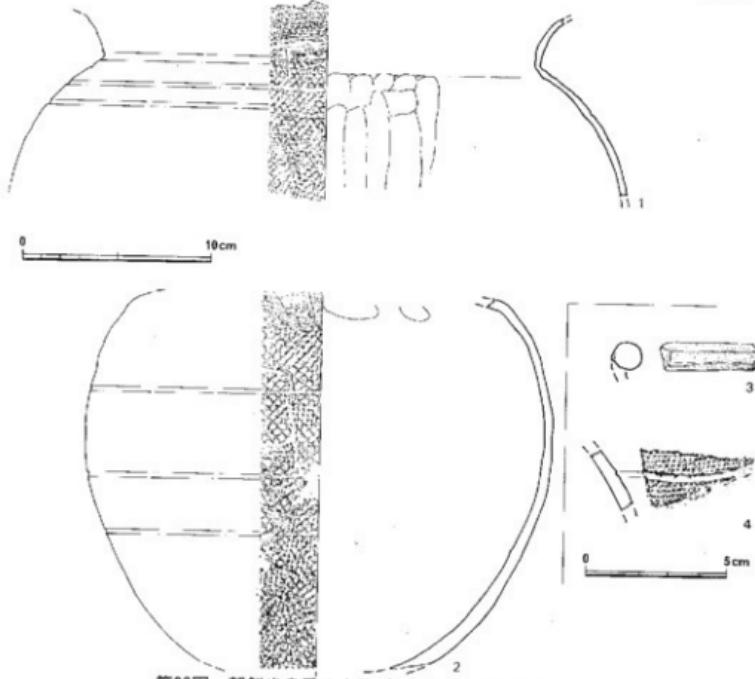


第22図 須恵器実測図②(3分)

朝鮮半島系土器 (第23図 1~4)

1はB-6区より出土の軟質土器である(P-36)。外面全面に格子のタタキを見る。頸部と肩部の間に3本の沈線がタタキの上をなでるようにめぐらすものである。頸部から口縁部にかけては、ナデ整形のためタタキの文様がかされた状態を呈する。内面口縁部ナデを行い、頸部から以下は指による縦ナデを行う。色調は内外面煤ミガキをかけたように黒色を呈し、断面中心部が黒色でそのまわりが赤褐色を呈する。胎土は緻密な粘土を使用し、焼成がややあまい。2もB-6区出土の軟質の盃で(P-17)、内外面暗赤褐色を呈し肩部から底部付近まで格子のタタキを施す。その後体部に三本の浅い沈線を引く。また肩部から口縁部へ向けてはナデ整形し、格子のタタキを消却する。内面は指による整形痕を頸部付近にみて、それ以下を指によって縦方向にナデたものであろうか。擦痕状のものがみられる。丸底の底部をなすと考えられる。3は無文土器とみられるもので、焼成あまい。断面円形状を呈し、口縁部に紐状にハリツケを行った部分の残片であろう。4、格子目状に細い線描きを縦方向から行い、次に横方向から行う。また、この擬格子目をわかつよう太い沈線が一本引かれるのを見ており、上記の1、2を模倣して作られたものではなかろうかとみられる。胎土、やや荒い。焼成あまく、黄褐色を内外面呈する。以上が本遺跡における主な遺物である。

(町田)



第23図 朝鮮半島系の土器 (1) 3・4は (2)

### まとめ

ここでは、B-3～A-13区に出土した遺物を中心に土層、出土地区を優先させながら上器の特徴をあげて、その編年観をとらえていきたい。

第14図にあげた變形土器資料が古式土師器として取り扱った資料である。この時期の特色として、口縁部が内湾し、口縁部直上を指によるナデ、ツマミによって口縁部を一周させ沈線状の凹みを作りだす。また器壁を薄くすることもこの上器の特色である。この上器に後続するものとして第15図1～3をあげた變がある。この時期になると口縁部に沈線の凹みをみなくなり器壁に厚みが増し内湾から外反へと移行する形態をもつようになる。それとはまた別に二重口縁から形態変化をとげたとみられる4のような立ちあがりが内湾し、口縁近くで外反する變が前出土土器と平行かあるいは先行してみられる。第16図2、3、4、5がやや古そうで、5世紀頃に来るものである。1、6は6世紀頃に位置し、9、10、11は大きく外湾する形状をみるとみられる。1、6は6世紀頃に位置し、9、10、11は大きく外湾する形状をみるとみられる。第17図高環の破損品であるが、2～4は布留式に平行するものとみられるが、5～7はやや後続するものであろう。15～17は製塙土器とみられるもので、本遺跡においては、3点の出土をみている。第18図は壺類で、2はA-13区より出土をみており、4世紀頃と考えられる。4、5がそれに統いてるものと思われる。3、7がほぼ同時期の5世紀初頭頃と考えられる。第19図は小形の壺類としたものであるが、1が布留式にともなうものとみられ、4は小形の鉢になるものであろうか、口縁部が二重口縁をなす。5は口縁部直上に浅い沈線をみて、二重口縁状をなしており、布留式土器と二重口縁とを重複させた器形をみている。いずれも4世紀後半～5世紀初頭にかけてのものであろう。第20図の5、6は中世の遺物とみられる。第21図は須恵器をみるものである。1が6世紀頃とみられる。2は6世紀後半～7世紀前半頃であろう。3～15はいずれも7世紀頃～8世紀中頃にかけてのものとみられる。第22図は須恵器の變とみられ、共に7世紀頃のものとみられる。第23図1、2は、北部九州出土における比較から5世紀初頭頃とみられるものである。3は、無文土器で弥生時代の所産であろう。以上の資料を概略編年図にしておいたので、参考にされたい。

(町田)

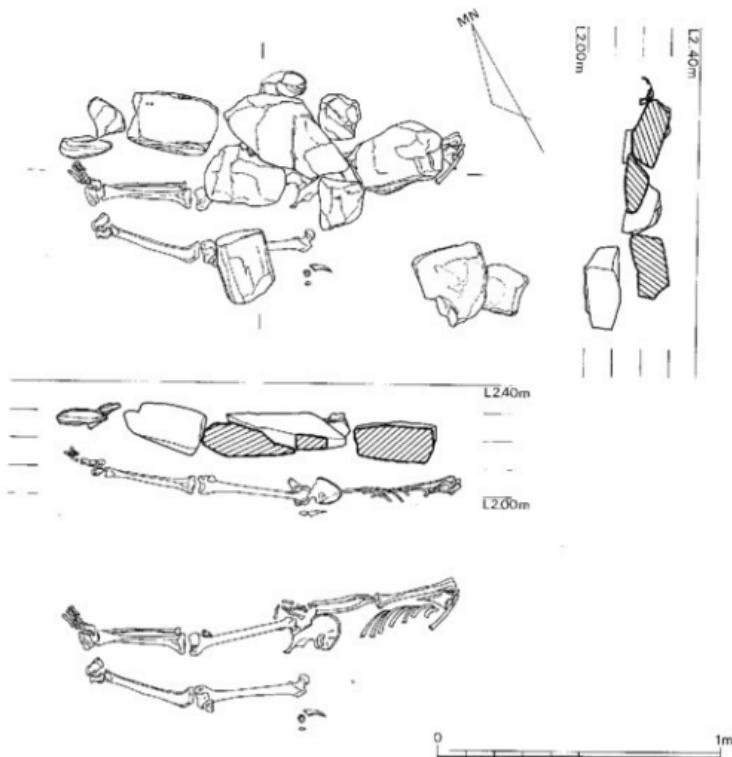
### 参考文献

- 1 中村浩一他『陶邑III』大阪府文化財調査報告書第30輯－本文編－大阪府教育委員会 1978
- 2 柳田康雄他『三雲遺跡IV』糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査 福岡県文化財調査報告書65集 1983
- 3 武末純一「土師器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－X』福岡県八女市宝阿所在遺跡群の調査 福岡県教育委員会 1977
- 4 宮崎貴夫「IV大堂遺跡」一大村市皆間郷大堂所在 長崎県文化財調査報告書第45集『長崎県埋蔵文化財調査集報II』長崎県教育委員会 1979
- 5 小池史哲「第3節B・B北地区出土の清状遺構と遺物」一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集『塙堂遠跡I』福岡県浮羽郡吉井町所在遠跡の調査 福岡県教育委員会 1983
- 6 高野吉司他『中島遺跡』長崎県文化財調査報告書第51集 電源開発株式会社 長崎県教育委員会 1980
- 7 藤田和裕「無文土器」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集 長崎県教育委員会 1978

#### (4) 古墳時代の遺構

E・F-2・3区で古墳時代の埋葬と考えられる人骨が出土をみている。(第24図)

埋葬状況は、現地表面より約1.2m掘り下げた所で人骨の出土をみて、仰臥伸展葬であった。20~30cm程の砂岩および安山岩の礫を人骨の上に蓋がわりにのせて用いたものとみられ、頭部を東に向け、主軸方位N118°Eを測る。東側頭蓋骨及び左側上肢骨、椎骨、左側対骨を、イモガマ掘りの際、削りとられ50cmほどはなれた位置に再埋葬されていたが、搅乱をまぬがれた部分はきわめて正常な位置にあり、埋葬時の状態をそのまま残すものと判断される。また、搅乱を受けた頭蓋骨その他のものも、同一個体と考えられる。副葬品として、左側大腿骨付近に「刀子」と、大形のアワビを右側大腿骨近くにみることができた。



第24図 1号人骨出土実測図 (No. 1)

埋葬遺構の他にB-3～B-8区の間で、焼土、Pit、貝層をみており第25図～第26図に遺物出土状況と合わせて、遺構配置を記載させている。

B-3区において、Pit、焼土、貝層の検出をみているが、黒色砂層（3層）からとみられる。Pitをみたが明確な掘り込み面をとらえられず5層上面に検出した。Pitは3～4cm程で5層の混貝砂層にあたり、柱穴の可能性をみるとどった。また平面図および土層東壁断面において、インレタを付して図示する部分に焼土を検出しているが、遺物の出土をみていない。この焼土上面において貝層（3b層）の形成をみており、遺物との関係から推定すると8世紀頃に貝層の形成をみてると判断された。また、グリッド南北中央部より西側部分において、角礫の集石を見る。遺物も数点出土をみており、生活遺構とどのような関連があるか、明確に判断を知ることが出来なかった。なおこの集石部分は小さい点で示している。

B-6区では、P-17の破線で示した部分とP-36に朝鮮系の上器とみられる軟質土器の一括資料をみており、大陸文化との接触が、本遺跡においてもとらえられたことは、5世紀頃の大連文化の伝播経路に問題をなげかけるものと考えられる。またこの地区では、生活の一端をのぞかせる鉄鏃の出土もみており、生活状況空間を求める手がかりを残していると考えられた。

X-6区この地区は、B-6、B-8区について遺物の出土（929点）をみるもの、3層に角礫が散在しており、遺構の検出をみることができなかった。しかしここでは、製塩土器とみられる底部が2点と、タタキ整形をおこなった上器が1点出土をみている。

B-8区は、5層上面に、平面図において記載したようなグリッド北西隅から南東隅において、色調の変化をみており線引きをおこなっている。この線引きした南西部分にPitおよび焼土の検出をみており、生活遺構に関連したものとして、とらえられるところであるが、砂地の堆積層であり詳細な調査が困難なことに加えて、土層色調の判別がむずかしく、住居遺構と明確に判断するまでにはいたらずに掘り下げを中止して、埋めどしをおこなった。

またA-13～B-C-42区の間では、遺構の検出を見ることはなかったものの、D-21区まで3層の黒色砂層がみとめられるところからすれば、この地区までは確實な生活址が、残されている可能性を持たせているものである。

以上が古田遺跡における遺構検出状況であった。この調査区を自然地形下においてみた場合に、海岸部近くが埋葬区にあてられていて、それからやや奥まって開けた部分即ちB-6、B-8、X-6区を中心に貝層、および焼土、Pit、遺物等の生活遺構区を形づくる様相を呈し、それより南側地区のせばまったく部分へいくと遺物の出土が急激に減少することをみることができるものであった。

(町田)

## (5) 古墳時代の遺物分布状況

上層図でもふれたようにB-1～D-21区まで南北に3層の黒色砂層が約70mにわたって堆積をみている。この地区の中でもっとも上師器、須恵器の出土をみたのがB-6、B-8、X-6区である。これと比較できる地区がA-13、B-3区の2ヶ所があげられる。A-13区では、弥生土器と混じって、土師式上器の甌、环の出土をみており、本調査区における土師器のもっとも古い段階としてあげられるものとみられる。またB-3区における須恵器出土品は、現調査地区でのもともと新しい遺物と判断されるところである。

さて各グリッド別に遺物出土状況をみていくと海岸に近いB-1、B-2、E・F-2、3地区出土の3層遺物はローリングを受け、丸みを帯びてその形状を知り得ない小片がほとんどを占めるものであった。ただ例外的に人骨が頭部を擾乱されてはいたものの、埋葬時のままに出土したことであった。E・F-2・3区において須恵器の环身の出土をみているが、これもかなり磨耗している。

### B-3～8区での遺物状況（第25図、第26図）

B-3区では、8世紀代の須恵器を多く出土しており、貝層（3b層）の形成をみたのはこの時代頃からのものとみられる。

B-6区では、B-3区から最大で約14m南へ離れたところであるが、遺物の出土状況をみると、朝鮮系の上器（軟質土器）の一括資料の出土をみている地区である。またその他に、須恵器、土師器、鉄器の出土をみており4世紀後半～7世紀頃にかけての出土遺物をみている。

X-6区では、B-6区から最大で約12m西へ離れたところで、塩製土器底部とみられるもの、上師器、須恵器片の出土をみている。布留式土器頃の遺物を中心に出土をみている。

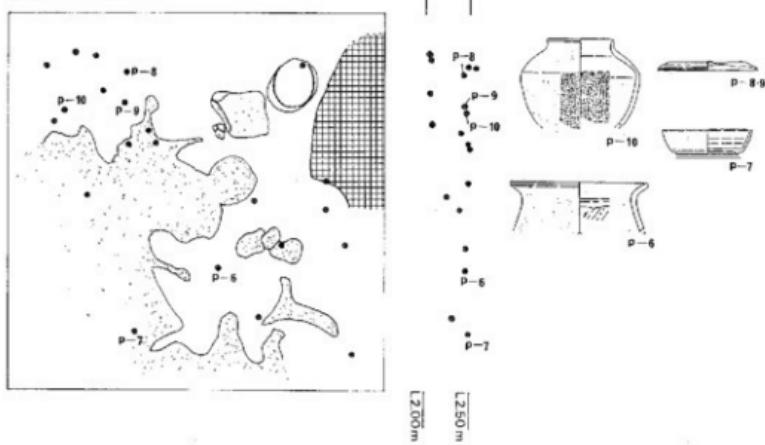
B-8区では、布留式土器を中心とする8世紀頃までの須恵器の出土をみるものであるが、最下層より弥生時代の土器底部とみられるものが出土をみている。

A-13区は須恵器の出土をまったくみなくなり、出土点数もⅢ層で145点と上師式土器出土が極端に減る現象をとらえることができた。またこの層からは弥生後期におけるレンズ状の底部の出土をみている。

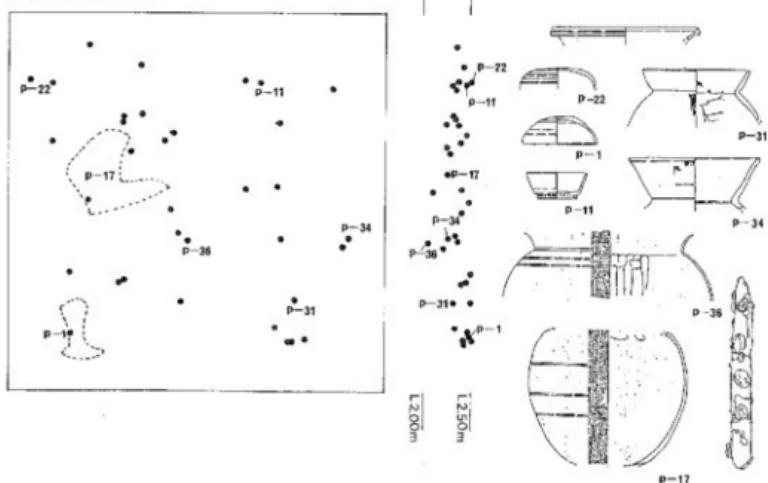
その他D-18～26区までも数点の出土をみているが、形状を計ることのできるものがみられず、本遺跡における古墳時代の生活様相は、A-13地区からB-8、B-6、X-6区へ中心が移り、B-3地区周辺において須恵器の終焉をみる様相とみられる。

（町山）

B-3 東壁垂直分布

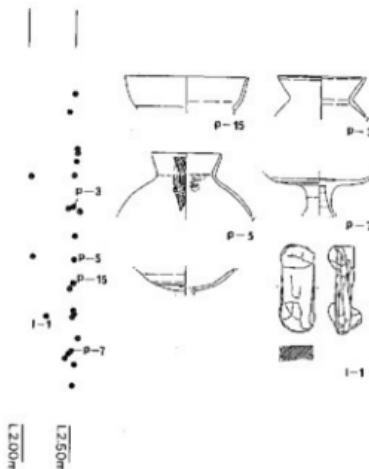
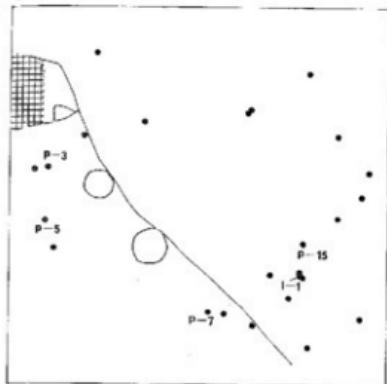


B-6 東壁垂直分布

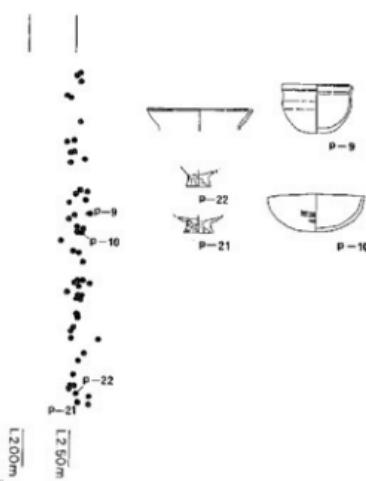
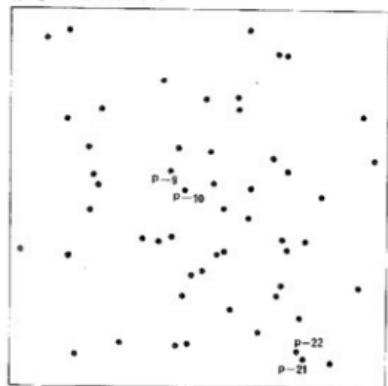


第25図 遺物分布状況図① (J<sub>6</sub>)

B-8 東壁垂直分布



X-6 東壁垂直分布



第26図 遺物分布状況図② (%)

表1 土師器①

通 番 号	国 名 番 号	出 上 区 特 性	数 量	法 規(cm)		
				II 径 器	器 高	備 考
第1種 1	18	A13-4層	5点接合。口縫部上に後縫きをもつ。口縫部外反し、すこし深部が凹出す。 外側口縫部から裏部にかけてハケ目を見る。内面側凹凸方向のハケ目 をつけた部から裏部にかけて斜め方向に細いハケ目を見る。	(24.0)	—	
2	n	B 6 - 3層	口縫部をうつり、内面に厚みを持った部の斜め側から口縫部持つ。 ローリングタッピングする。内縫部内外縫合部を茎する。船底表。地底 やあまい。	—	—	
3	n	X 6 P - 50	2点接合。内外面黄褐色を呈する。表面黒褐色。口縫部 上に浅い沈黙を見る。内外面ともにナチュラルを行く。	—	—	
4	n	B 8 - 3層 13	口縫部大きく内側溝。口縫部上に浅い沈黙を見る。内面、明黄色を呈し、 その前部黒褐色を呈する。船底表部を上葉表。地底表部を下葉表。 成成長。	(17.0)	—	
5	n	B 8 P - 3	内面黒褐色を呈し、外縫部に浅い沈黙を施す。うすくテグスのしき 跡に一筋入る。内縫部上に深い沈黙があり、やや内側溝。右端部が 船底に沈入。	(14.2)	—	
6	n	B 8 - 3層	内面黒褐色を呈し船底ややましい。成成長やあまい。口縫部上に明 黄色を呈り内外縫合部を持つ。内面ハケ目形成、外縫部ナチュラル。	—	—	
7	n	B 6 - 3層	内面黒褐色。外縫部赤褐色を呈する。口縫部内側、別張りを特徴。 口縫部上平坦に作る。外側は縫ふらむ。やや飛び出し丸みを持つ。	—	—	
8	n	B 8 - 3層	内面暗褐色を呈し、外縫部赤褐色を呈する。口縫部内側溝 する。内面深いハケ目形成、外面ナチュラルを行く。	—	—	
9	n	△X6-3層	内面赤褐色を呈する。内縫部上に沈黙を見る。 口縫部内溝する。	—	—	
10	n	B 8 - 3層	内面赤褐色を呈し、口縫部上に浅い沈黙を呈する。地底表よく結構され る。やや内側溝の白目を呈し、地底やあまい。	—	—	
11	n	B 8 - 3層	内面赤褐色を呈する。外面ミズビキをし、内面細いハ ケ目を呈する。内溝する口縫部を持つ。	—	—	
12	n	B 8 - 3層	4点接合。外縫部赤褐色を呈し、内面赤褐色を呈する。口縫部上に浅い 沈黙を見る。口縫部や内側溝。	—	—	
13	n	B 8 - 3層	外縫部ハケ目を口縫部から源部に集し底部下にかなり深いハケ目を 見る。内面ナチュラル。黄褐色を呈し外縫部赤褐色を呈する。横底表、船底表。	—	—	
14	n	X 6 - 3層	口縫部底上に沈黙を見る。内面がやや反りぎみで、口縫 部へ続く。内外面ナチュラル。内外面黄褐色を呈する。	—	—	
15	n	B 6 P - 32	内外面黄褐色を呈し、表面黒色を呈する。口縫部上に沈 黙を持つ。基部は外反する形態になる。地底表。	—	—	
16	n	X 6 - 3層	口縫部上に浅い沈黙を見る。内面側にナチュラルナチュラル形成をみる。 外縫部ナチュラル。内面側は沈黙を呈し、口縫部下へひっかけられること がある。外縫部ナチュラル。	—	—	
17	n	B 8 - 3層	内面黒褐色を呈し、口縫部由し、口縫部下へひっかけられること がある。外縫部ナチュラル。	—	—	
18	n	X 6 - 3層	口縫部の内側溝。口縫部内外縫合に引っ掛かりをみて。II 縫部上や丸みを持つ。	(16.8)	—	
19	19	X 6 P - 47	各部共同一範囲に限られるところがある。内面側とも背対背を呈する。 内面側は内側溝を呈する。外縫部は内側溝を呈する。内面のハケ目を施した所。 立ち、船底表。地底表。船底表。	(13.25)	—	
20	n	B 6 - 3層	口縫部上に丸みを持つ。口縫部を正面で内溝する。内面黒褐色を呈し、 船底に長い舟溝を呈する。地底やあまい。	—	—	
21	n	B 6 - 3層	黒褐色を呈し、外縫部ハケ目。ナチュラル。内面側方向にハケ目つ ける。地底表。船底表。船底表である。口縫部上に浅い沈黙を見る。	—	—	
22	n	B 8 - 3層	ナチュラル。その底に同様とみられるものが、X立ある。内面側 は赤褐色を呈し、外縫部ナチュラルを内側にみる。内面ナチュラル。	(18.0)	—	
23	n	B 8 - 3層	内面黒褐色を呈し、外縫部赤褐色を呈する。内面ハケ目行 い、外面ナチュラル。	—	—	
24	n	B 8 - 3層	口縫部上は平で凹で内溝する。内面内側溝を呈する。 外縫部ナチュラル。	—	—	
25	n	B 8 - 6層	黄褐色を呈し、船底ややましい。成成長。	—	—	

表2 上師器②

造物 番号	國 族 番 号	出 土 区	特 徴	法 量(cm)		備 考
				口 徑	高 度	
第15回 1	19	B 6 P 31, 30	3点接合。頭部から肩部へかけ、ヘラケズリをみる。口縁部や内側に凹する。口縁部内面はめらかを帯びハケ目を見る。外周も細いハケ目を部分的にみるが、ナデ消している。(17.0)			
2	"	B 8 - 3 層	内外面ともに黒褐色を呈する。外反し外面口縁部波をうつ。内面細いハケ目をつけ、外面ナテ整形打う。口縁部立ちとつまみあとの状態。胎土良、焼成ややあまり。	(16.8)	-	
3	"	X 6 P - 30, 16	2点接合。内外面赤褐色を呈するが、部分的に黒褐色を呈す。口縁部外周斜めのハケ目を伴うが、ナデ消し、瓶底から肩部にかけて、細いハケ目を行う。内面は口縁部横のハケ目を入れ、頭部から肩部にかけては、ヘラケズリをみる。他二回同一個体、3点接合がある。胎土、荒い。焼成不良。	(16.7)	-	
4	"	B 8 - 3 層 P - 10, 8, 15	3点接合。1点同一直体がある。内外面黄褐色を呈し、口縁部、波をうつ。外面に粗いハケ目。内面にも粗いハケ目をみると、ナデによって消し去っている。	(14.8)	-	
5	"	B 6 - 3 層 P - 34, 35	3点接合。口縁部直上に浅い沈線をみる。口縁部が長く、波をうつ。内外面にハケ目をみると、外面は瓶に内面は瓶にそれぞれハケ目をみて、ナラ削され、部分的にみる。内外面、黄褐色を呈す。胎土、緻密を粘土使用、焼成不良。	(20.8)	-	
6	20	B 8 - 3 層 P - 5	口縁部や内側に凹する。外面、黄褐色を呈し、内面赤褐色を呈す。外面全周にハケ目打うが、口縁部ナテ消す。内面口縁部ナテ打う、瓶底から肩部にかけ、指のおさえによって、瓶ハケナテを部分的に消している。後に2点接合をみている。	(11.4)	-	
7	"	B 8 P - 16	内外面、茶褐色を呈する。外面口縁部ナテによってハケ目を消すが、頭部にいくらく残る。内面粗いヘラによって整形する。胎土良、焼成ややあまり。やや外反する口縁である。	(13.7)		
8	"	B 8 - 3 層	内外面、暗褐色を呈する。外面粗いハケ目を口縁部、肩部に分けてみる。頭部から肩部にかけてヘラケズリ打う。胎土やや良。長径 6 mm 程のかたまりがまじる。焼成ややあまり。口縁やや外反し直上に浅い沈線をみる。	(12.8)	-	
9	"	B 6 - 3 層	2点接合。内外面赤褐色を呈し、口縁部内側するものとみられる。外面ヘラによるケズリ打う、みがく。内面口縁部ヘラケズリし、瓶底から肩部にかけ、地文風のケズリ残る。	-	-	最大径 17.6cm
10	"	B 6 - 3 層	外面黄褐色を呈し、内面赤褐色を呈する。やや口縁部、波をうつ。口縁部内外面ナテ消す。焼成良、胎土良。	-	-	
11	"	B 8 - 3 層	外面ハケ目をみると、ナラによって消される。内面ナテ打う。胎土良、焼成良。内外面黄褐色を呈する。	-	-	

表3 上部器(3)

遺物 番号	図版 番号	出土区	特 徴	法 量(cm)		備 考
				口 径	器 高	
第16回 1	21	B 3 - 3 層	内外面暗赤褐色を呈する。胎土黒い。焼成ややあまい。口縁部外反する。口縁部先端やや厚く、丸みを持つ。	(16.6)	—	
2	〃	B 8 P - 18	口縁部大きく外反し、内外面黄褐色を呈する。断面黑色を呈する。内面風化し、肌がある。外面ナテ行う。胎土やや黒い。焼成ややあまい。	13.8	—	
3	〃	B 1 - 3 層	内外面ナテを行ったものであろうが、ローリングを受け過肌がある。胎土は長石を含む。色調は赤褐色を呈する。	—	—	
4	〃	B 8 - 3 層	胎土黒い。内外面暗赤褐色を呈する。焼成あまい。	—	—	
5	〃	B 6 - 3 層	口縁部直立してやや端部で外反する。外面細いハケ目を口縁部から肩部にかけ、口縁部ナテ消している。内面、口縁部ナテ行い。頸部から肩部粗いハケで整形する。胎土やや黒い。焼成ややあまい。内外面赤褐色を呈する。	(10.0)	—	
6	〃	B 6 P - 8	内外面暗赤褐色を呈する。胎土真。焼成ややあまい。外向頸部、肩部に施すが、口縁部ナテ消している。内面、口縁部ナテ行い。頸部から肩部粗いハケで整形する。胎土やや黒い。焼成ややあまい。内外面赤褐色を呈する。	—	—	
7	〃	A X 6 P - 46	内外面赤褐色を呈する。口縁部外反し、頸部付近に細いハケ目をつける。内外面口縁部ナテ。頸部から肩部へ向う部分へラケズリを行う。	—	—	
8	〃	B 3 P - 11	淡黄褐色。口縁部外反する。胎土真。焼成あまい。内外面ナテ整形みる。	—	—	
9	〃	B 0 - 3 層	焼成真。横縞模様が付いている。胎土やや黒い。黄褐色を見する。口縁部は外反し、外面ハケ目はナテ消し。和田的に内面ナテを口縁部から肩部までみる。内面ベッタにより細目行い。チコボコの内面を呈する。外向頸部から肩部にかけ、横ナテを行い、それ以下を縦ナテ整形する。	14.2	—	
10	22	B 8 P - 2	3層の2点接合。口縁部を欠く。外面細いハケ目を付け、内面横にによるナテを行う。内外面暗赤褐色を呈する。胎面茶褐色を呈する。焼成あまい。	—	—	最大径 18.8cm
11	〃	B 0 P - 20	9点接合。口縁部内外ナテ行い、頸部から肩部にかけて細いハケ目をみる。内面横方向にハケ目をみる。内外面淡赤褐色を呈する。胎土真。緻密であり、焼成良好。	—	—	
12	〃	B 3 - 3 層	5点接合する。口縁と頸部を欠く。外面頸部まで粗いハケ目をみる。頸部から上はナテ整形、一部瘤状の粘土塊が付く。内面頸部までナテ行い、その下をヘラケズリする。内外面茶褐色を呈する。胎土真。焼成ややあまい。	—	—	
13	〃	B 3 P - 6	内外面茶褐色を呈するが、摩耗が著しい。口縁部外反し、ねるようになる。外面ナテ整形をみるようであるが、摩耗のため不明。口縁部も摩耗するが、一部ナテあとがみられる。頸部から肩部にかけ、ヘラによる括き研削整形をみる。胎土真。焼成ややあまい。	22.0	—	
14	〃	A 13 - 3 層	2点接合。外面細いナテ行う。内面口縁部まで粗いナテをみる。以下はヘラケズリをみる。赤褐色を呈する。胎土やや黒い。口縫面上就締みる。	22.0	—	

表4 土師器④

遺物 番号	国 版 番 号	出上区	特 徴	法 量(cm)		備 考
				口 径	器 高	
第17回 1	22	B 8 P-17	内外面赤褐色を呈する。ヘラミガキ整形。焼成ややあまい。胎土良。緻密な精十用いる。	(13.2)	—	
2	"	B 8 - 3層	窓部の様の部分で、内外面赤褐色を呈する。断面黒色を呈する。焼成ややあまい。窓部から口部付近までヘラガキを行い、肩部から脚部へ向う部分は細いハケ目その後ナデ削しを行う。	—	—	最大径 16.0cm
3	"	B 8 - 3層	2点接合。窓部の様の部分とみられるもので、肩部つまみあけた状態をみると。窓部から口部へ向うところにハケ目をつけ、ナデ削しを行ったようである。内面にもハケ目残る。	—	—	最大径 18.3cm
4	"	B 8 - 3層	外面向赤褐色を呈し、内面暗黄褐色を呈する。外面細いハケ目をつけ、ナデ削す。内面ハケ目を残す。窓部の様の部分。	—	—	
5	"	B 6 - 3層	2点接合。内外面紫褐色を呈する。外面細いハケ目でナデ整形する。内面窓部の部分との接合部が欠損するが、内面にも細いハケ目を残す。	—	—	最大径 13.0cm
6	23	B 6 - 3層	内外面ナデミガキを行う。脚とのつなぎめを指でおさえこむ。内外赤褐色を呈す。断面黒色を呈す。	—	—	
7	"	X 6 P-14, H	2点接合。内外面赤褐色を呈する。杯と脚部の接合部が剥落したものである。	—	—	最大径 9.0cm
8	"	X 6 P-46	外面向赤褐色を呈す。やや側中央部でふくらみかけんである。内面ヘラによるケズリを見る。焼成良。胎土やや荒めで、長石が混入する。	—	—	最大径 5.06cm
9	"	H 6 P-26	脚部を欠く脚である。中央部でややふくらみかけんに窓部との焼きっちりとわかる。内外面黄褐色を呈する。	—	—	最大径 8.35cm
10	"	B 8 P-19	外面向赤褐色と黄褐色を呈する部分とがみられる。脚上部ミズビキのあとが残り、下部ハケ目を削めにめぐらす。これも脚部と脚の境をきっちり作る。	—	—	最大径 7.2cm
11	"	B 6 P-21	内外面黄褐色を呈す。断面黒色を呈す。ヘラケズリを行うが、外面向化がみられる。内面ヘラケズリの痕跡を見る。	—	—	最大径 6.2cm
12	"	H	内外面赤褐色を呈する。上部にハケ目が残る。ヘラによって内外面窓型を行う。胎土良。焼成ややあまい。	—	—	最大径 4.7cm
13	"	X 6 P-29	内外面黄褐色を呈す。深い器形を作り、内面窓型から脚部へきつたらした立ちあがりをみると。口部部に浅い注縫をみると。細いハケ目を作る。同一個体とみられる複数片を他にみる。	—	—	底部径 12.6cm
14	"	A13-4層	内外面赤褐色を呈する。焼成良。胎土良。口縁部が丸くなり、外面向淺い腹をもつ。	—	—	底部径 8.0cm
15	"	B 8 - 3層	脚部上器か。内外面淡黄褐色を呈し、断面黒色を呈す。脚部分と黄褐色を呈す部分がみられる。外面向タキをみ。内面指でおさえたような瓶底をみると。	—	—	
16	"	X 6 P-42	内外面赤褐色を呈す。底部指による成形である。脚から脚部へ向うところにタキを行ったような同心円の文様がみられる。	—	—	底部径 4.0cm
17	"	X 6 P-22	X 6-42と同様の脚で指による成形である。	—	—	底部径 4.8cm

表5 土師器⑤

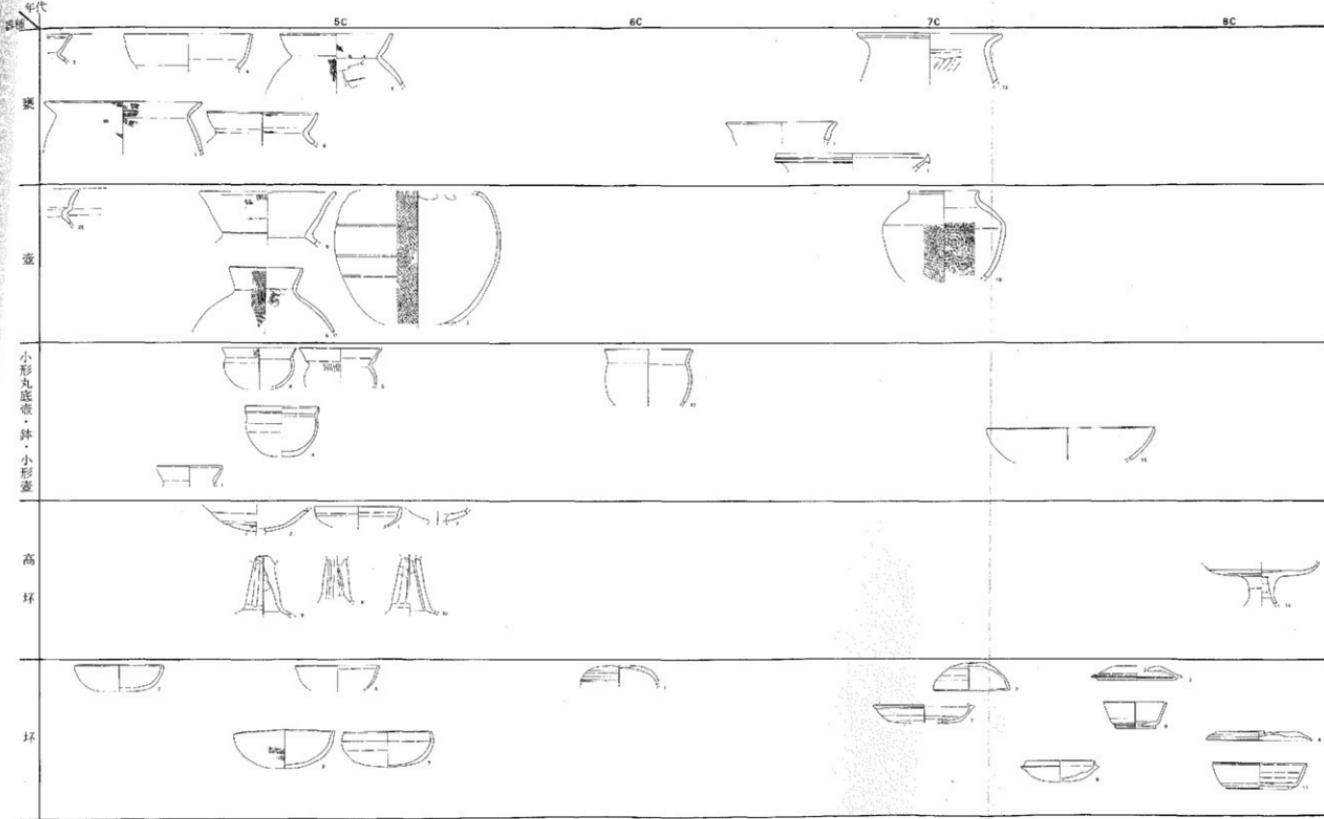
遺物番号	開拓番号	出土区	特徴	法量(cm)	備考
				口径×器高	
第18回 1	24	B G - 3層	口縁内面下に浅い凸抜状の凹みが入っている。やや口がひらきぎみの杯である。	(13.0)	—
2	"	A-13-4層	内面墨ミガキを施し、黒色を呈する。外側暗褐色を呈す。器の付着を部分的にみると、良石を胎土に混入するが、緻密な粘土を使用する。外面口縁部から底部までケズリを行う。	13.4	4.1
3	"	6 X - 3層 P 4.7.10	黄褐色を呈す。焼成良、胎土良。いびつな形状を呈する。17直接合。	15.4	6.0
4	"	X 6 P-12	口縁直上に沈窪状の凹みがみられる。外側へラケズリ行い、内面ミガキを行なう。口縁外側つまみあげた状態。		
5	"	B 8 P-9	赤褐色を呈し、外側へラケズリ行なう。内面ミガキをかける。胎土緻密な粘土使用。		—
6	"	B G - 3層	口縁部から底部付近までへラケズリをみ、みがきあげる。内面ナデしあげ行なう。内外面赤褐色を呈する。胎土緻密な粘土使用。焼成ややあまいか。	(14.8)	—
7	"	B 6 P-24	外側へラケズリを行い、みがく。内面ナデ盛形する。内外面赤褐色を呈する。口縁部外側でやや内側へ傾く。焼成良。	13.3	5.5
8	"	X 6 P-24	赤褐色内外面呈する。内面口縁部へかかる部分、やや引っかかりがある。外側口縁下を擦によって内側へやや曲げる。	15.1	—
9	"	B 6 - 3層	肩の部分より下をへラケズリ。肩より口縁部までをへラケズリのあとみがく。内面ナデしあげ。内外面とも暗赤褐色を呈する。砂混入。	(16.0)	—
10	"	B 6 - 3層	口縁部でやや内側へ曲がり、肩部途中よりへラケズリをみる。	15.8	
11	"	B 6 - 3層	内面黄褐色を呈し、外側様の付着によるものか、黒みを帯び、また肩部下部からへラケズリを行う。ローリングなし。口縁部ややせれる。	13.95	
12	"	B 6 P-15	肩部途中までミガキをかけ、肩部から底部に向う部分まで、縱、横、斜めの方向にクシガキを見る。	—	—
13	"	B 6 P-24	肩部から口縁部にかけてハケ目を用い、肩内部から底部附近にかけてへラガキを行う。	—	—
14	"	B 6 - 3層	外側口縁部に平らところで内側へ向き、クシ状のものでハケ目を肩部よりみる。内外面暗褐色を呈す。	—	—
15	"	X 6 P-2	内外面赤褐色を呈する。(レンガ色) 口縁部から肩部途中までクシガキをみる。それ以下はへラケズリを行い、みがく。内面ナデ盛形をみる。	(13.9)	—

表6 土器器⑥

遺物番号	図版番号	出土区	特徴	法量(cm)		備考
				口径	器高	
第19回 1	25	B 8 - 3層	内外面暗赤褐色を呈する。内面、外面ともにナテ整形する。口縁部渦曲するが、口縁直上、やや丸みを持つ。	(9.9)	—	
2	n	B 8 - 3層	内外面除青褐色を呈し、断面赤褐色を呈する。颈部でやや内溝し、口縁部に向って外反する。胎土良。焼成度やあまい。	(6.95)	—	
3	n	X 6 - 3層 P - 19	2点接合。内外面ともにヘラミガキを見る。裏褐色を内外面ともに呈する。胎上假密な粘土を使用。焼成度、II。練部や内溝する。	6.25	—	
4	n	A X 6 P - 9	5点接合。胎部中央部がややへこむ丸底である。外面きれいにみがきあけるが、内面、肌につやがない。石突の跡が表面に多くみられる。なおA X 6 - 3層と接合するものとみられる。	11	7.3	
5	n	B 6 - 3層	前から口縁にかけてナテ整形し、頸の部分から肩にかけてハケ目を施す。しかし、このハケ目を肩の部分ナテ消している。	12.7	—	
6	n	B 6 - 3層	2点接合。胎部途中までナテ整形し、胎部下部はクシ状のものでケズリハケ目がつく。内面ナテ整形。	—	—	最大径 11.6cm
7	n	A X 6 H	口縁部ナテ整形し、首部から肩にかけ、クシガキ文様を見るが、ナテ消し、うっすら見える。内面ナテがあるがザラザラする。	—	—	
8	n	B 8 P - 4	ハケ目のあと、ヘラケズリを行い。ハケ目を消し、みがきあける。そのため口縁部と底部付近にハケ目のあとが残る。	11.4	—	
9	n	B 8 - 3層	内外面、地黄褐色を呈し、外面上ナテミガキを見るが、内面風化してザラザラした表面をみる。	—	—	
10	n	B 6 P - 35	外面前黄褐色を呈し、内面暗褐色を呈する。胴部途中からクシ状のヘラでケズリ。首から上をナテ整形する。内面ナテ整形。	12.45	—	
11	n	D21 P - 26	内面赤褐色を呈し、口縁部黄褐色を呈する。外面模の付着をみると、色調赤褐色を呈す。内面焼いハケ目を胴部に施し、ケズる。	—	—	最大径 14.4cm
12	n	B 1 - 4層	模の付着をみる。ローリング受け。移形底不明確である。赤褐色を呈する。	13.6	—	
13	n	B 6 - 3層	外向淡褐色を呈し、内面暗褐色を呈す。厚みを持つ手捏土器。	—	—	最大径 7.8cm
14	26	A X 6 - 3層	焼成度やあまい。外面ミガキをかける。底部周辺、模の付着をみると、内外面黄褐色を呈するが、風化が進み、底部やや尖りきみである。	—	—	最大径 16.8cm
15	n	B 6 P - 23	9点接合。内外面赤褐色を呈し、内面ヘラケズリを行い。外面上全体にミガキをかける。底部はわりとすわりのよい丸底である。	—	—	最大径 21.6cm

表7 猿忠器①

遺物 番号	岡 版 番 号	出土区	特 徴	法 量(cm)		備 考
				口 径	深 度	
第21回 1	28	B 6 P - 22	内面灰色を呈し、唇面ザラッとした状態をみる。外面茶褐色の斑点がましむ。淡紫色をなす。返りが小さい。天上外画ヘラによるケズリと階段状をなす。断面灰色。	—	—	最大径 12.2cm
2	"	B 6 - 3 層 I	17点接合。内外画灰色を呈する。ワタ、糸などに作る。大上部へラケキをみるとか、かるい、いびつなケズリ方をする。体部から口縁部にかけてはミズビキを行っている。	11.7	4.4	
3	"	B 6 P - 1	外画赤褐色を呈し、内面青灰色を呈する。生焼けの猿忠器か。口縁部細くつまみあげた形状をし、返しの部分端は丸みを帯びる。	14.0	—	
4	"	B 3 - 3 層 P - 8, 9	13点接合。口縁部丸くおさめる。大上部、内面つまみをつけたためおきしげられ盛りあがる。内外画灰色を呈し、断面灰色である。	15.9	1.4	つまみ 1.6cm
5	"	B 6 P - 28	B 3 区でみたものと同質の猿忠器であるが、口縁先端部が厚みを持たず、尖りぎみである。内外画淡灰色を呈し、断面も同様である。	(19.35)	—	
6	"	B 3 P - 2, 3, 9	内外画淡灰色を呈す。つまみ欠損するが、やや中央部から反りぎみに立ちあがる部分がみえる。口縁部から天上部までに2段の尖り凹みをみる。	16.8	—	
7	"	II	断面あざき色を呈し、内面灰色を外面暗灰色を呈す。口縁部を欠く、クロクロ時まわりにまわす。返りがみじかく、その下部反りきった状態から薄曲し、唇部へんづく。	—	—	最大径 15.6cm
8	"	E, F P - 2, 3	かななりローリングを受け、破損部丸くすりへる。口縁たろあがりやや内曲する。返りがふくらみかけんに削離つづく。内外画淡灰色を呈す。焼成時に内面ふくらんだ部分がみられる。またヘラ記付とみられるものの底部にみえる。	12.05	3.3	着部径 10.4cm うちあがり高 0.8cm
9	"	B 6 P - 11	高台外から内へやや丸みを持ちながら傾斜する。器内面内外画灰色を呈する。体部から底部へむけてややふくらみかけんである。	9.6	4.1	高台径 6.35cm 高台高 0.5cm
10	"	A O, H	ローリングをうけ、器壁が丸みを帯びる。高台が斜めに傾斜し、口縁部丸くつく。淡灰色を内外画呈する。	14.4	3.8	高台高 3.8cm
11	"	B 3 P - 7	高台や外から内へ傾斜する。内外画灰色を呈する。杯と高台のはりつけ部分で平坦な面を作り、口縁部へたらあがる。2点接合。	14.25	4.0	高台径 10.15cm 高台高 0.4cm
12	"	B 3 P - 4	高台や中央部が丸みを持つ形状を呈し、内面が湾曲する。高台と杯をはりあわせた部分から脱落した状態がみられる。また高台外面上部から水平に切りとったようにミズビキが往す。	—	—	高台径 9.1cm 高台高 0.5cm
13	29	B 1 - 3 層	内外画あざき色を呈す。断面も同様である。唇端部を引き出し、その上部に凹みをみ、段差ができる。胎土良。焼成済半。ローリングを受け、壁面丸みを帯びている。	—	—	
14	"	B 8 P - 7	内外画灰褐色を呈する。口縁部を欠くが、杯と脚とを接合したとみられる部分がみえる。焼成ややあまいか。胎土良。杯部はやや平坦な面を有する。脚外面はしばりこんだようなねじりがみられる。	—	—	最大径 17.3cm
15	"	B P - 9	2点接合。内外画淡灰色を呈する。焼成時に口縁部の変形をきたしたとみられる部分がある。またその下に他の胎物が付着する部分をみると、やや内曲する胎形であり、口縁部尖りぎみに丸くした状態をみる。	25.85	—	
16	"	B 3 P - 10	内外画淡褐色を呈す。外面肩部より胴部にかけ様子のタタキを行い、内面肩より下部に同心円文のタタキをかされている。また内面にはクロロの整脚底がみられる。一部、焼成時の压痕が内面にみられる。	10.4	—	
17	"	B 8 P - 11	焼成ややあまい。色調灰色を呈するが、口縁部内面いぶしたような色調がみられる。	17.7	—	



第27図 古田遺跡編年図

### III 長崎県小佐々町古田A遺跡出土の古墳時代人骨

\* 松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二 \*

#### はじめに

長崎県北松浦郡小佐々町樺泊免字古田に所在する古田A遺跡の範囲確認調査が1984年（昭和59年）に行なわれたが、この調査で、人骨が出土した。この人骨は古墳時代に属する人骨と考えられており、また保存状態は良好なものである。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、日本人の成り立ちやその形質変化を明らかにするために、西日本各地から出土する古人骨の蒐集とその形質人類学的研究を続けている。長崎県では縄文時代および弥生時代人骨の出土例は比較的多く、特に、この地方の弥生時代人骨は日本人の形質変化を明らかにする上では、欠くことのできない貴重な資料として活用されている。このように縄文、弥生時代人骨は比較的まとまった量が出土しているにもかかわらず、古墳時代人骨の出土例が著しく少なく、長崎県人の形質変化を、縄文時代から古墳時代まで時代を追って明らかにできないでいる。

本例は、保存状態も良好なもので、本県の古墳時代の貴重な資料となるものであり、また、きわめて興味ある所見も認められたので、その特徴などを報告しておきたい。



第1図 古田遺跡位置図

#### 資料

本遺跡から出土した人骨は2体分の人骨である。そのうちの1体は、一部搅乱を受けていたが、大部分は埋葬されたままの状態で出土した。残りの1体は散乱状態で出土したもので、残存していたのは頬蓋片のみであった。なお、各人骨の性別、年令は表1に示すとおりである。

表1 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年令	備考
1号人骨	男性	壮年	
2号人骨	不明	壮年	散乱、頬蓋片のみ

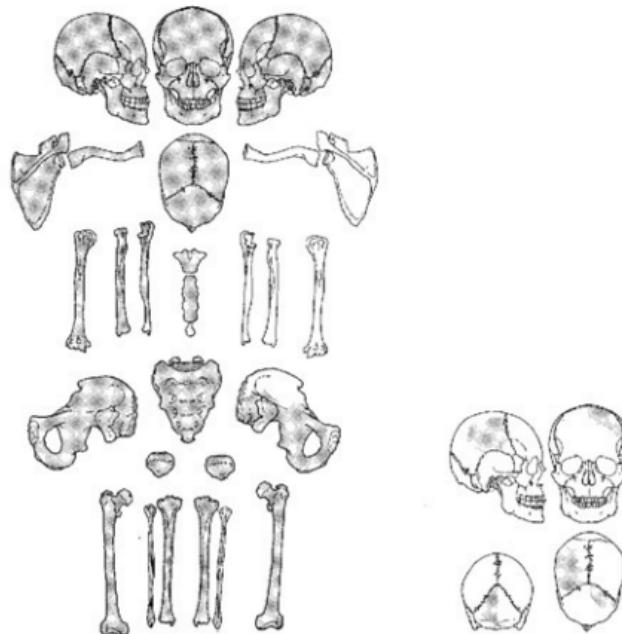
\*Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Shoji NAKATANI,

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University  
(長崎大学医学部解剖学第二教室)

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部は Howells (1973) の方法で計測した。また、この人骨は、別稿で述べられているとおり、考古学的所見より、古墳時代の終末（7世紀）ころに属するものと推定される。

また脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木 (1963) の方法と松下 (1983c) の方法で、歯の計測は藤田 (1949) の方法で行なった。

比較資料としては、西北九州弥生人 (内藤, 1971), 大友弥生人 (松下, 1981), 朝田古墳人 (松下, 1982, 松下・他, 1983) および宮崎県の地下式横穴から出土した古墳人 (灰塚, 上の原, 旭台, 大萩, 日守の各遺跡から出土した人骨の平均値を「地下式横穴古墳人」とした) を用いたが、顔面頭蓋に現代的な特徴が認められたので、当教室保管の近代人(明治生まれの人)骨を計測して、これを比較に用いた。



第2図 1号人骨残存状態(椎骨、肋骨、手の骨は省略した)

第3図 2号人骨残存状態

## 所見

### 1号人骨（男性、壮年）

人骨の残存状態は図2に示すとおりであり、また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

#### 1. 頭蓋

##### (1) 脳頭蓋

完全に残存していた。外後頭隆起の発達は良好で、最上項線、上項線とともに明瞭であるばかりではなく、両者の間には横走する隆起、いわゆる後頭隆起が認められる。乳様突起はそれほど大きいものではなく、外耳道骨腫は両側とも認められない。一主縫合は単純で、すべて内外両板とも開離している。

計測値を他の資料と比較しながら、検討してみた。表2に示すように、頭蓋最大長は176mm、頭蓋最大幅は139mmで、この両径とも、比較資料のいずれよりも小さい。バジオン・ブレグマ高は140mmで、この計測値は大きく、長崎近代人の平均値にきわめて近く、頭の高さは高い。頭蓋長幅示数は78.98となり、頭型としては中頭型に属している。古墳時代人骨のうちで、宮崎県の地下式横穴出土の古墳時代人骨についてはその特徴が次第に明らかになりつつあり、頭型は一般的に短頭性が強く、また、山口市の朝田墳墓群のうちの横穴墓出土の古墳時代人骨の頭型は長頭に傾いたものであった。西北九州地域の古墳時代人の頭型については、資料数が小さく、まだ明確にすることにつかないが、本例は中頭型であり、その示数値は比較的西北九州弥生人の値に近いものである。

頭蓋水平周は604mm、横弧長は302mm、正中矢状弧長は364mmで、この一径はいずれも小さく、頭蓋水平周、横弧長は比較に用いたいいずれの資料よりも小さく、頭蓋の径が小さいことがうかがわれる。

表2 脳頭蓋計測値（男性、mm）

1号人骨	古山A		西北九州弥生人 (内歯)		地下式横穴古墳人 (脳下)		朝田古墳人 (脳下)		長崎近代人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 頭蓋最大長	176	21	182.81	6	183.50	4	183.00	37	183.00	
2. 頭蓋最大幅	139	20	144.95	8	143.75	2	143.00	37	142.84	
17. バジオン・ブレグマ高	140	15	154.60	11	136.46	2	130.00	37	139.87	
8/1 頭蓋長幅示数	78.98	20	79.17	1	80.56	2	76.71	37	78.13	
17/1 頭蓋高示数	79.55	15	74.15	5	73.82	2	73.93	37	76.49	
17/8 頭蓋高示数	100.72	14	93.11	5	94.79	1	92.25	37	98.03	
23. 頭蓋水平周	504	19	530.42	1	523	1	525	37	518.62	
24. 横弧長	302	15	324.67	5	313.20	1	306	37	316.95	
25. 正中矢状弧長	364	17	376.47	3	372.33	2	359.00	37	374.24	

##### (2) 顔面頭蓋

右側の顔骨弓を欠く以外はほぼ完全である。眉上弓の隆起はやや強く、また、鼻骨も鼻根寄り1/3あたりからやや強く隆起している。鼻骨や鼻根部は狭く、鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は強く、また、上頸骨前頭突起のむきは矢状位である。すなわち、鼻根部は狭く、かつ鼻骨の隆起も強いもので、この鼻根部の形態は西北九州弥生人や宮崎県の地下式横穴古墳人とも

朝田古墳人とも異なるもので、現代的な特徴が認められる鼻根部である。そこで、鼻根部について、他の資料と比較してみることにした。表3に示すとおり、前眼窓間幅は14mm、鼻根横弧長は17mmで、両径ともいずれの資料よりも小さく、鼻根部の狭いことがうかがわれる。鼻根縦曲示数は82.35となり、この示数值は西北九州弥生人ほど小さくはないが、その他の資料よりは小さく、朝田古墳人のようには鼻骨や鼻根部は扁平ではない。眼窓間示数は15.38となり、この示数值もいずれの資料よりも小さく、鼻根部が幅広くないことがわかる。また、鼻根角は(131)度で、この角度も西北九州弥生人ほど小さくはないが、他の資料よりも小さい。このように本例の鼻根部には、西北九州弥生人的な特徴が認められず、中・近世を通り越して近代人的である。一方、前頭突起水平傾斜角は80度で、この角度は小さい。この角度は上顎骨前頭突起のむきが矢状位をしている繩文人が小さく、弥生、古墳、中世と時代が下がるに従って、大きくなることがわかっている。しかし、近代に入るとまた小さくなるような傾向が認められるので、この角度が小さいことは近代的な特徴と矛盾するものではない。

表3 鼻根部計測値(男性, mm, 度)

	古田A 1号人骨	西北九州弥生人 (松下)		地下式横穴古墳人 (松下)		朝田古墳人 (松下)		長崎近代人 (松下)		
		n	M	n	M	n	M	n	M	
50.	前眼窓間幅	14	18.79	15	19.87	5	19.60	37	16.62	
	鼻根横弧長	17	24.39	13	23.46	5	22.00	37	19.35	
	鼻根縦曲示数	82.35	13	76.72	13	83.42	5	88.98	37	86.26
57.	鼻骨最小幅	7	13	10.23	14	10.14	5	8.80	35	7.66
44.	兩眼窓幅	91	19	102.57	9	101.56	5	106.00	37	96.54
50/44	眼窓間示数	15.38	16	18.12	8	19.83	2	18.88	37	17.22
	前頭突起上幅(右)	99	15	8.60	13	10.62	5	9.60	37	8.97
	(左)	9	17	8.88	12	10.33	5	9.60	37	9.19
	前頭突起水平傾斜角	80	12	84.83	9	85.67	4	113.75	37	87.27
G - N 接触距離	2	24	2.33	10	2.20	1	2	37	2.57	
鼻根角	(131)	9	129.78	10	137.00	4	144.75	34	134.53	
	鼻根縦曲示数	-	9	18.48	10	18.76	4	13.08	34	16.79

表4 顔面頭蓋計測値(男性, mm, 度)

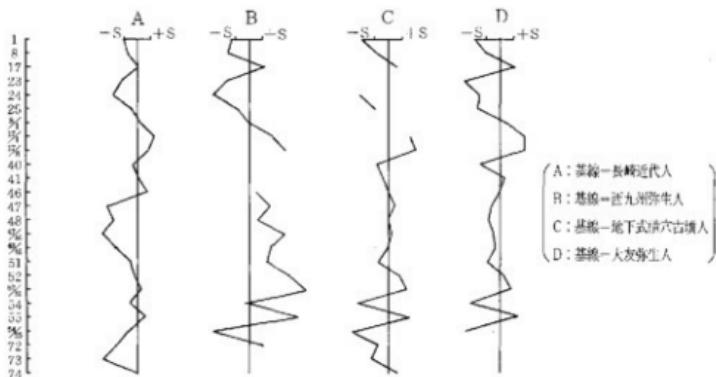
	古田A 1号人骨	西北九州弥生人 (内側)		地下式横穴古墳人 (松下)		朝田古墳人 (松下)		長崎近代人 (松下)		
		n	M	n	M	n	M	n	M	
40.	顎長	96	-	10	101.30	3	93.33	35	97.54	
41.	側顎長	72	-	13	73.31	4	70.75	37	71.76	
45.	顎骨弓幅	-	12	138.42	6	141.00	1 (140)	37	134.35	
46.	中顎幅	101	17	105.00	10	101.10	3	104.67	36	97.50
47.	顎高	115	14	117.07	11	113.36	3	118.00	19	125.53
48.	上顎高	64	17	68.06	15	64.20	5	67.60	35	69.91
47/46	顎示数(V)	113.86	14	111.78	7	112.99	2	115.86	19	129.13
48/46	上顎示数(V)	63.37	17	64.84	8	63.56	3	66.39	34	71.40
51.	眼窓幅(左)	42	15	43.07	12	43.17	3	45.67	37	43.05
52.	眼窓高(左)	34	15	32.80	18	32.78	3	36.67	37	34.38
52/51	眼窓示数(左)	80.95	15	76.18	12	76.71	3	80.41	37	79.92
54.	鼻幅	24	16	27.75	20	27.75	4	27.25	37	25.08
55.	鼻高	54	16	51.00	18	50.00	5	52.40	37	52.78
54/55	鼻示数	44.44	16	54.41	18	55.01	4	51.44	37	47.67
72.	全側面角	79	15	82.00	12	82.38	5	87.60	34	83.32
73.	左側面角	79	-	14	85.75	5	86.60	35	85.77	
74.	右側面角	77	-	13	71.69	5	69.40	34	77.00	

次に、その他の顎頭蓋の計測値を検討してみると、表4に示しているとおり、頬骨弓幅は計測できないが、左側の頬骨弓が残存しているので、正中矢状面までの距離を2倍して、推定値を出してみると、 $67\text{mm} \times 2 = 134\text{mm}$ となり、頬骨弓幅はあまり広いものではなく、頬骨の張り出しが弱い。しかし、中顎幅は101mmで、西北九州弥生人や朝田古墳人よりは小さいものの、近代人よりは大きく、地下式横穴古墳人の平均値に近く、中顎幅はあまり狭くはない。一方、顎高は115mm、上顎高は64mmと顎の高径は著しく低く、比較的地下式横穴古墳人の平均値に近い。従って、顎示数や上顎示数はそれぞれ、113.86、63.37となり、内示数值とも近代人より小さく、著しい低・広顎傾向を示す西北九州弥生人や地下式横穴古墳人に近い。すなわち、顎全体のプロポーションは近代人的ではなく、むしろ西北九州弥生人や地下式横穴古墳人に近いものである。

眼窩軸は44mm(右)、42mm(左)、眼窓高は34mm(右)、34mm(左)で、眼窓示数は75.00(右)、80.95(左)となり、右側はchamaeknoph(低眼窓)に、左側はmesokonch(中眼窓)に属している。左側について比較してみると、眼窓の諸径は比較的、長崎近代人に近いようである。

また、鼻輪は24mmで、どの資料よりも小さく、鼻高は54mmで、これはどの比較群よりも大きい。従って、鼻示数は44.44となり、leptorrhin(狭鼻)に属しており、この示数值はいずれよりも小さいが、比較群の中では比較的近代人に近い示数值である。全側面角は79度、鼻側面角は79度、歯槽側面角は77度である。歯槽側面角は朝田古墳人や地下式横穴古墳人よりは大きく、近代人の平均値と一致し、歯槽性の突顎傾向はほとんど認められない。

次に、頭蓋の特徴をより明確に把握するために、基線を変えて偏差折線を描いてみた。図4に示しているように、西北九州弥生人を基準にとった場合が、最も振幅が大きい。近代人にとった場合は顎高、上顎高、顎示数などで振幅が大きいが、その他の項目では比較的小さい。一方、地下式横穴古墳人や大友弥生人にとった場合は、近代人の場合とは反対に顎高、上顎高、顎示数などで、振幅が小さく、顎面全体のプロポーションがこれらと酷似していることがわかる。もう少し、比較資料との近遠関係をはっきりさせるため、ベンローズの大きさ距離と形態距離を算出してみた(13項目、標準偏差は関東現代人を使用)。図5に示しているように、大きさは地下式横穴古墳人に最も近く、次いで近代人、西北九州弥生人、大友弥生人の順で、朝田古墳人との距離は大きい。また、形態距離は近代人に最も近く、次いで大友弥生人、西北九州弥生人、地下式横穴古墳人となり、朝田古墳人とは形態距離において最も遠く、また、近代人と大友弥生人との間にはややひらきがある。すなわち、本例の頭蓋は径がやや小さく、顎頭蓋には低・広顎傾向が認められるが、鼻根部や鼻部などには近代人の特徴が認められ、総合的に判断すれば、形態的には近代人に最も近いようである。



第4図 偏差折線(頭蓋)

### (3) 下顎骨

下顎骨についても特筆することができる。それは下顎角が著しく外反していることである。下顎角幅は下顎関節突起幅と同じ 119 mm である。一般的な下顎骨では、下顎角幅は下顎関節突起幅よりも小さく、本例のように両幅径が同じ値という下顎骨を、今まで私達は実見したことはなかった。縄文人の中にはこれと似たものがあるかもしれないが、主な資料を検討してみたが、これ程までに外反したものは搜し出すことができなかつた。ところが同じ古墳時代人骨の中に、これとよくにた形態をもつ下顎骨を見出した。それは熊本県八代市の清水 1 号古墳出土の下顎骨である。保存状態が悪いので、下顎角幅は計測できないが、かなり広そうで、下顎角の外反の形態は本例と酷似している。地理的にも近い鹿児島県の古墳時代人骨の中によく似たものがあることは、本例の下顎骨以外にみられる形態的特徴を考察する上でもきわめて示唆的である。

また、オトガイ結節が著しく発達しており、その上縁部には溝が形成されている。このような下顎骨の特異な形態が、下顎骨以外の近代的な形態とあまりにもかけ離れていたため、下顎骨は別個体かとも疑ってみたが、歯のかみ合せや咬耗状態などから、同一個体と判断できるものであった。

このように、下顎骨以外は近代的であるのに反し、下顎骨の形態があまりにも異様であるが、この特異な形態を備えているのが、本例の最大の特徴である。

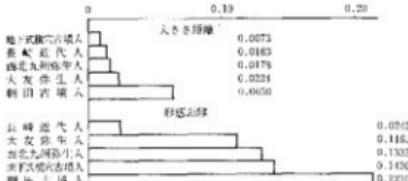
### (4) 歯

歯は上下両顎とも剥離した状態で、良く残存していた。残存歯を歯式で表すと次のとおりである。

$M_1 \odot P_1 P_2 C \quad I_1 I_1$	$\odot I_1 C \quad P_1 \odot M_1 M_2$
$M_3 M_2 M \quad P_2 P_1 C \quad I_2 I_1$	$I_2 I_1 C \quad P_2 P_1 M_1 M_2 M_3$

(○:歯槽閉存)

咬耗度は Broca の 1 度で、咬耗は著しく弱い。下顎右側の M<sub>3</sub> はやや水平方向に傾斜して植立しており(水平智歯)、上顎の M<sub>3</sub> は両側とも未萌出(先天的欠損)である。また、風習的抜歯の痕跡は認められない。



## 2. 四肢骨

### 1) 上肢骨

#### (1) 鎖骨

右側のみが残存していた。長さは長く、細い。

第5図 ペンローズの大きさ距離と形態距離・頸蓋(13項目)

#### (2) 上腕骨

右側のみが完全な状態で残存していた。長さはそれほど長いものではなく、骨頭も小さいが三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は最大長が 295mm(右)、骨体最小周は 64mm(右)、中央周は 69mm(右)で、長厚示数は 21.69(右)である。また、中央最大径は 23mm(右)、中央最小径は 18mm(右)で、骨体中央断面示数は 78.26(右)となり、骨体の扁平性は弱い。

他の資料と比較してみると(表5)、大きさでも形態的にも西北九州近・現代人や朝田古墳人に最も近いようである。

表5 上腕骨計測値(男性、右、mm)

	吉田A 1号人骨	大友出生人 (松下)		大森古墳人 (松下、他)		朝田古墳人 (松下、他)		西北九州人 (八木)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	295	9 294.33	1 291	1 299	72 296.35			
2.	上腕骨全長	286	8 291.75	1 288	1 294	72 290.35			
5.	中央最大径	23	37 24.46	3 22.33	3 23.00	72 23.56			
6.	中央最小径	18	37 17.97	3 16.67	3 17.67	72 17.68			
7.	骨体最小周	64	37 64.57	3 57.00	1 62	72 65.53			
7(a).	中央周	69	35 71.00	3 65.33	3 68.00	72 68.78			
6/5	骨体断面示数	78.26	37 73.60	3 74.71	3 76.84	72 75.06			
7/1	長厚示数	21.69	9 22.32	1 20.27	1 20.74	72 22.10			

表6 人腿骨計測値(男性、右、mm)

	吉田A 1号人骨	大友出生人 (松下)		大森古墳人 (松下、他)		朝田古墳人 (松下、他)		西北九州人 (柴田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	410	15 413.60	2 410.00	2 410.00	52 412.75			
6.	骨体中央矢状径	26	41 28.85	6 27.57	6 27.17(左)	52 27.79			
7.	骨体中央横径	26	41 26.07	6 25.33	6 26.07(左)	52 25.81			
8.	骨体中央周	82	41 87.22	6 83.33	6 85.17(左)	52 83.46			
9.	骨体上横径	31	42 30.62	2 30.50	6 30.17(左)	52 28.21			
10.	骨体上矢状径	24	42 24.83	2 22.50	6 24.50(左)	52 27.02			
8/2	長厚示数	20.25	15 21.13	2 20.63	2 21.03	52 20.43			
6/7	骨体中央断面示数	100.00	41 111.72	6 109.40	6 102.03(左)	52 108.04			
10/9	上骨体断面示数	77.42	42 81.34	2 73.76	6 81.29(左)	52 96.54			

### (3) 構骨

右側のみが完全に残存していた。長さはやや長く、骨体はそれほど太いものではない。骨間線は骨体近位1/3あたりで覗く突出している。

### (4) 尺骨

尺骨も右側のみが完全な状態で残存していた。長さはやや長いが、骨体は細い。

## 2) 下肢骨

### (1) 寛骨

右側はほぼ完全であるが、左側は腸骨翼と恥骨の一部を欠損している。径はあまり大きくなはない。大坐骨切痕の角度は小さい。

### (2) 大腿骨

左右とも完全である。長さはあまり長いものではなく、また、粗線の発達も悪いが、骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が410mm(右), 409mm(左), 骨体中央周は82mm(右), 81mm(左)で、骨体は男性としてはやや細く、長厚示数は20.25(右), 20.05(左)である。骨体中央矢状径は26mm(右), 24mm(左), 横径は26mm(右), 27mm(左)で、骨体中央断面示数は100.00(右), 88.86(左)となり、粗線や骨体両面の後方への発達はきわめて悪い。

他の資料と比較してみると(表6)、長さは大蔵古墳人や朝田古墳人の平均値に一致し、骨体の太さは大蔵古墳人に近い。また、骨体の形態は朝田古墳人に近いが、骨体上部の扁平性はこれよりも強い。

### (3) 脛骨

右側ともほぼ完全である。長さは長いものではなく、骨体も細い。前縁はS字状のカーブを描いており、ヒラメ筋線の発達も悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が338mm(右), 339mm(左), 骨体周は76mm(右), 75mm(左), 最小周は71mm(右), 69mm(左)で、骨体は細く、長厚示数は21.32(右), 20.72(左)である。中央最大径は29mm(右), 28mm(左), 中央横径は19mm(右), 18mm(左)で、横径が小さく、従って、中央断面示数は65.52(右), 64.29(左)となり、骨体は扁平である。

他の資料と比較してみると(表7)、長さは大友弥生人より短く、近・現代人の平均値に近い。骨体周や最小周はどの資料よりも小さく、骨体が細いことがうかがわれる。また、中央断面示数は比較に用いた4群よりも小さく、骨体は扁平である。

表7 鹿骨計測値(男性, 右, mm)

	古田A 1号人骨	大友 弥生人 (松下)		大森 古墳人 (松下, 他)		朝田 古墳人 (松下, 他)		西北九州人 (久松)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	333	339.58	—	—	—	—	72	331.88
1a.	脛骨最大長	338	347.86	—	—	—	—	72	339.12
1b.	脛骨長	329	—	357	—	—	—	72	325.78
8.	中央最大径	29	31.26	4	29.00	2	29.50	72	28.52
8a.	栄養孔位最大径	30	34.63	3	32.00	2	34.00	72	31.02
9.	中央横径	19	21.29	4	20.25	2	21.50	72	21.55
9a.	栄養孔位横径	22	23.22	3	22.23	2	24.00	72	24.71
10.	骨体周	76	82.85	4	78.25	2	80.00	72	80.45
10a.	栄養孔位周	84	82.00	3	87.33	2	92.00	72	89.10
10b.	最小周	71	75.35	3	74.00	2	75.00	72	71.64
9/8	中央断面示数	65.52	68.03	4	69.94	2	72.81	72	75.76
9a/8a	栄養孔位断面示数	73.33	67.16	3	69.96	2	70.48	72	79.81
10b/1	長厚示数	21.32	12	21.88	—	—	—	72	21.76

## (4) 脊骨

両側ともよく残存していた。長さは短いが、骨体はやや大きい。

## 3. 推定身長値

大腿骨、脛骨、上腕骨および桡骨のそれぞれ最大長から Pearson および藤井の式を用いて算出してみた(表8)。右人腿骨からは 158.39cm(Pearsonの式)、156.17cm(藤井の式)となり、低身長である。Pearsonの式から算出した推定値を他の資料と比較してみると、表9に示しているとおり、比較に用いた資料とほとんど大差なく、朝田古墳人の平均値に一致している。

表8 推定身長値(cm)

古田A 1号人骨男性 Pearsonの式 藤井の式		吉田A 1号人骨		西北九州 発生人		大友 弥生人		大森 古墳人	
		n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨(右)	158.39	156.17							
(左)	158.20	155.81							
脛骨(右)	158.97	157.49							
(左)	159.21	157.55							
上腕骨(右)	156.01	155.55							
(左)	—	—							
桡骨(右)	162.79	160.20							
(左)	—	—							

表9 推定身長値(男性, cm, 右大腿骨, Pearson)

吉田A 1号人骨	西北九州 発生人		大友 弥生人		大森 古墳人		朝田 古墳人	
	n	M	n	M	n	M	n	M
158.39	16	158.79	15	159.06	2	158.39	2	158.39

## 4. 性別・年令

性別は、大坐骨切痕の角度が小さいことや頭蓋の形態から男性と推定した。年令は、縫合が内外肉板ともに閉鎖していること、恥骨結合面に平行隆線が残存していることから、壯年と考えられる。

## 2号人骨(性別不明, 壮年)

前頭骨前頭鱗の左側部、右側側頭骨および後頭骨左側半が残存していたにすぎない(第3図)。骨壁はやや薄い。また冠状縫合とラムダ縫合の一部が観察できた。この縫合はいずれも内外肉板とも閉鎖していたものと考えられることから、年令は壯年と推定したが、性別は不明である。

表10 頭蓋計測値 (mm)

	吉田 A 1号人骨 男性
1. 頭蓋最大長	176
8. 頭蓋最大幅	139
17. バジオン・ブレグマ高	140
8/1 頭蓋反幅示数	78.98
17/1 頭蓋長高示数	79.55
17/8 頭蓋幅高示数	100.72
頭蓋モズルス	151.67
5. 頭蓋底長	102
9. 最小前頭幅	88
10. 最大前頭幅	114
11. 兩耳幅	127
12. 最大後頭幅	107
7. 大後頭孔長	36
16. 大後頭孔幅	34
16/7 大後頭孔示数	94.44
23. 頭蓋水平周長	504
24. 横張長	302
25. 正中矢状頸弧長	364
26. 正中矢状前頸弧長	114
27. 正中矢状頸頸弧長	133
28. 正中矢状後頸弧長	117
29. 正中矢状前頸弦長	102
30. 正中矢状頸頸弦長	118
31. 正中矢状後頸弦長	99
29/26 矢状前頭示数	89.47
30/27 矢状頭頂示数	88.72
31/28 矢状後頭示数	84.62
Vertex Rad.	122
Nasion Rad.	91
Subsp. Rad.	95
Prosth. Rad.	99

表11 顔面頭蓋計測値 (mm, 度)

	吉田 A 1号人骨 男性
40. 頬長	96
41. 側頬長	72
42. 下顎長	105
43. 上顎幅	102
45. 顎骨弓幅	—
46. 中顎幅	101
47. 顎高	115
48. 上顎高	64
47/45 顯示数(K)	—
48/45 上顎示数(K)	—
47/46 顎示数(V)	113.86
48/46 上顎示数(V)	63.37
顎面モズルス	—
前眼窓間幅	14
兩眼窓幅	91
50/44 眼窓間示数	15.38
51. 眼窓幅(右)	44
(左)	42
52. 眼窓高(右)	33
(左)	34
53. 鼻幅	24
55. 鼻高	54
54/55 鼻示数	44.44
57. 鼻骨最小幅	7
60. 上顎齒槽長	49
61. 上顎齒槽幅	66
62. II蓋長	—
63. 口蓋幅	45
64. 口蓋高	12
61/60 上顎齒槽示数	134.69
63/62 口蓋示数	—
64/63 口蓋高示数	26.67
72. 全側面角	79
73. 嘴側面角	79
74. 齒槽側面角	77

表12 鼻根部計測値 (mm, 度)

	古田A 1号人骨 男性右
50. 前眼窓間幅	14
鼻根横弧長	17
鼻根弯曲示数	82.35
57. 鼻骨最小端	7
44. 両眼窓幅	91
50/44 眼窓間示数	15.38
前頭突起上幅(右)	9
(左)	9
前頭突起水平傾斜角	80
G-N 投影距離	2
鼻根角	(131)
G-R 距離	-
垂線高	-
鼻根陷凹示数	-

表13 下顎骨計測値 (mm, 度)

	古田A 1号人骨 男性
65. 下顎開節突起幅	119
65(1). 下顎筋突起幅	-
66. 下顎角幅	119
67. 前下顎幅	48
68. 下顎長	70
68(1). 下顎長	106
69. オトガイ高	33
69(1). 下顎体高(右)	31
(左)	30
70. 下顎体高(右)	27
(左)	26
70(1). 枝 高(右)	61
(左)	57
70(1). 前枝高(右)	-
(左)	61
70(2). 最小枝高(右)	53
(左)	49
70(3). 下顎切痕高(右)	-
(左)	13

表14 鎮骨計測値 (mm)

	古田A 1号人骨 男性
1. 鎮骨最大長	147
2. 骨体弯曲高	6
2a. 骨体弯曲高	28
2(1). 肩峰端骨曲高	29
3. 骨体弯曲弦長	100
4. 中央垂直径	11
5. 中央矢状径	11
6. 中央周	39
6/1 長厚示数	26.53
2a/1 弓曲示数	19.05
4/5 鎮骨断面示数	100.00
2(1)/1 肩峰端弯曲示数	19.73

	古田A 1号人骨 男性
71. 枝 幅(右)	32
(左)	31
71a. 最小枝幅(右)	32
(左)	31
71(1). 下顎切痕幅(右)	-
(左)	37
79. 下顎枝角(右)	131
(左)	127
66/65 下顎幅示数	100.00
68/65 鮎長示数	58.82
69(2)/69 下顎高示数(右)	81.82
(左)	78.79
71/70 下顎枝示数(右)	52.46
(左)	54.39
71a/70(2) 下顎枝示数(右)	60.38
(左)	63.27
70(3)/71(1) 下顎切痕示数(右)	-
(左)	35.14

表15 肩甲骨計測値 (mm)

	古田 A 1号人骨 男性 右
1.	肩甲骨形態学幅
2.	肩甲骨形態学長
2a.	肩甲骨長
3.	腋高様長
4.	上縁長
5.	棘下窓投影幅
5a.	棘下窓形態幅
6.	棘上窓投影幅
6a.	棘上窓形態幅
7.	肩甲棘投影長
8.	棘基底長
9.	肩峰最大幅
11.	鳥口突起最大長
12.	闊筋窓長
13.	闊筋窓幅
14.	闊筋窓深
2/1	肩甲骨示数
2/21a	肩甲骨長示数
5/2	棘下窓示数
6/2	棘上窓示数
3/1	総示数

表16 上腕骨計測値 (mm)

	古田 A 1号人骨 男性 右
1.	上腕骨最大長
2.	上腕骨全長
3.	上端幅
3(1).	横上径
4.	下端幅
5.	中央最大径
6.	中央最小径
7.	骨体最小周
7(a).	中央周
8.	頭最大横径
9.	頭最大矢状径
10.	頭最大欠状径
11.	滑車幅
12.	小頭幅
12(a).	滑車および小頭幅
12(b).	小頭幅
13.	滑車深
14.	尺骨頭窓幅
15.	尺骨頭窓深
6/5	骨体断面示数
7/1	長厚示数
9/10	頭断面示数
11/4	滑車上頭示数
	23.00

表17 桡骨計測値 (mm)

	古田 A 1号人骨 男性 右
1.	最大長
1h.	平行長
2.	機能長
3.	最小周
4.	骨体横径
4a.	骨体中央横径
4(1).	小頭横径
4(2).	頭横径
5.	骨体矢状径
5a.	骨体中央矢状径
5(1).	小頭矢状径
5(2).	頭矢状径
5(3).	小頭周
5(4).	頭周
5(5).	骨体中央周
5(6).	骨下端幅
3/2	長厚示数
5/4	骨体断面示数
5a/4a	中央断面示数

	古田 A 1号人骨 男性 右
1.	最大員
2.	機能長
2(1).	肘頭小頭長
3.	最小周
6.	肘頭幅
6(1).	上尺骨幅
7.	肘頭深
7(1).	肘頭鉤突距離
8.	肘頭高
9.	橈側闊筋面前幅
10.	橈側闊筋面後幅
11.	尺骨矢状径
12.	尺骨横径
S	中央最小径
L.	中央最大径
C	中央周
3/2	長厚示数
7/6	肘頭深示数
8/6	肘頭高示数
11/12	骨体断面示数
S/L	中央断面示数

表19 大腿骨主要計測値 (mm)

	古田A 1号人骨 男性	
	右	左
1. 最大長	410	409
2. 自然後長	405	404
3. 飛人軸人長	402	403
4. 自然位軸人長	388	387
5. 骨体中央矢状径	26	24
6. 骨体中央横径	26	27
7. 骨体中央周	82	81
8. 骨体上端徑	31	32
9. 骨体上端徑	24	22
10. 骨体直状徑	33	32
11. 頸矢状徑	23	24
12. 頸周	106	107
13. 頸垂直徑	43	43
14. 頸横徑	43	43
15. 頸周	137	138
16. 上部幅	79	78
8/2 長厚小数	20.25	20.05
6/7 骨体中央断面示数	100.00	88.89
10/9 上骨体断面示数	77.42	68.75
16/15 頸断面示数	69.70	75.00
19/18 頸断面示数	100.00	100.00

表20 脊骨計測値 (mm)

	古田A 1号人骨 男性	
	右	左
1. 頸椎全長	333	333
1a. 颈椎最大長	338	339
1b. 颈骨長	329	328
2. 颈椎間距離	317	316
3. 最大上端幅	75	74
3a. 上内関節面幅	33	32
3b. 上外関節面幅	29	29
4a. 上内関節面深	49	48
4b. 上外関節面深	40	41
6. 最大下端幅	49	47
7. 下端矢状径	36	-
8. 中央最大径	29	28
8a. 楊養孔位最大径	30	31
9. 中央横径	19	18
9a. 楊養孔位横径	22	21
10. 骨休間	70	75
10a. 楊養孔化凹	84	84
10b. 最小周	71	69
9/8 中央断面示数	65.52	64.29
9a/8a 楊養孔位断面示数	73.33	67.74
10b/1 良厚示数	21.32	20.72

表21 膝蓋骨計測値 (mm)

	古田A 1号人骨 男性	
	右	左
1. 最大高	39	39
2. 最大幅	47	47
3. 最大厚	18	18
4. 開節面高	32	33
5. 内切頭幅	19	21
6. 外切頭幅	29	28
1/2 頭蓋骨高幅示数	52.98	52.98

表22 股骨計測値 (mm)

	古田A 1号人骨 男性	
	右	左
1. 最大長	328	327
2. 中央最大径	15	15
3. 中央最小径	11	11
4. 中央周	44	46
4a. 最小周	37	37
4b. 頸横径	11	11
4c. 頸矢状径	12	12
4(1). 上端幅	26	25
4(1a). 上端矢状幅	26	25
4(2). 下端幅	23	21
4(2a). 下端矢状幅	23	22
3/2 中央断面示数	73.33	73.33
4a/1 長径示数	11.28	11.31

表24 頚の計測値 (mm)

	古田A 1号人骨 男性	
	上頸	下頸
右側 I <sub>1</sub>	8.75	6.96
I <sub>2</sub>	7.88	6.24
C	7.89	8.04
P <sub>1</sub>	7.03	8.92
P <sub>2</sub>	6.72	8.77
M <sub>1</sub>	8.77	12.25
M <sub>2</sub>	11.07	10.72
左側 I <sub>1</sub>	7.96	6.17
I <sub>2</sub>	7.83	8.50
C	7.03	6.02
P <sub>1</sub>	6.97	8.88
P <sub>2</sub>	6.36	6.07
M <sub>1</sub>	10.63	11.74
M <sub>2</sub>	12.95	12.72
右側 I <sub>1</sub>	6.01	5.47
I <sub>2</sub>	6.36	6.07
C	7.02	7.72
P <sub>1</sub>	7.03	7.45
P <sub>2</sub>	7.50	8.35
M <sub>1</sub>	11.07	10.77
M <sub>2</sub>	11.13	10.76
M <sub>3</sub>	11.50	10.34

表23 四肢骨比(最大長)

	古田A 1号人骨 男性	
	右	左
接骨/上腕骨	79.66	-
接骨/大腿骨	57.32	-
上腕骨/大腿骨	71.95	-
接骨/大腿骨	82.44	82.89

## 総 括

長崎県北松浦郡小佐々町神崎免字古田にある古田A遺跡の1984年(昭和59年)に行なわれた範囲確認調査で、2体分の人骨が出土した。この人骨は古墳時代の終末に属する人骨と考えられており、また保存状態は良好なもので、長崎県では出土例の少ない時期の資料だけに、きわめて貴重なものである。また、人類学的観察や計測を行なった結果、興味ある所見も認められた。その所見は次のように要約することができる。

- 1号人骨は、左側上半身部が攪乱を受けていたが、大部分は埋葬状態で出土し、2号人骨は散乱骨で、残存していたのは頭蓋の一部である。
- 1号人骨は壮年の男性骨と推定した。
- 1号人骨の頭蓋最大長は176mm、頭蓋最大幅は139mm、バジオン・ブレグマ高は140mmで、頭蓋長幅示数は78.98、長高示数は79.55、幅高示数は100.72となり、頭型は中・高・尖頭型に属している。また脳頭蓋の全体の径はやや小さい。
- 顔面頭蓋の計測値は、中顎幅が101mm、顎高が115mm、上顎高は64mmで、顎示数(V)は113.86、上顎示数(V)は63.37となり、顔面頭蓋は低・広顎である。
- 鼻根部は狭く、鼻骨の隆起も強く、鼻根部には現代人的特徴が認められる。
- 下顎骨は、下顎角が著しく外反しており、またオトガイ隆起も著しく強い。
- 上腕骨は、長さはあまり長いものではなく、骨体の扁平性は強くないが、三角筋粗面の発達は良好である。
- 大腿骨も長さはあまり長いものではなく、また、粗線や骨体の後方への発達は強くはないが、骨体上部はやや扁平である。
- 脛骨は長さが短く、骨体も細いが、扁平である。
- 右大腿骨最大長からの推定身長値は158.39cm(Pearson)で、低身長である。
- 以上述べてきたように、本例の頭蓋には現代人に通じる特徴が認められた反面、下顎骨にはこのような形態には似つかわしくない特異な形態も観察された。また同時にこのような特徴は西北九州地域の弥生時代人の特徴からは類推することのできないものであり、今後は遺跡の立地を考慮に入れ、周辺地域との関りあいをもっと明確にしていく必要があるようである。本例に認められた特徴が西北九州地域の古墳時代人に共通したものかどうかは、本県や周辺地域の例数が増加するのをまって、さらに詳しく考察していくつもりである。

《拙筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、長崎県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

## 参考文献

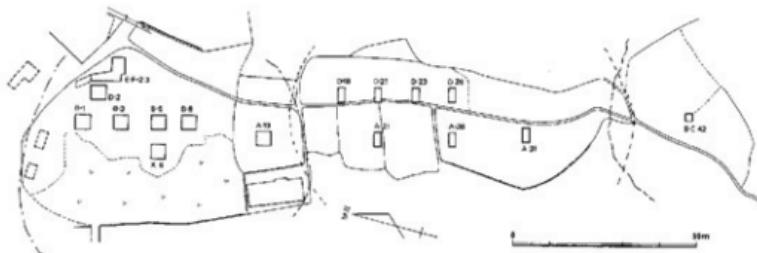
1. 栗田和行, 1967 : 西北九州人大腿骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 42 : 313-324.
2. 森田恒太郎, 1949 : 頭の計測規準について。人類学雑誌, 61 : 27-32.
3. 久松 嶽, 1969 : 西北九州人脛骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 44 : 718-728.
4. Howells W.W., 1974 : Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol. 67.
5. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
6. 松下孝幸, 1981 : 大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書 1) : 223-253.
7. 松下孝幸, 1982 : 山口県朝田墳墓群第II地区出土の人骨。朝田墳墓群V (山口県埋蔵文化財調査報告第64集) : 179-206.
8. 松下孝幸, 野田耕一, 1983a : 宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 26 : 78-107.
9. 松下孝幸, 他, 1983b : 山口県山口市朝田墳墓群第II地区出土の人骨 - 総括篇 - 。朝田墳墓群VI (山口県埋蔵文化財調査報告第69集) : 219-242.
10. 松下孝幸, 他, 1983c : 山口県豊浦郡豊北町上井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報 (豊北町埋蔵文化財調査報告 2) : 19-30.
11. 松下孝幸, 1984 : 宮崎県野尻町大森地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 27 : 53-111.
12. 森田 茂, 1950 : 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集, 第三輯 : 1-59.
13. 内藤芳篤, 1971 : 西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌, 79 : 236-248.
14. 内藤芳篤, 分部哲秋, 1980 : 清水1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓 (熊本県文化財調査報告第41集) : 22-28.
15. 鈴木 尚, 1963 : 日本人の骨。岩波書店, 東京。
16. 八木 治, 1970 : 西北九州人上腕骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 45 : 22-33.

## IV おわりに

古田遺跡の立地は砂丘上に位置しており、その砂丘の発達に合わせて遺跡の拡がりも見られる。この地形はもともと、日本本土最西端の岬のある領域の部分は島として独立していたもので、島と島が繋ったのは縄文時代以降と考えられる。

遺跡の拡がりは、先ず南の奥部に縄文時代中期と後期の土器の出土を若干見たが、この付近は枝状に谷が入り込んでおり、あるいは、その周辺にも及んでいるとも考えられ古田B地点も好条件を備えている。縄文晩期についてはD-18からA-31グリッドの間において包含層が認められ、この時期における砂丘の発達は中央部まで達していたことが窺われる。上器から判断すると、条痕文を主体としたものが多く、精製土器では黒川式土器も見られる。また粗獣土器も1点であるが出土しており、全体的には晩期中葉である。この時期には附近の距離にある宮ノ本遺跡の影響を強く受けていると思われるが、本遺跡の場合は小規模かつ短期間のうちに終わっている。弥生式土器は包含層が確認されないまま数点の出土にとどまった。墓地の確認も出来ず、生活の痕跡は窺えない。

今回の調査の中で多くの資料が得られたのが古墳時代の遺物である。土器が殆どを占め、土師器、須恵器が主である。時期的には4世紀から8世紀まで幅広い時代の差が見られるが、主体は、4世紀後半から5世紀初頭である。県下におけるこの時期のまとまった資料としては、<sup>第21</sup>田平町里田原遺跡や大村市大堂遺跡があげられる。またこれらの土器の他に注目すべき遺物の出土があった。それは、陶質土器と無文土器である。陶質土器は3点であるが、1点は口縁部を除きほぼ復原可能な、全面に叩きで仕上げられた赤みを帯びた軟質の土器であり、灰色みを帯びた軟質のものも含まれ、また無文土器の口縁につけられる断面円形の縦状のものも見られた。県下では、対馬、壱岐を別とすれば、半島系の遺物の出土は限られてくる。



第28図 調査区域と各時代の拡がり

五島列島の北端に位置する小値賀町の黒島に、東に突き出した細い岬があり神ノ崎遺跡が所在する。この遺跡は、弥生前期末から古墳時代後期にかけての墓地が営まれ、板石積の石棺(石室)墓などに伴って良好な資料が出土している。その中で5世紀後半～末頃と推定される31号石棺墓より陶質土器が発見されている。報文によると、器表には全面に細かい繩文を縦位に施し、胴部に2本の沈線がめぐる灰色を呈した、軟質の壺型土器である。本遺跡の場合には格子状の叩きであるが、時期的に考えても大差ない。また無文上器については、里田原遺跡において弥生中期頃に伴って1点確認されている。ただ本資料の場合は丸い部分だけであり、確実な比較資料に貢献するところがある。本遺跡における半島系の資料の出土は、対馬・壱岐・五島と本土の西北沿岸地域との交流の一端を示すものと考えられる。

遺構の面では柱穴の検出が認められたが、地質が砂地ということや、範囲確認という性格上今後の機会にゆだねることにした。

調査中期得されたことは、人骨が何件出土するかという点にあった。イモガマを掘った際出土したと言われた人骨は、数体に及んだということであったが、良好な状況では1体のみであった。しかし、この仰臥伸展幕の男性人骨は上面に配石があり、副葬品として刀子およびアワビ貝が置かれていた。アワビ貝やイノシシ下顎が被葬者の頭部や体部に置かれていた例は、五島列島の福江島に位置する大浜遺跡<sup>5</sup>や、有川町浜郷遺跡<sup>6</sup>に出土例を求めることが出来るが、これらの時期は弥生中期を主体としている。従って本資料とは時期的な差が見られるが、魔除的な習俗として引き繼がれてきたものであろうか。

いずれにしても古田遺跡の場合は、縄文時代から古墳時代に至るまで、海に依存した生活環境が考えられるのである。最後に、今回の調査は範囲確認の域を出ない基礎的な調査であり、初期の目的は達したが、遺跡の全体像を完全に把握するまでは至っていない。しかし今後はB地点とともに、遺跡の保護と活用を考えていくことが必要であろう。

(安樂)

註1 佐世保市教育委員会『宮の本遺跡』1961

2 田平町教育委員会『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第2集 1960

3 長崎県教育委員会『大寺遺跡』『長崎県埋蔵文化財調査集報II』1979

長崎県文化財調査報告書第45集

4 小値賀町教育委員会『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第4集 1984

5 長崎県教育委員会『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第2集 1964

6 小川富士雄『五島列島の弥生文化』総説編一 長崎大学医学部解剖学第二教室

人類学・考古学研究報告2 1970

図 版



遠景



近景

古田 A 遺跡

図版2



遠景

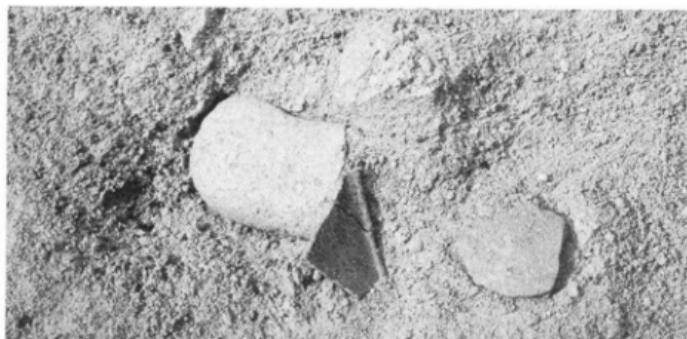


古田B遺跡

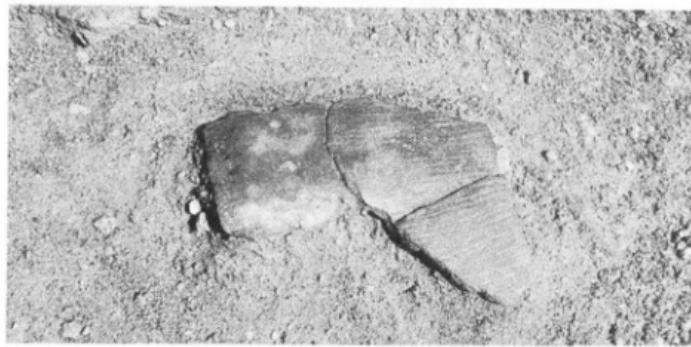
近景



発掘調査



出土状況



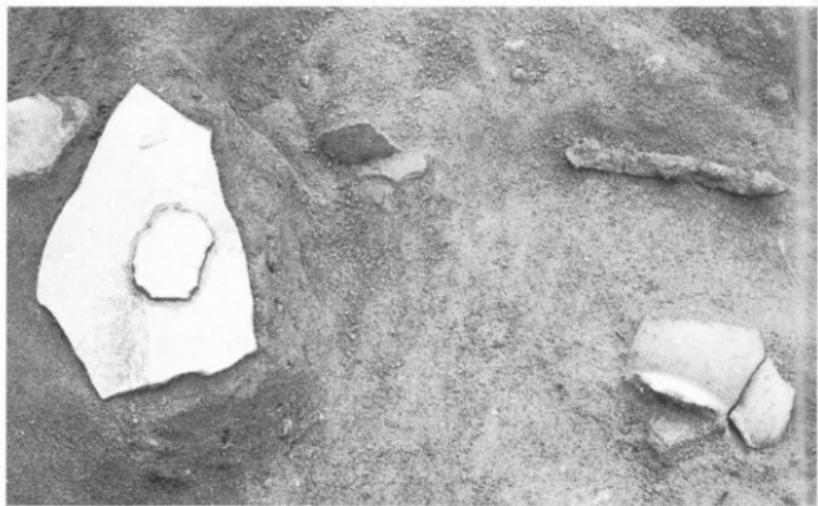
調査・出土状況

出土状況

図版 4



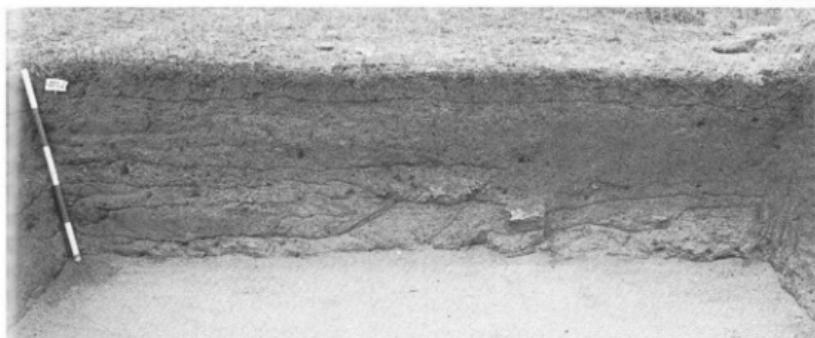
出土状況



遺物出土状況

出土状況

図版5



B-3 東壁



B-6 東壁



土層

B-8 東壁

圖版 6



A-13東壁



A-21北壁



D-26北壁

土層

図版 7



出土状況



B-3区 集石状況



調査・出土状況

人骨発掘調査

图版 8



1号人骨出土状况

図版9



説明会



説明会・遺物出土状況

出土状況

图版10



出土状况



遗物出土状况

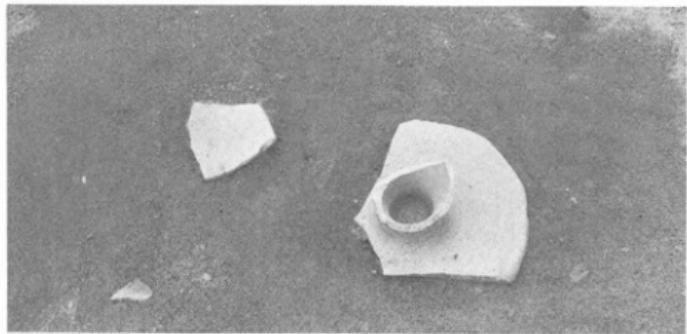
出土状况



出土狀況

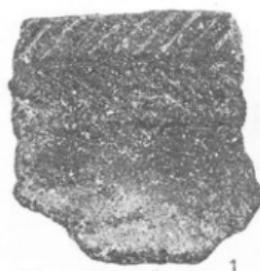


發掘調查



調查・出土狀況

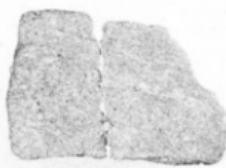
図版12



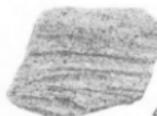
1



2



3



4



5

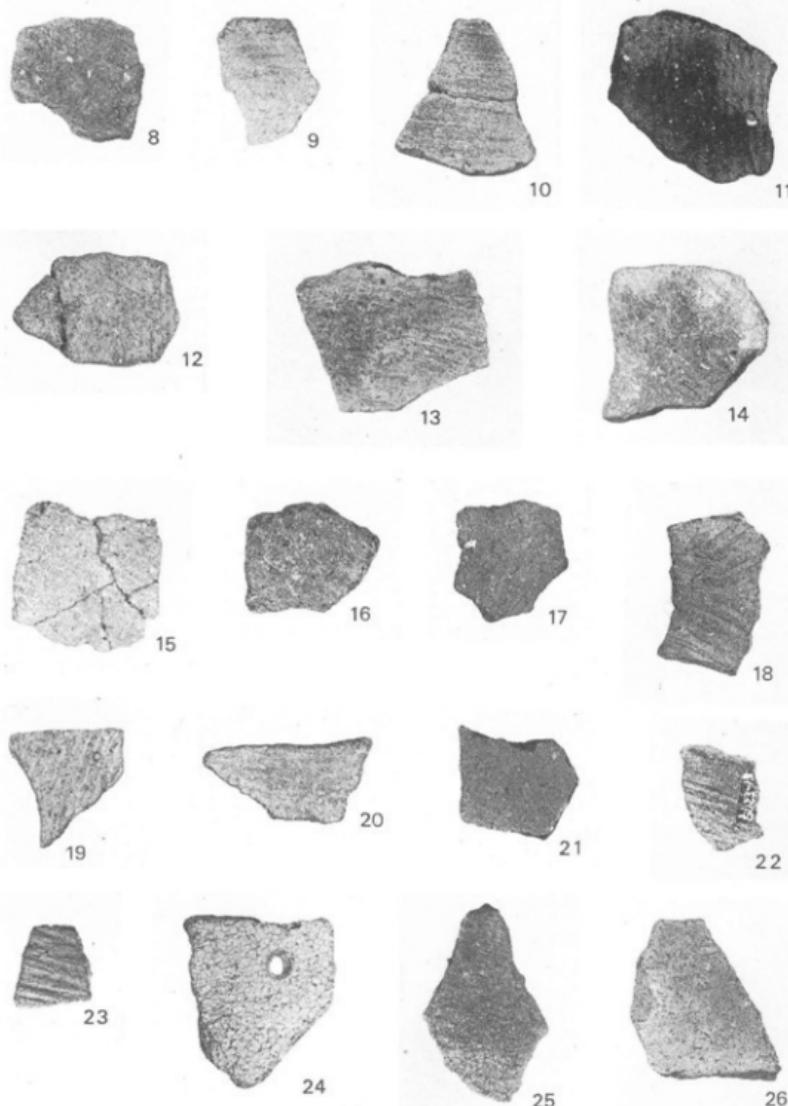


6



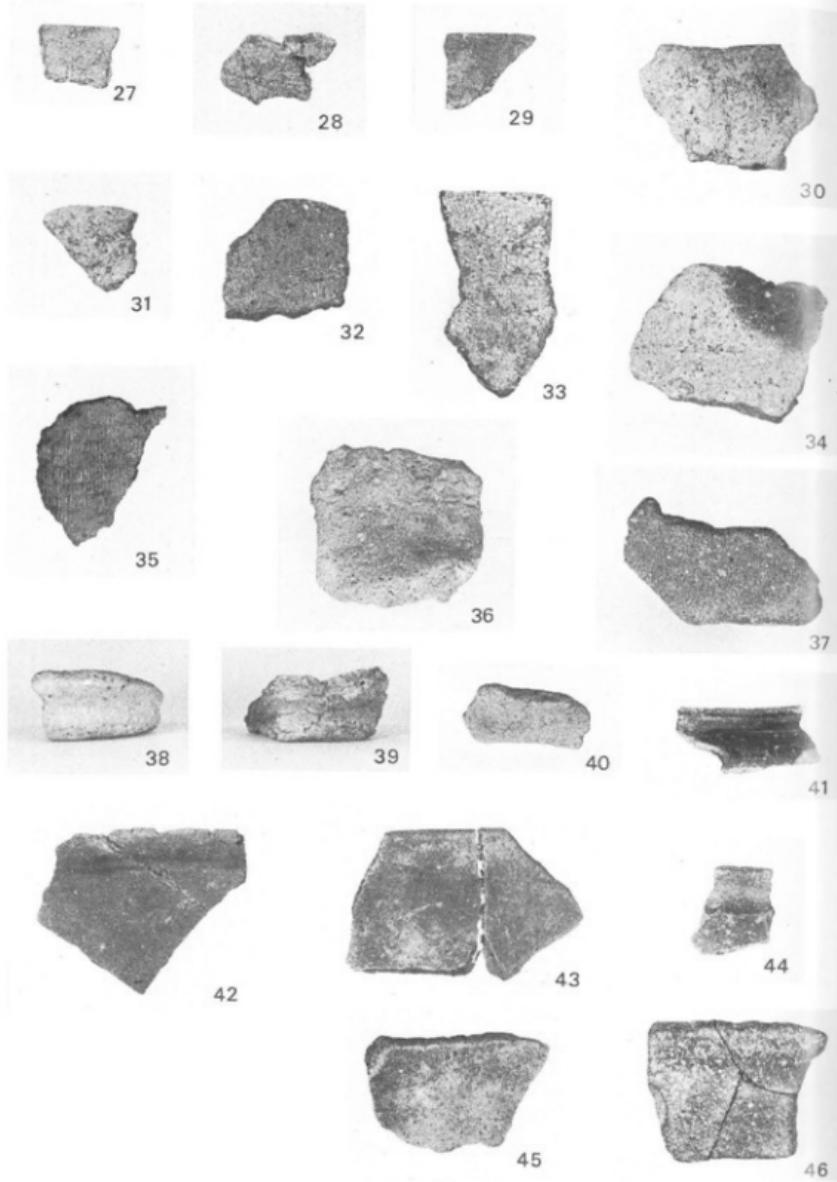
7

縄文土器① (3/4)



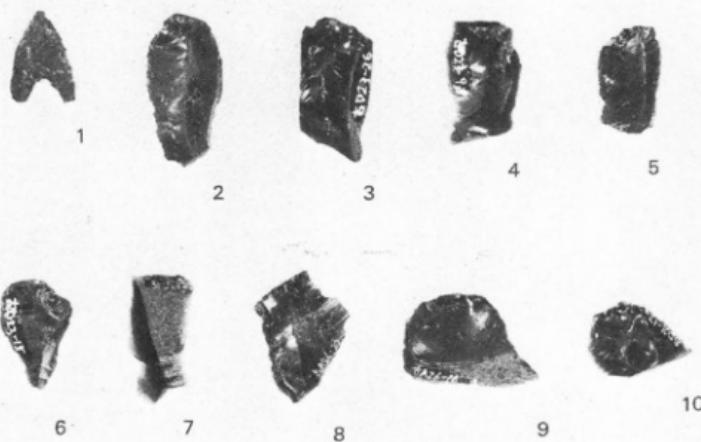
縄文土器(2) (Yayoi pottery)

図版14



縄文土器(3) (3)

図版15



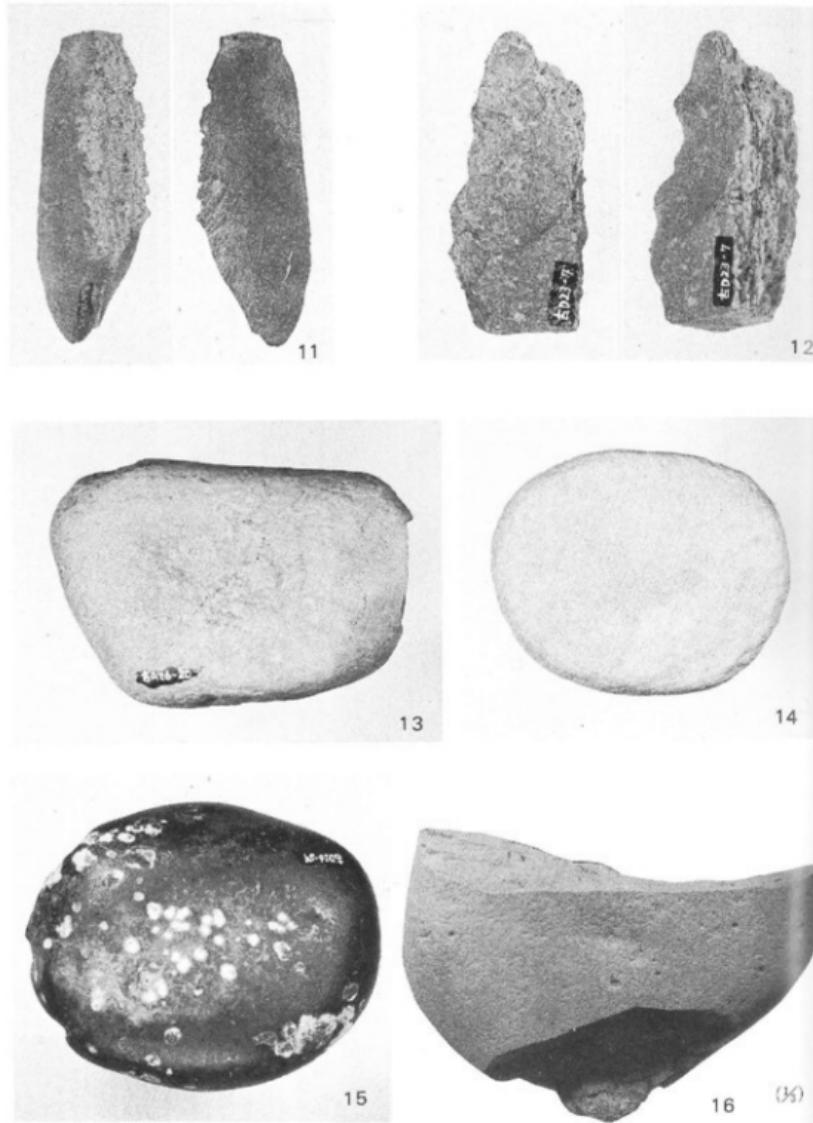
(表)



石器① (3)

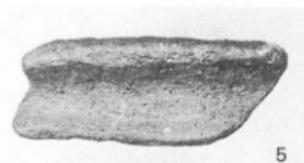
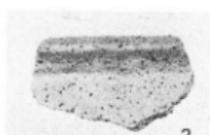
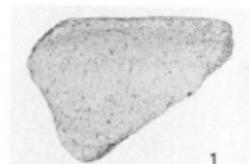
(裏)

図版16



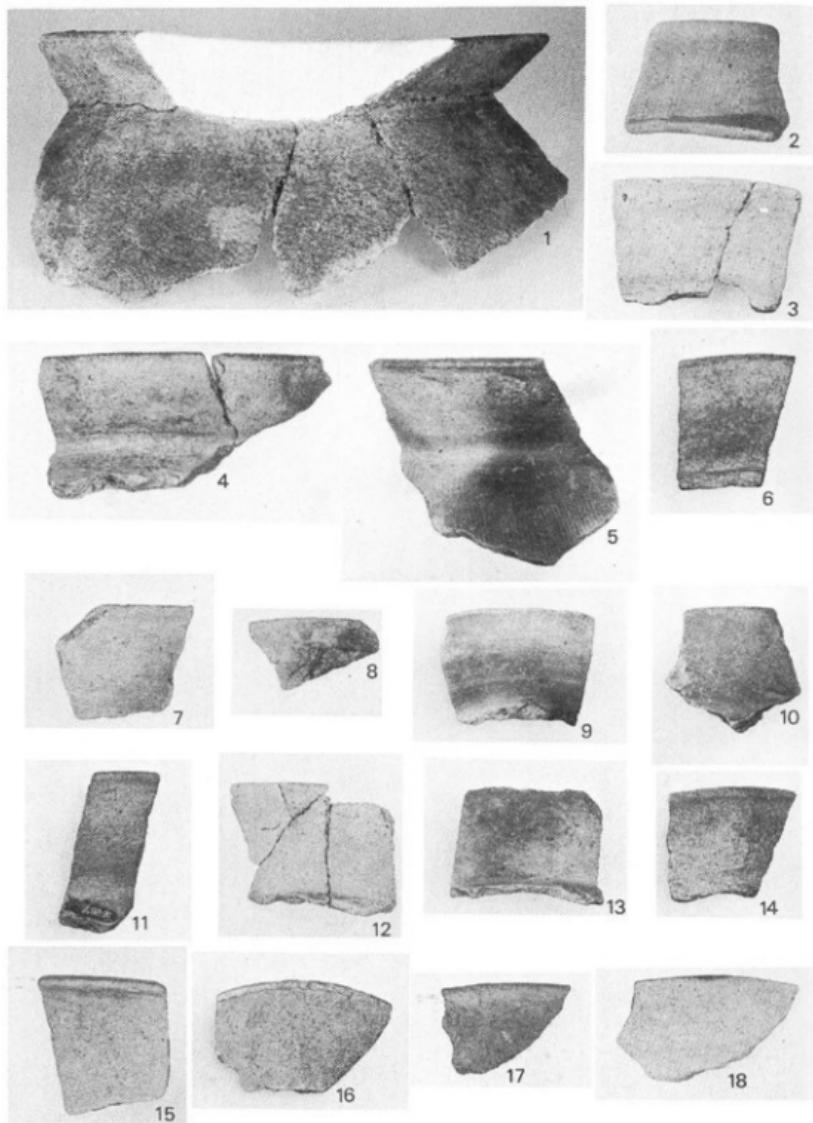
石器② (1/2)

図版17



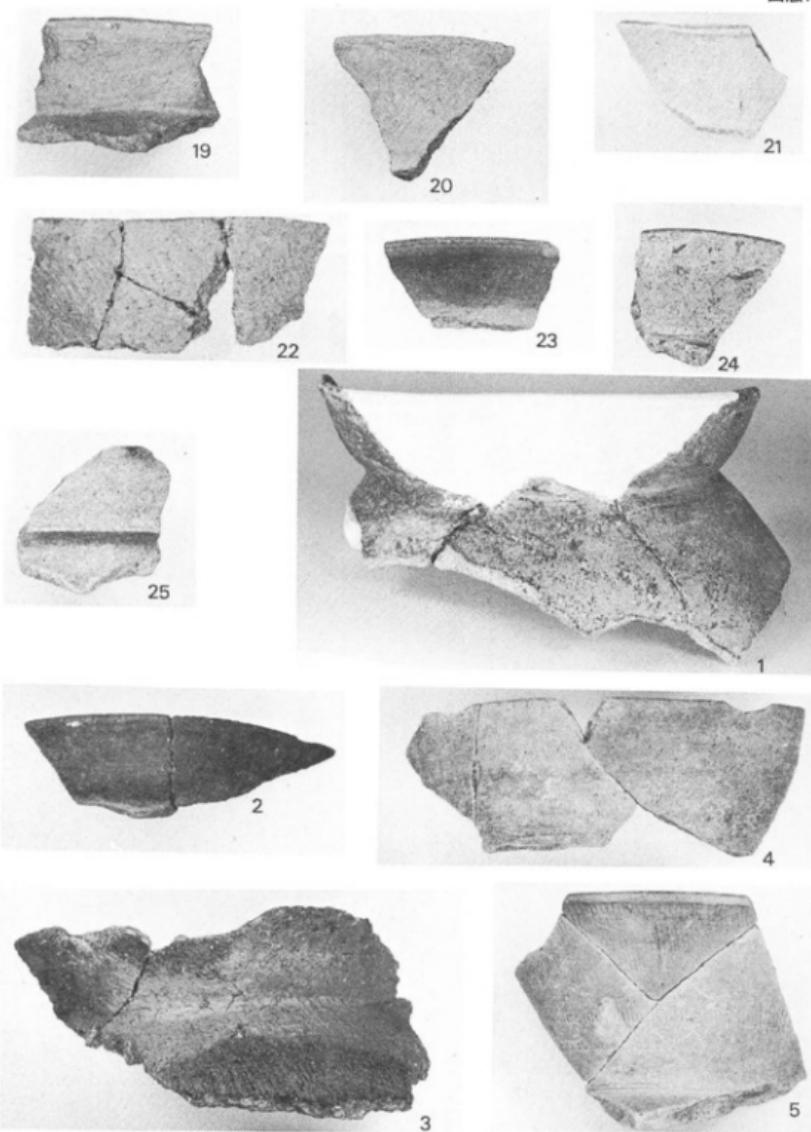
弥生土器

図版18

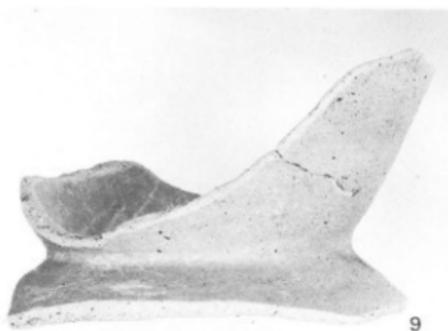
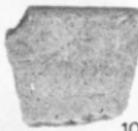
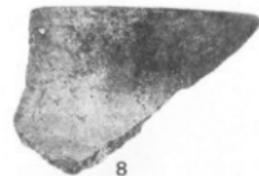
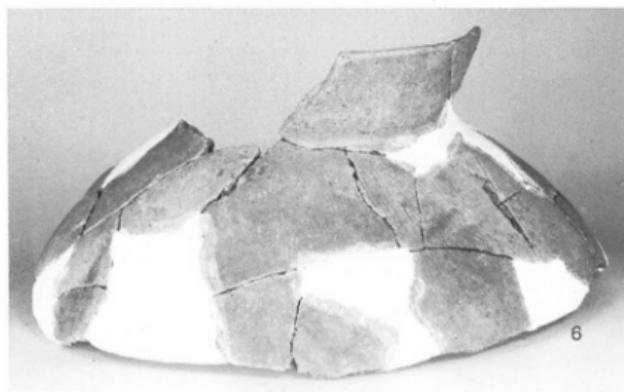


土器①

図版19

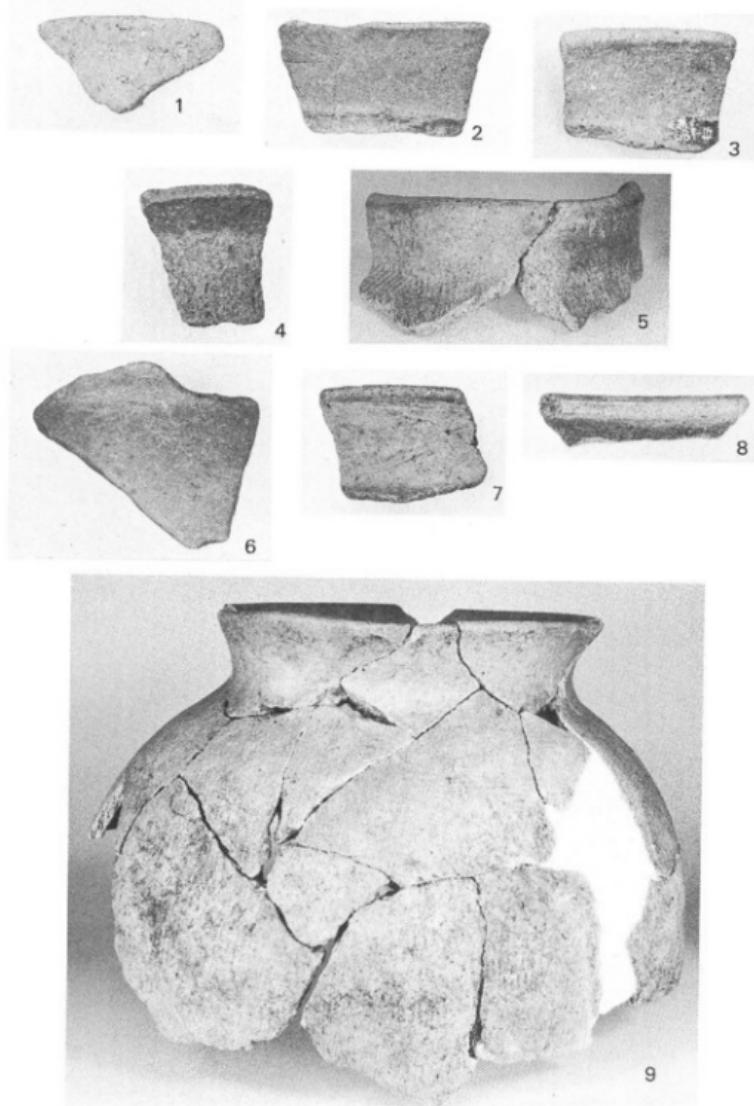


土師器②



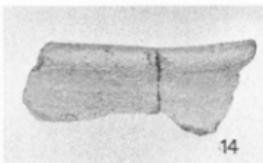
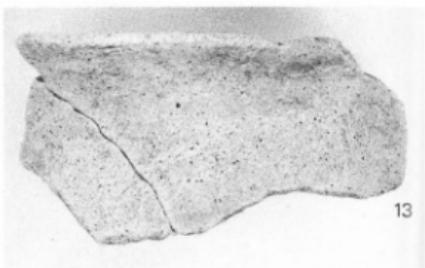
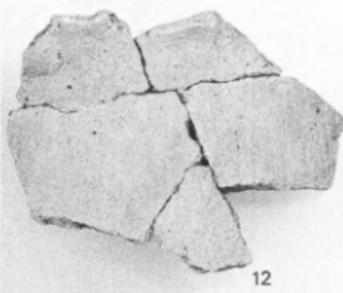
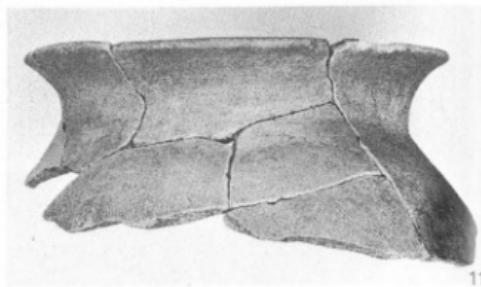
土師器③

图版21



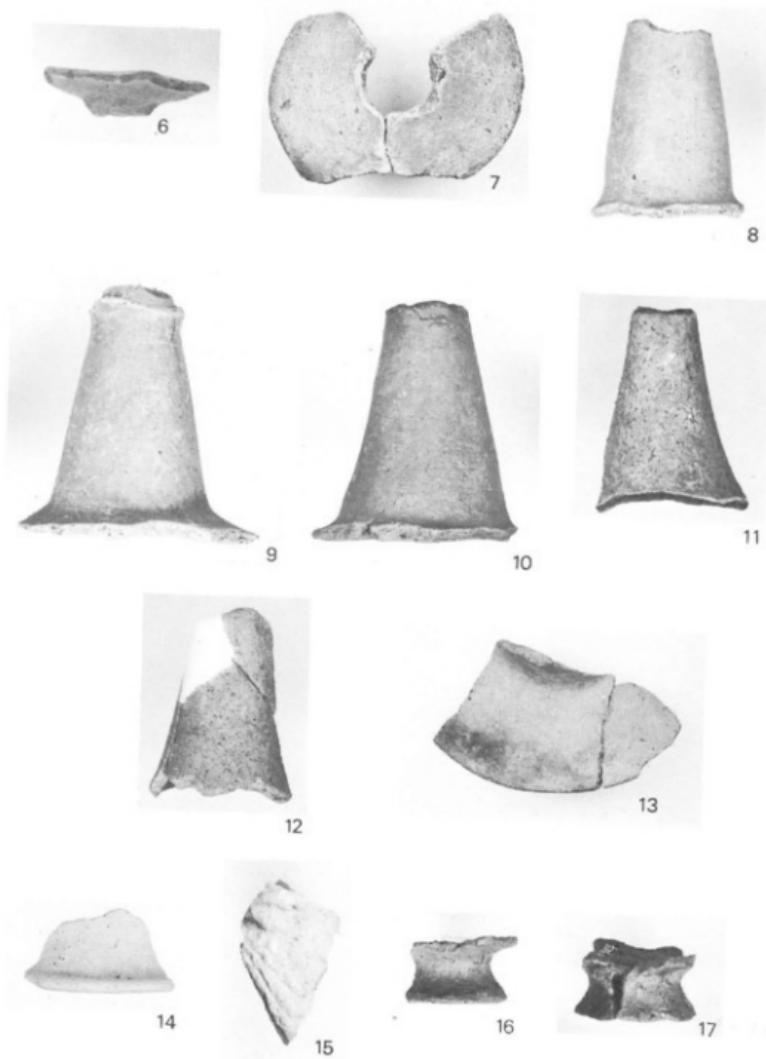
土器④

図版22



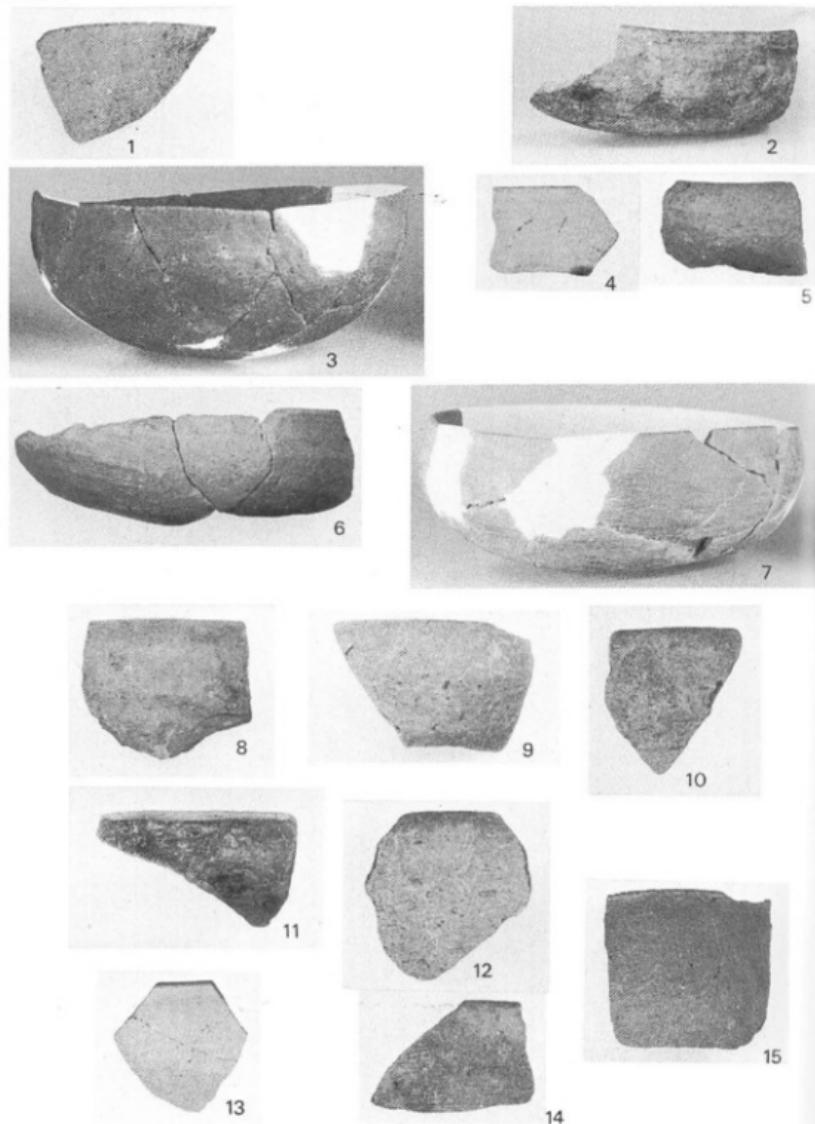
土師器⑤

図版23



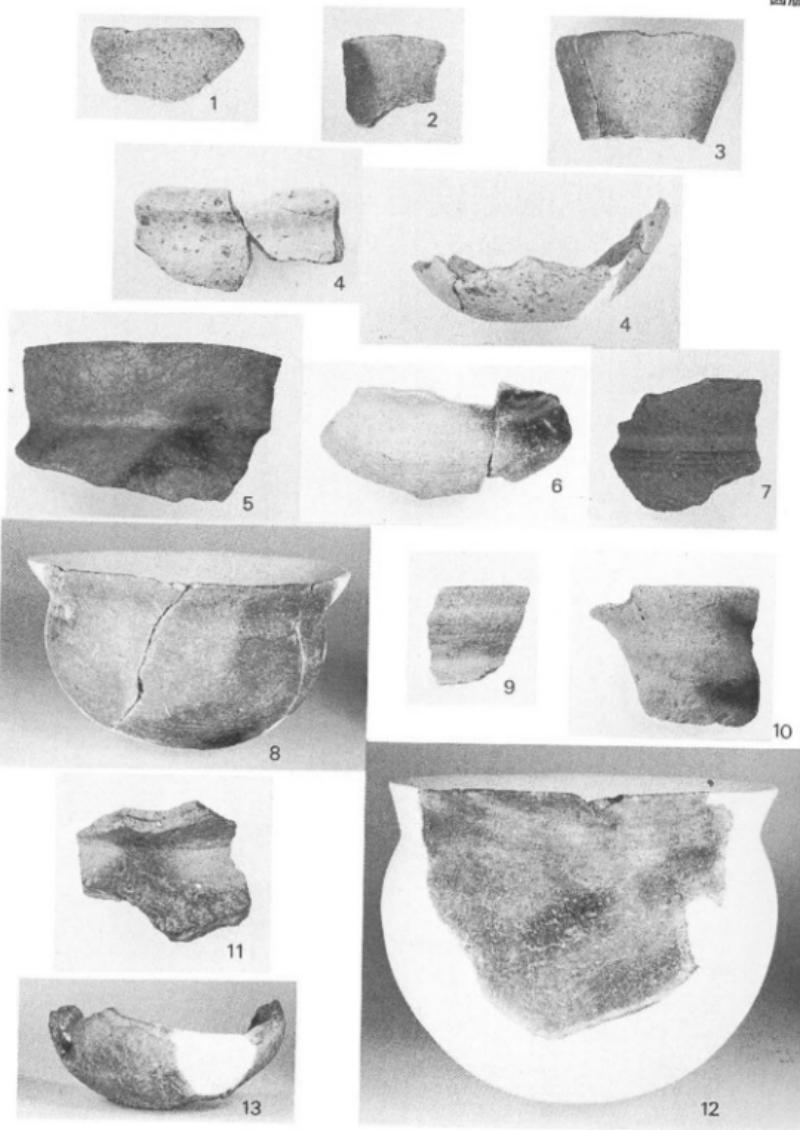
土器(6)

図版24

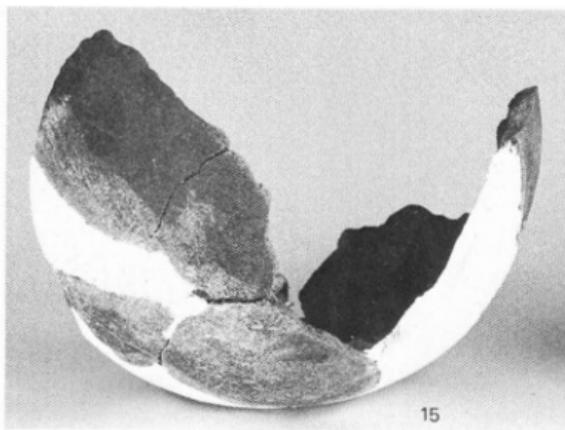
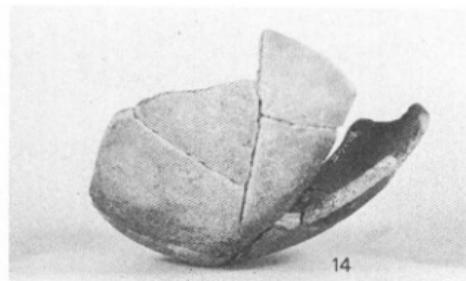


土器⑦

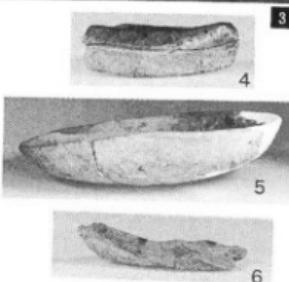
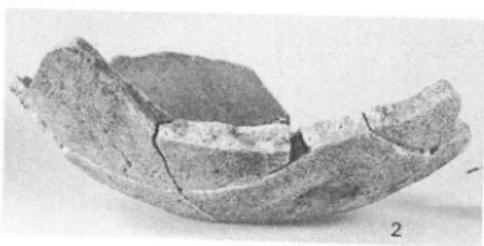
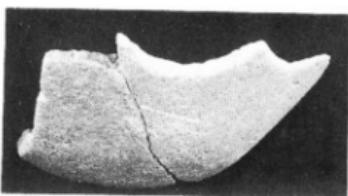
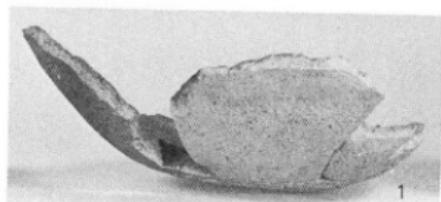
図版25



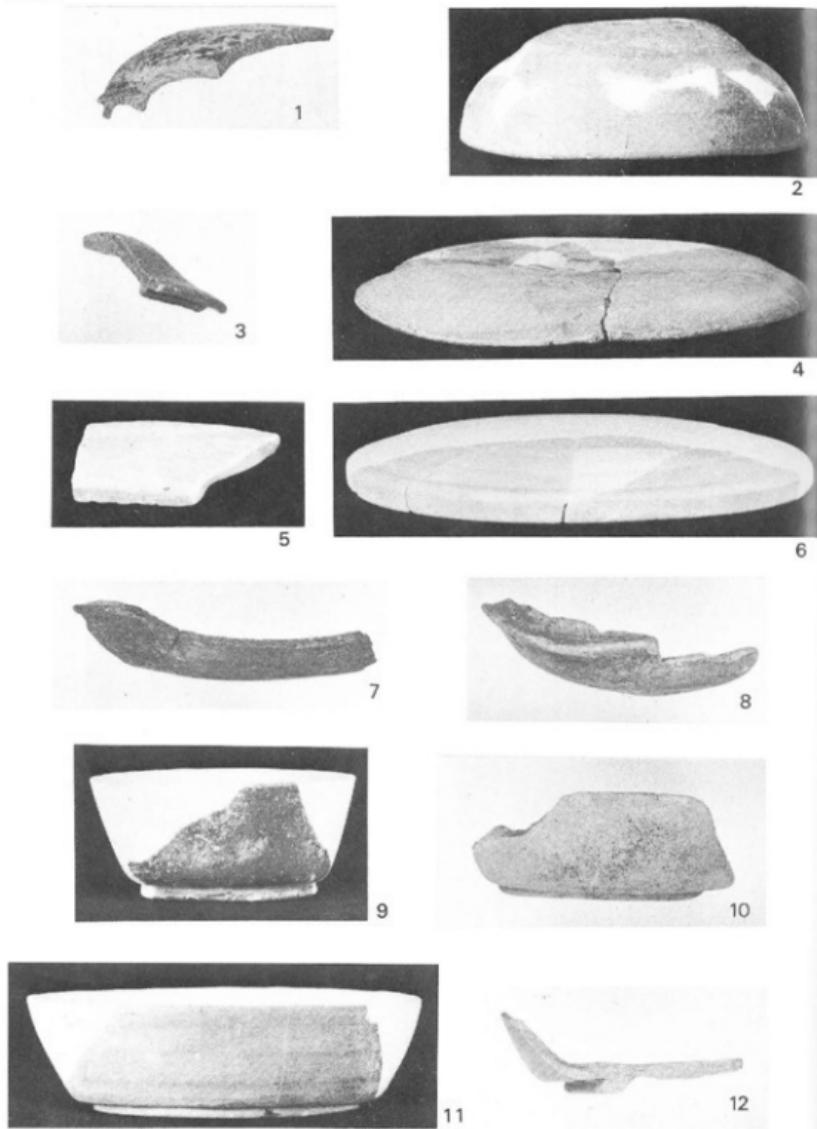
土器(8)



土師器⑨

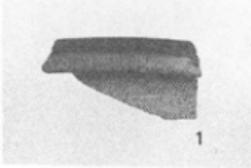
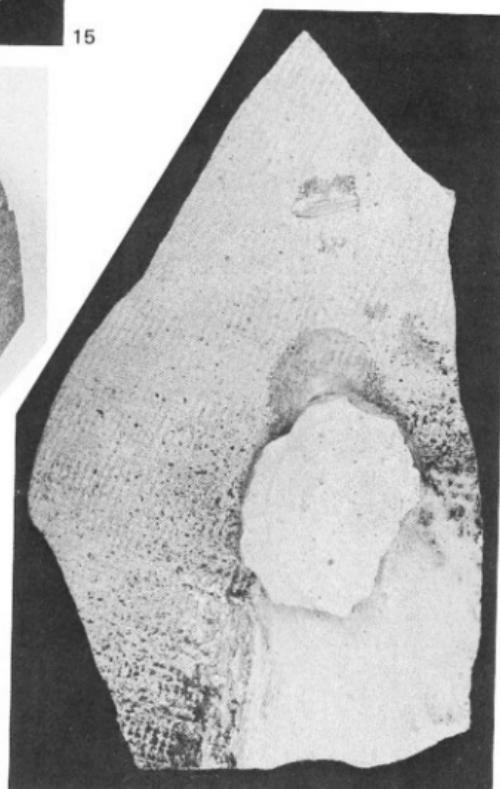
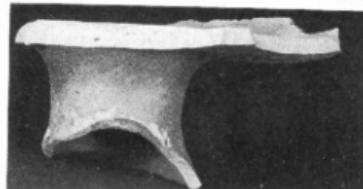
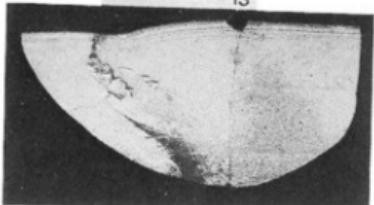


土器器 鉄器



須惠器①

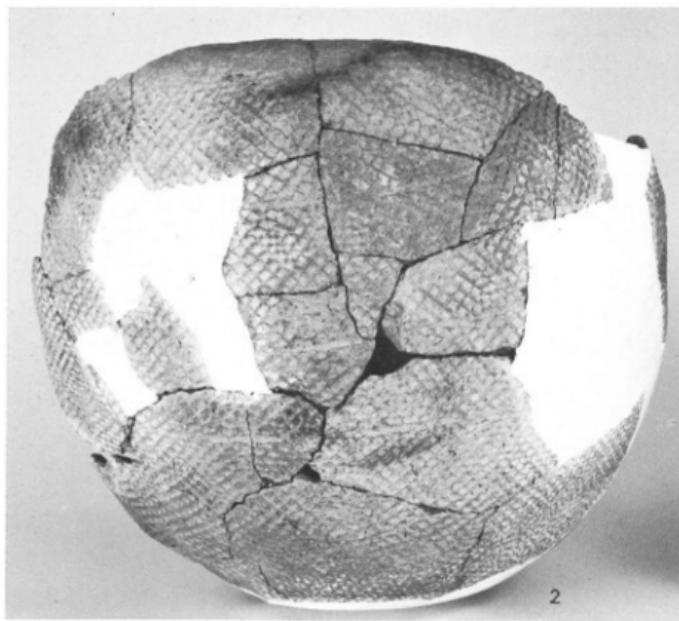
図版29



須恵器②



1



2

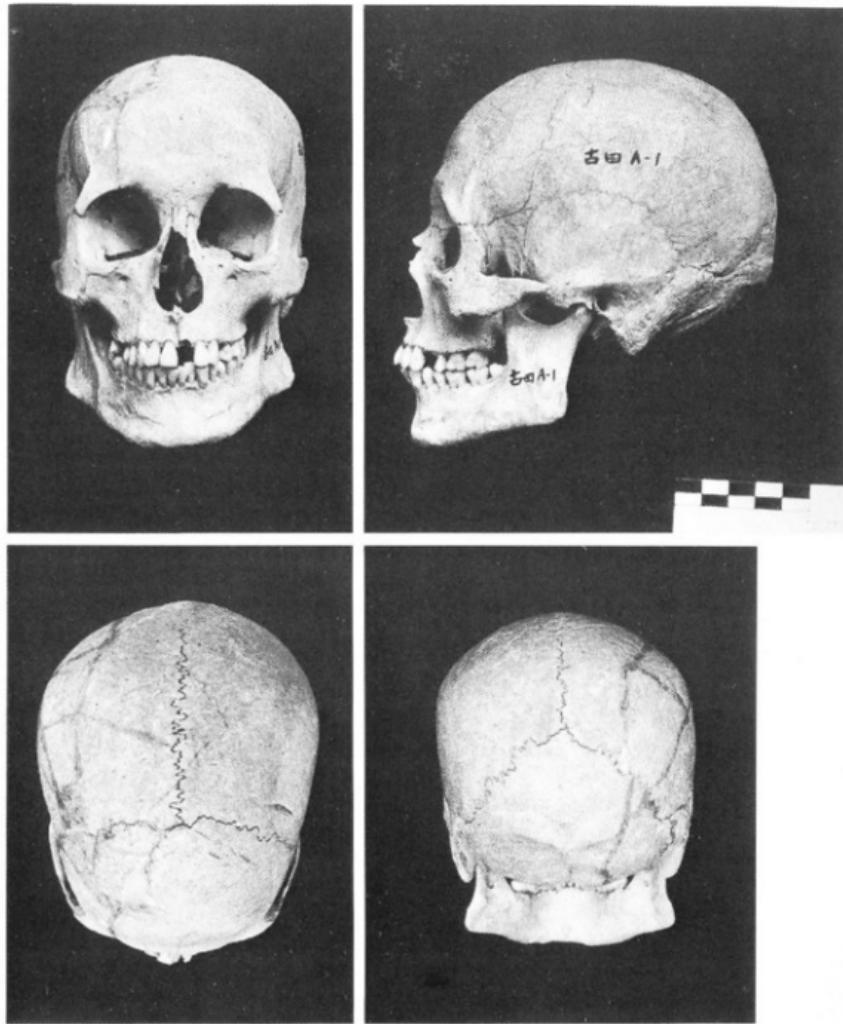


3



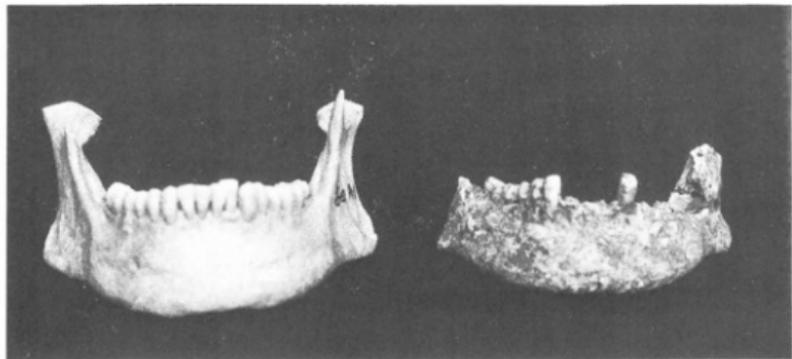
4

朝鮮半島系の土器

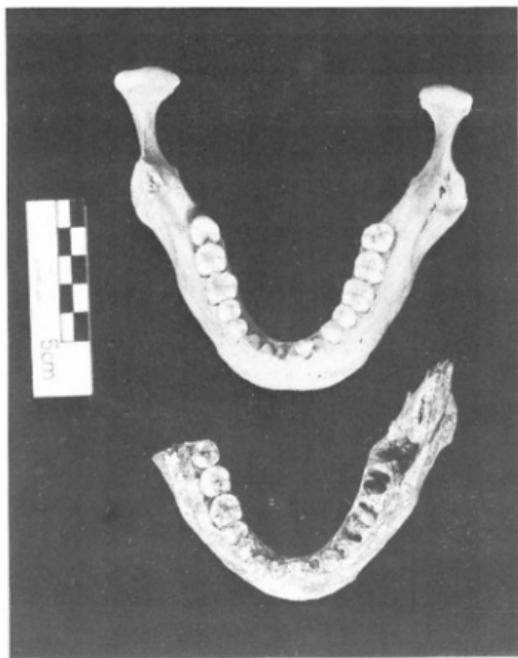


1号人骨（男性・壮年）上左：正面、上右：側面、下左：上面、下右：後面

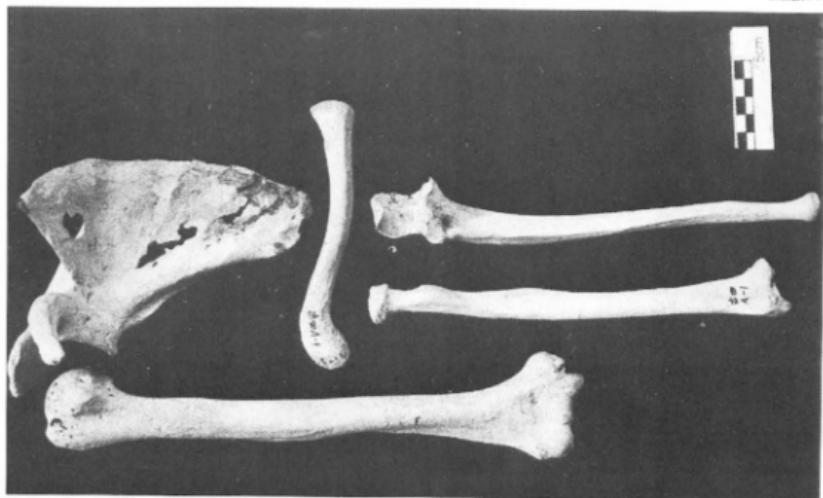
图版32



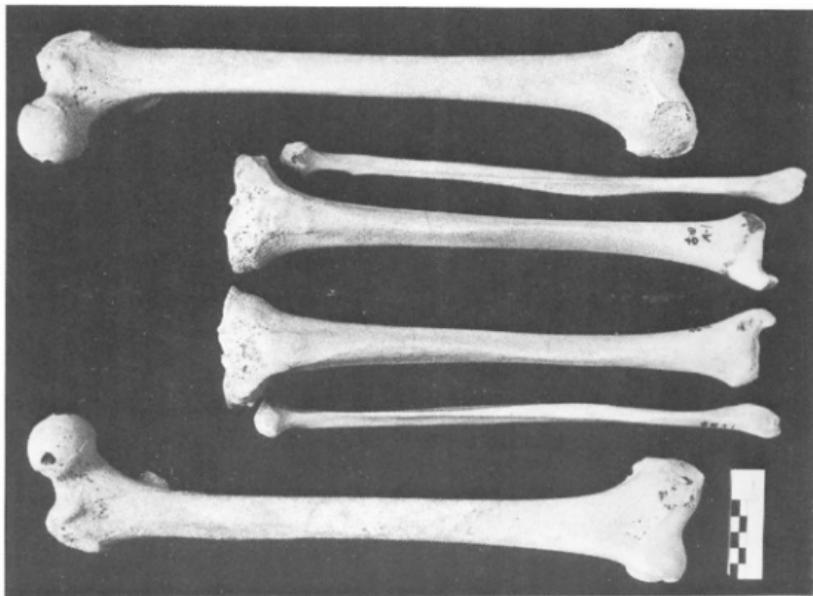
下頸骨正面（左：1号人骨，右：清水古墳出土人骨）



下頸骨上面（上：1号人骨，清水古墳出土人骨）



1号人骨 (男性·壮年) 上肢骨



1号人骨 (男性·壮年) 下肢骨



調査に参加した人達

小佐々町文化財調査報告書第1集

## 古 田 遺 跡

昭和60年3月31日

発行 長崎県小佐々町教育委員会

〒857-04 北松浦郡小佐々町西川内免143番地

印刷 川口印刷株式会社

〒851-01 長崎市田中町1020-7